
CuRe

うり南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cure

【Nコード】

N4709F

【作者名】

うり南

【あらすじ】

主人公である松葉幸一（まきはつこういち）は都会に嫌気がさし、かつて自分が住んでいた町に戻ってくる。その町には昔と変わらずに自分を迎えてくれる仲間が待っていてくれた。しかし彼は後悔していた。一番大切な人を助けることができないのだから

日常

C u R e

作：うり南

プロローグ

序章

俺は目を覚ました。景色は変わらず青色の空に入道雲、それに風にゆれる田んぼの稲穂に山の木々、そして時々暗くなり自分の姿が見える。

俺はまだ目的地に着いていないこと確認すると、またまぶたを閉じて時がたつのを待つ。

駅に着いた頃には日も暮れて景色も赤く染まっていた。

ここからはまた三十分ほど歩かなければならない、この重い荷物を持っただ。

俺は中に入っているお茶を飲み干し覚悟を決めて荷物を持ち歩きはじめた。

人は誰もいない、駅員すらいない無人駅である。俺は改札口をでる、そのとき。

「えっ！？それはどういう・・・」

「あっほら来たよ」

赤く染まった景色の中、それ以上に赤く染まった顔、一瞬の笑顔、そして涙、さらに走って近づくにつれはつきりとわかる磨きのかかっただかかわい顔に長い髪。

「かわりすぎだろ、あれ」

「はいはい、私をみて言わない」

「相変わらずなのか？」

俺がそういうと朝鈴は一瞬止まり。

「そうね、過酷よね、あんだけのめにあつたのに、でもいじめだけはなくなった、あんだ達があんなことしたからね」

予測はしていた。しかし、あまりにも悲しいげんじつである。

そして、長い髪の少女高橋 夕が俺の前にくる。

俺は昔のようにハンカチで涙を拭いてやる。

「あんたまだそのハンカチなの？あきれた」

俺は朝鈴の言葉を無視して夕に見えるように手を構えるそして手を動かす。

『夕ちゃん、久しぶり元気だった？』

そして、夕も手を構えて

『うん、元気だよ、でもすごく寂しかった』

そう、これは手話であり、耳に障害がある人の会話の手段である。
高橋 夕という少女は生まれつき耳がわるく、一時期回復のきざし
をみせたが、今はほとんど聞こえない。
そして、夕は姉の朝鈴に向かって

『ずるいよ姉さん、コウ君と二人きりで話すなんてジャンケンに負
けるんじゃないかった。』

ちなみに俺の名前は松葉 幸一であり、コウと呼ぶ人物はかぎられ
ている。

「しかたないじゃない、コウいつくるかわかんないんだし、一応あ
の親父なにかいわないと心配するし」

「おまえ、夕ちゃんにそのまんま話して通じるわけ・・・」

『そりゃそうだけど、私もコウ君とすぐ会いたかったのに』

「なんで通じてるの?」

「あっそういえば、あんた知らなかったんだっけ、なんたってこの
夕は私達の高校で頭が一番いいの、だから口の動きを見てどの言葉
があてはまるかわかるの」

「そうかそうか、やっぱり姉とは違うな」

そういつて俺は昔のように頭をなでる、嫌がられるかと思ったが顔を真っ赤にさせてとても照れている。
こういうのはとてもなごむ。

『じゃちよつとテストね、今から言うことを手話で姉に返してくれる？』

夕はうなずくと横目で俺を見ながら姉のほうに立って構える。そして俺は口パクで

「私、姉さんより美人なの」

『私、姉さんより美人・・・』

そこで動きが止まり夕は朝鈴のほうを見る、その姿は、まるで小動物が肉食動物をみるかの様だった。

俺は夕のてを引っ張り荷物を持ち走りはじめる。

不思議と重みは感じられず、どこまでも笑いながら走れるような気がした。

すぐに朝鈴に蹴られて止まってしまったがみんな笑顔で四年のブランクなどまったく感じなかった。

三十分ぐらいたつと周りにはもう真っ暗で、しかし、外灯がなくても月明かりだけで十分で、月が大きく感じられる。

俺が住む祖父の家と高橋姉妹の家は隣である、とはいっても三メートルほど離れている。

俺は荷物を置き祖父にこれからお世話になるため丁寧にあいさつした。

しかし、二人とも笑顔で同時に言ってくれた。

「「おかえりなさい」」

と、今の俺にはとても暖かい言葉だった。

「本当は疲れてるから明日のほうがいいっていったんだけどね」

「大丈夫だ、幸一はまだ若いからな、久々に杯でもかわそうじゃないか」

ちなみに今から行われるのは高橋家での歓迎会らしい、俺は祖父母に先にいって挨拶しなさいといわれたのでさきに行くことにした。

田舎なので土地が安いのもあるがそんなこと関係なく異常なほどこの高橋家は大きかった、昔はよく迷子になり大変なことになった記憶がある。

俺はベルを押すとおそらく朝鈴が走ってくる音がした。

しかし、途中でこけたらしい、ドンとおとがした。

しかし、ドアを開けたのは朝鈴だった。

どうやらこけたのは夕らしい

「なんだあんたか」

そういってドアを閉める。

「まてまて、歓迎される人追い出しますか普通」

仕方なく俺は昔使った庭の木を上って二階の当時空き部屋だったと

ころから入ることにした。
昔より多少簡単に上り入ることができた。
すると俺はクラツカーの嵐に遭うことになった。
どうやら最初からここで行うらしかった。
飾り付けもばっちりである。

「遅い」

「おまえにそれをいう資格はない、あつ夕ちゃん大丈夫だった？」

夕は鼻を赤くしていたが笑っていた。

「相変わらず夕には甘いよな」

「まったくだ、せっかく愛の男四人衆がそろったというのに」

「・・・うつ、それ気持ち悪い」

「久しぶり〜コウ〜、元気してた？こんなカツコよくなっちゃって、夕、コウ私にちょうだい」

夕は顔をぶんぶん横に振る、俺は夕の持ち物ではないのだが、

「香だよな？変わんないね」

「それ今の私には微妙に悪口と感じるんだけど」

「僕たち無視ですか」

「まったくだせっかく愛の男四人衆がそろったというのに」

「・・・もうそれいいよ」

「悪い悪い、えっと三人合わせて、金剛力士！！だったよな」

「一人もかすつてない！しかも自信まんまんだし」

「まゝしかたないそれも親友」

「悪い悪い鏡介久しぶり」

「おおーさすが無二の親友よ、俺たちの愛は夕など敵ではない！！」

「あと団」

「・・・ひさしぶり、会いたかった」

「そうだったよな、俺たち四人の名前の頭文字を取って公共団体だったよな、当時は先生がつけてかつこいっておもってたけどな、な力士」

「どっからそれくるよ」

その後みんなで思い出話しに花をさかせる。

夕にもわかるようにみんなある程度ゆっくり話す、ここらへんのやさしさは当時から変わらない、本当にいいやつらだ。そんな楽しいのもつかのま

「しかし、あれはうけたな、学校の池にドジョウ入れまくって、それにシート引いて土かぶせて」

「そうだ、あの男を落としたのだったな、まさにあの日から俺の愛は……」

「そうなんだ、じゃ鏡介が変なのはそこから？」

「もっと前からよ、私の記憶だと落としたの小四だけどこいつら幼稚園のころからべったりだし」

「そうつまり愛や友情にきっかけなどない」

「そういえば落とした男の名前なんだっけ？」

「ばっばか」

俺は必死に大河を止める、ちなみにこいつが先ほどの力士である。

「……さざなみ」

もう遅かった。

その名前を口の動きで確認した夕が急に泣き出し震えだしたのだ。

「夕ー!!」

「夕ちゃん!!」

みんなが叫ぶ、俺は必死に夕を抱きしめ頭を撫でる、聞こえないとわかっていても

「大丈夫みんなここにいる」

といい続ける。

「悪いがこれで今日は終わりだろ」

「……ごめん俺」

「謝ることなんてない、俺たちふざけてたけどさ、今思うとそれにも意味があると思うそれがその時の夕を救ったのは間違いないんだ」

「さすが我が愛の親友、臭い台詞を」

こいつのふざけてるのに意味は欲しくなかった。

「じゃまた明日な、宿題たのむよコウ」

「俺にもたのむさらばだ親友」

「……ごめん、まかせるねコウ、バイバイ」

みんな帰ったと思ったが、香は残っていた。

「どろした香？」

「いや、今思うとコウにとって夕の存在ってなんなのかな、と思うって」

「なんだよそれ」

「当時はさ、幼なじみとか、兄妹とか、そんな感じかなと思っただけ、コウが都会に出た理由も私達なんとなく知ってるからさ」

「・・・一度しかいわない、夕は大切な人で、掛け替えのない人だ」

なぜか俺は夕ちゃんではなく夕と呼んでいた。

香は一瞬固まり、笑って

「掛け替えならここにいろよ」

指をさした先にいたのは朝鈴であった。

朝鈴は顔を赤くし香を追っかける。

「じゃーね、私はあんたのこと信じてるよ、宿題みせてくれるとね」

俺はまだ震えている夕の髪をなでてさっきのようにつぶやく、しかし、心の中では

「ごめん、ごめん、ごめん・・・」

俺の手には何年か振りの涙が落ちていた。

八月三十一日

朝日で俺は目を覚ます。

最近あじわっていない心地よい風が来る。

俺は昨日のことを思い出し、はっと起きる。

昨日の歓迎会の会場だった。

足に重みを感じられる、夕がぐっすり眠っていた。

どうやらそのまま眠っていたらしい、腹の上には毛布があった。

俺は夕の頭をなでて起こさないように床に下ろす。
そして昔の記憶を頼りながらこの広い家のなかでリビングを探す。

「遅い」

「あきらかにおまえも今起きただろ」

朝鈴は目を赤くして俺の目の前に立つ。

「あれ、夕は？」

「えっまだ寝てるはずだけど」

「・・・馬鹿、あの子起きた時一人だと・・・」

「その癖まだ直ってなかったのか、まっ夕ちゃんらしいけど」

「あんたもそのちゃん付けはやめたほうがいいと思うよ」

「おまえにもつけようか？」

「なにいつてんの、私先行ってるから」

そういつてリビングに向かう朝鈴に

「あっあと毛布、ありがとう」

「なっ!?!?」

そういつて顔を真っ赤にさせて走っていく、ああいうところはかわ

いいのだが、そして俺は夕が起きる前に空き部屋に戻り起きそうもないのでしばらく頭を撫でていた。

十分ぐらいたっただろうか

「おっじゃまします」

「夜桜さん！？どうもお久しぶりです」

この人は朝鈴と夕の母親高橋 夜桜さんである。
とても二人のしかも高校の娘がいるとは思えないほど若くて美人である。

そして、俺は夕の頭を撫でていた手を離しまるで犯人が武器を持っていないことを主張するかのように手をあげる。

「あらあら〜気にしなくていいのに、それにしてもこんなに大きくなって」

「昨日はすいません。せっかくお誘いいただいたのに」

「そんな堅くならないでもっと昔みたいに自分の家だと思って使っているのよ、朝ちゃんや夕ちゃんそれに昼野さんもそれに私だってあなたを家族だと思ってるの、その証拠にほらこの笑顔見てみなさい」

とてもかわいらしい笑顔で俺も微笑んでしまう。

「じゃ夕ちゃん起きたらリビング来てくださいね、私料理頑張っちゃいますから」

「すみません何から何まで」

すると夕が目を覚ます。

俺と目が合う、そして顔を赤くする、自分の状況がわかりはじめるとものすごいスピードで手を動かす。

俺には解読できなかった。

「ふむふむ きゃーなんでコウちゃんがここに〜？」

そついいながら夕の動きにあわせて夜桜さんがまねをする。

「そつたしか私の好きなコウちゃんは都会に」

そついうと夕は夜桜さんにチョップをした。

「もう夕ちゃん冗談冗談、よかったね夕、コウちゃんず

つとあなたの髪撫でてくれたのよ、あとで二人でちゃんとリビングに来てね〜」

そついつて夜桜さんは降りていく、夕を見るとさっきより顔真っ赤だった。

俺たちはリビングに降りた。

「お〜う、幸一大きくなったな、どうだ一杯」

「お久しぶりですおじさん、その話しは後ろの二人に相談した方がいいですよ、それに今日は宿題みなければならぬのでまた今度」

「そつかいそつかい、じゃそれまでお預けだな」

そしてまるで本物の家族のように一緒に朝食を食べる。

「今日みんな何時からくるんだっけ？」

「九時からだからあと三十分ね」

「そのまえにどっちか問題みして、どれくらいのレベルかしりたいし」

すかさずタが手を挙げる。

そして夕の部屋にむかう、朝鈴も一緒である。

「うちの学校レベル高いから驚くわよあんた」

とりあえずこいつや大河がいけるレベルだ、当然問題も予想通り俺が中学に終わらせていた範囲だった。

「しかし良くできてるなタちゃん、九割以上あってるじゃないか」

俺が頭を撫でるとまた喜ぶ。

「あたりまえよ私の妹だし、学年トップだし」

ない胸をつきだしている

「ちなみにこれって復習だよね」

「なにいつてんの今やっているとこに決まってるじゃん」

明日テストがあるがどうやら問題なさそうだ、しかし

「あいかわらずのぬいぐるみの量だね」

「数えるとはてしないわね」

『50はあったと思う』

まっ女の子ということ、俺はそう結論ずけた。

「じゃそろそろ準備するか、空き部屋だよな」

「じゃ私リビング行ってるからお願いね」

『私も手伝う』

「じゃ、いこうか」

そういうと夕は俺の後ろについてくる。
そして部屋に着くと

「グーテン・モルゲン、我が愛の親友よ、そして夕よ」

「あれはやいな」

色々いいたいことはあるが鏡介はこんな所で自分を変えるやつじゃないからな

『おはよう』

「・・・おはよう」

今度は団が部屋のドアから声をかける。

ちゃんと玄関から来たらしい、そして俺はテーブルを出し準備する。その十分後、香と朝鈴もそろい、俺と夕以外は宿題をやりはじめる。

「そういえば、コウ宿題の範囲見なくていいの？明日テストあるよ」
香が聞いてきた。

「さつき範囲みしてもらったし問題ない」

「さすが我が親友、これはどうか？」

そういつて鏡介が左手で色んな動きを見せる。
そしておれもそれを返す

「・・・さすがコウ」

「あんたよくそんなのわかるわね、わたしなんかになにやってるのかさっぱり」

これは俺たちにとっての危機的状況においての暗号みたいなもので手話みたいに会話できる。
つまり鏡介と団はこれでテストを乗り切るのだ、ちなみに大河はまだ覚えていないらしい。

「とりあえずトランプでもしてようか夕ちゃん」

『大丈夫なの？見てなくて』

「問題ないだろ、見たところ朝鈴だけ心配すれば問題ないし」

そして十時前に大河が部屋に入る

「はい、いつちばぐん！」

「……遅い力士!!」「……」

「みんなですか？」

そして夕が大河の肩をたたき

『うるさい力士』

「そんな夕まで……もういいよ力士で」

「じゃ【公共団体】じゃなくなるな」

「我ら三人で公共団でいいではないか」

「……三人、トリオ、ピッタリ」

「改名してまで僕、はぶかれますか」

「わかんないところは聞けよ街案内してもらいたいし」

「コーウ質問、コウの好きなひとだぐれ？」

それを香が言い放った瞬間視線が集まる。

「そりやおまえ、みんなだよ」

「特に俺だ〜NO.1さ」

鏡介は叫ぶ。

「ごまかしてほしくないんだけどな〜」

香がつまんなそうにつぶやく、しかし、俺がいったことは事実で、こいつらとはもう離れたくないとほんとに思う。

そして、各々が宿題を始める。

さっき見たところ、香や団の結構まじめなやつらは残り二割ぐらいで、鏡介や朝鈴は半分ぐらいだった。

大河は昔から夏休みの宿題は最終日にやるものだと思っているからまったく手をつけていない。

俺と夕は神経衰弱をはじめ。

しばらくたつと

「・・・ここわからない」

「あつそこ私もわからない」

『悪いちよつといつてくる』

夕はトランプを睨んで集中していた。

そして、俺は公式の当てはめやヒントを出す。

「・・・なるほどね」

「わかったわかった」

基本的に団も香も普通以上のあたまの良さをもっているため説明も簡単にすむ。

しかし、神経衰弱のおもしろさに驚いた。
なかなかの実力者同士だと残り二十枚近くになると一回のミスが命取りなのだ、そして勉強を始めてから一時間ちよつとすぎたところで鏡介が

「フッフ、愛の勝利だ」

「・・・うっ嘘だろ」

「ありえないよあんた、何者」

どうやら鏡介が終わったらしい、あいつは悪知恵も働くのだが集中するとなんでも出来そうな気がする。

そして、鏡介も神経衰弱に加わる。

いままでの俺と夕の戦いを見るかぎり負ける気がしない。

・・・甘かった。

「フッフ、またまた愛の勝利だ」

これで鏡介の二十連勝、こいつはそういうやつだった。

二十回勝負をしたが一回のゲームで俺に回ってきた回数は平均二回、勝てるわけがない。

昼がすぎた頃、香、団、朝鈴の順で宿題も終わり夜桜さんの作った
昼飯を食べる。

「この後、街案内してくんない」

『もちろん』

「うんいいよ」

「我が親友の頼み断るわけがな〜い」

「まだ終わってないんですけど」

「・・・明後日、街祭り」

「そうだね、じゃ今日は学校にしよう、商店街はあん
まり変わってないし祭りの時だね」

「お〜い俺無視ですか」

「じゃ行きますか」

「おいてく気？」

「いままでふざけてた罰だろ」

「ひで〜な」

「ひどいのは、おまえの頭さ」

鏡介のこの一言で大河は静かになり机につく、帰ったあと大河は部屋の片隅で壁としゃべっていた。

「なつかしいなこの川」

『あいかかわらず綺麗だね』

「夕、あんた毎日見てんでしょ」

『そうだけど・・・あっカワセミ』

「まるで俺様とコウの愛の形のようにだ」

「・・・いま犬がシヨンベンした」

「ぐっぐぬう」

「」「ははは」「」

やっぱりこいつらといるとおもしろい自分が自然体でいれる。

しばらく歩くと木造の校舎が見える。

おそらく二、三十分ぐらい歩いただろう。

「ここが我らが愛を育む学校である」

「外は汚いけど中は結構きれいなんだよ。ちなみに、一クラス二十

人の四クラスなんだよ。」

『同じクラスだといいいね』

「それは問題ない、なっ団」

「・・・ブイ！」

団はコンピュータを使うのが得意でこんな田舎の学校のシステムなら簡単に新入していじれる。

大河がこの学校に入れたのもおそらくそのおかげだろう。

「そういえば私達の担任はね・・・やっぱ内緒」

そういつて香が口を閉ざすどうやらなにかあるらしい、ちなみにこいつらはみんな同じクラスらしい。

学校の屋上を見ると人影がみえた。おそらくこの学校の生徒だろう、朝鈴や夕と同じような制服を着ていた。ちなみに見たのはたまたまでそんな趣味はない。

そして帰り道色んな人に声をかけられる。

ほとんどが知ってるひとで懐かしがられたが、なぜか話題は【公共団体】のことばかりだった。

「たしかに小学校の頃街ではうちら有名だったがなぜこんなに」

「・・・これ見る」

そういつてパソコンを開きあるHPをみせる。

そこを見ると「【公共団体】のすべて」と書いてあった。そこにはメンバー紹介や活動内容などが書いてあり俺がいなくなってからも【公共団体】は色々やっついていままではこんな田舎なので知らない人はいないらしい。

「俺様とみんなの愛のあかしだからな」

街の人達が俺を覚えてくれていたのにはうれしかった。

そしてあたりが暗くなる。

今日もまた歓迎会が行われる。

昨日はつぶれてしまったがとてももりあがる、大河の気分もあがっていた。

「やっぱ友と食つと飯はうまい」

「だれかこいつの友達の人」

だれもしゃべらずしくんとする。

「いいさいいさ食ってやる飲んでやる。おじさん一杯くれ」

そういつて大河は一杯飲んでダウンした。

みんながたのしんで歓迎会もおわりみんな家に帰る。

俺は明日から学校なので早めに寝た。

昔の仲間との学校生活がはじまる。

九月一日

朝、目覚ましが鳴る前に目が覚める。

緊張でもしているのだろうか、確かに都会にいた頃よりも学校に行くことは楽しみである。

家のチャイムがなる

「おやおや、前のように迎えに来てくれたのかい？おっいコウちゃん、おきなさっい」

「はっい」

そして俺は、何も入っていない鞆、今まで着ていたブレザーとは違う学ランに身を包みリビングに降りる。

「遅い」

「いや、それはない」

現在の時刻七時、学校には三十分で着く時間にはかなりの余裕がある。

そして夕に肩を叩かれる。

『コウ君おはよう』

「ああおはよう夕ちゃん」

そして、朝飯を食べる。

「そっいえば、あんた明日からの飯どうすんの？」

「学食があるんじゃないの？」

「あんにぶいね、夕いってやんな」

『明日から私がお昼ご飯作っていい?』

「うん? ああもちろん」

俺は朝鈴に目で食えるのかと合図する。

明日の楽しみと返された。

楽しみと不安が三対七ぐらいだ。

そして、学校に行き始める。道は昨日通ったので覚えている。右には朝鈴、左ちよつと後ろに夕である。

八時前に学校につく。

「校長室ってどこ?案内してもらえん?」

「いいよ」

『こつちこつち』

夕が袖を引つ張る。

入って階段を昇り二階にいき奥に向かう、途中に職員室やコンピュータ室などを説明してもらいながら校長室前まで向かう

「じゃこつちでまっけてくれ」

「『うん』」

そしてノックをして校長室にはいる。

「失礼します。東京から来ました松葉 幸一です。今日からこの大曲まがり高校でお世話になります。」

この高校同様性格が大曲してそうなのはげの校長が堂々とせきに座っていた。

「おお、君か話しは聞いているなんでもあのふざけている【公共団体】とかのメンバーらしいな」

俺は危うく殴りにいきそうだったがこらえた。

「うちの学校は少数精鋭だから優秀な生徒だけをそろえている。君の学年だと高橋 夕君とか水村 香君、男子だと気にくわないが森 団君だ君にはこれぐらい目標にしてもらわないとな」

「優秀ね〜」

俺は小声でつぶやき、ふと大河の顔を思い出す。

ちなみに俺の都会にいた時の学歴は全てない状況でこの学校にはいなかった。

むこうでは成績だけで人を区別する。

この人物もかなりの可能性でそうなのだろう。

「あと君のクラスの担任はこちらにいる超優秀な金沢 良子先生だ
しっかりまなべよ」

「よろしくねコウ君」

「・・・よろしくおねがいます」

コウ君！？こつよぶのは昔の知り合いだけだ、しかも仲がかなりいい人だけである。

俺は色々悩みながら校長室を出る。

その時・・・

六年前、それがその人と会った最後の日だった。

出会ったきっかけは、当時あのクソヤロウとやりあったときに両方ともただのけがではなかった。

鏡介が出掛けていたためにねらわれたのだ。

そして俺は、川で傷を冷やす。

ものすごい痛みがはしり視界が薄れる。

「ちよつと・・・君、大丈夫」

そのとき現れたのが彼女、金沢 良子である。

その後、事情を説明した後彼女は親身になり相談にのってくれたのだ。

時には褒めてくれ、怒ってくれた。

当時大学生の彼女は【公共団体】やタなどの仲間にとっても姉の様な存在であった。

そして校長室を出た時

「良姉さん」

「その呼び方懐かしいわね、まっ昔の知ってる人なら
今でも大体そう呼んでるけどね」

「あんだ鈍いのによく気付いたね」

「一瞬わかんなかったけどな」

「そうそう校長あーいってたけどコウ君のことだから頭いいんでし
よ」

「まっそれなりに」

「あんな校長無視したほうがいいよ」

「先生がそんなこといってていいの？」

「そこら辺が大人として生きてく方法ね」

そんな話しをしながら2年A組の教室に向かう。
もちろんあいつらのクラスで成績順でクラスを組んでいるらしい、
もちろん大河は色々な方法で残らしているらしい、本来ならこの学
校にすら入れない頭だからな全員A組にいるのは校長がひいきして
くれるかららしい。

そして教室の前につくしかし、中にははいれず廊下で待機である。
鏡介や団に馬鹿にされながらも待つ。

そしてチャイムがなり少し経つと中に入るように促される。
中に入るとかなりの歓声で盛り上げられる。

なかには知ってる人もけっこういた。知らない人でも【公共団体】の事を知ってる人はほとんどなので盛り上がりはよりいっそうあがる。

「コウ君はいあいさつして」

良姉さんに言われ自己紹介を始める。

「みなさんはじめまして、ただいま紹介にあずかりました松葉 幸一です。都会の方からやってまいりました。何人か顔見知りの人もいますが、みんなが仲良くしていただけるとありがたいです。」

「おいおいなんだそれ、我が親友が他人行儀か？」

「うるせよ、しゃーない、・・・はい真面目君ここまで、みんな久しぶり元気してたか？懐かしすぎだよこれみんなかわらなすぎ、良姉さん、俺の席どこ」

「あゝそこね窓際の前から二番め」

その席は後ろに団、右後ろに鏡介、隣に夕、前に朝鈴、右前に香と全方位知り合い囲まれていた。

大河は廊下側の一番後ろ、団いわく【公共団体】が前一緒にいた時校長にねちねち文句言われたらしい。席に着くと

「これが・・・愛の力」

鏡介が叫ぶ。

「いや、おまえら自分でこつしただろ」

「・・・先生に許可とつた。」

色々言いたかったが気にしないことにした。
ガラガラガラ

「おはよさくん」

大河が教室に入る。

「おせよ力士！」

「そうだよ力士！」

「帰れ力士！」

「まったくだ我が愛のしんゆうであるコウの自己紹介にこねえやつなんて原子以下さ」

「それゝ存在してないって、しかもなんでみんな力士の事してんだよ」

「フッフ、これが愛」

「なさけない形ね」

朝鈴がちやつかり突っこみをいれる。

そして、校長のトツテもありがたいお話を聞きながら体育館で色んな人に話しかけられ【公共団体】のすごさに驚いたりもして、テストがはじまる。

教科は三教科、このテストは変わっていていきなり国語、英語、数学の三枚の問題用紙と三枚の解答用紙を一緒にくばられ、百五十分間一気にテストをするというものだ。

一応休みは各自でとつてもかまわないが他人との会話はいつさい禁止というものだ、さらに終わった人から帰れるのだ。俺はさっそく始める。

左手で後ろの二人に暗号送りながら右手で書くので、かなり字がきたなくなってしまうていたがそれは仕方ないであろう、そして二十分後。

「良姉さん、終わったよ。」

「ぎょっ!?!?」

みんなの視線が来る。

「まさか全教科?」

「そうじゃないと回収してくれないんでしょ」

「まゝあんだだしね、でも仲間テスト終わってないよ。」

「屋上で待ってますよ。」

「じゃおまえら後でな」

そういつて準備をして教室を出て屋上に向かう。

「おやおやトイレかね、テストせいぜいがんばるんだな」

校長がそういつてきたが俺は一礼して屋上に向かう。

四階のこの校舎、五階のこの屋上は高く、風も気持ちいいらしい、そしてその扉を開ける。

綺麗とはいえないが落ち葉や虫もあまりなく横にはなれないが座ることが出来る。

そこに

「遅いな我が親友」

「俺、おまえが時々人間であることを疑うんだが」

「フッフ、褒め言葉なんて・・・照れるじゃないか」

そういつて鏡介は顔を赤くする。

「おまえテストは」

「我が親友が暗号してくれたからな八割以上いけばいいのさ、これもまた愛」

「他のやつは」

「おそらく、団はあと二十分ぐらいだろう。」

そういつて座ろうとした瞬間おれをみて

「ちょっとまってるいま畳を取ってくる。そう、まさに愛は光を超えて」

そういつて鏡介は階段を飛び降り、愛は無敵な〜り!と叫びながら走り始める。

俺はふと前の空を見る。夏の空の象徴である入道雲、それに真上に昇ろうとしている日差し、そして、金網の外に見える女の子、自然である・・・

「女の子〜!?!?」

俺は思わず叫ぶ、金網の外には小さなスペースそして、そこには女の子が立っていた。

その女の子は一瞬上をみて下を見る。

その女の子はおそらく一年であろう、制服の肩にあるラインが黄色なのだ、青が二年、緑が三年だから間違いない。

しかし、その一年の女の子あまりにも危険な状況だ、ここには俺しかいない。

幸いその女の子は俺に気付いていない。

俺はゆっくり近づく。

そして俺は

「おちつくんだ水玉の君」

おいおい違つだろ、思わず自分につっこみを入れる。

「ひゃう!?!?」

その女の子はこっちを見る。
むんすんでいたのか髪はばさばさ、所々制服は汚れていて、目には
涙、そして少女は少し考えてスカートをばっと抑える。
いやいやそうではない実際俺は決して見てはいない。
とりあえず落ち着く。

「ハジメマシテ、君の名前は？」

こんな時どうしていいのかわからない

「・・・あうあ」

その時、強風が吹き手を放していた女の子は体重が後ろに俺はとっ
さに手を出しなんとか支える。

「あの、えっちょっと」

女の子はあわてる。

そのとき

「我が親友よ、茶道部の畳と柔道部の畳はどちらがこのみだ」

そういつて十枚ほどの畳をもっていた。

俺は冷静に・・・

「柔道部・・・のは臭いだろ」

危うく臭い思いをするところだった。

「とりあえずこれをなんとかしてくれ」

すると鏡介

「……その女、なぐにコウの手をにぎっているんだ？」

鏡介はそういうと俺の視界からはずれて俺の目の前にでてくる。

「せめて人間技つかえって」

「あとこの子落とすなよちゃんと助けるよ」

「フッフ愚問さ、ほらもうすでに」

よくみると俺の手はなにもつかんでおらず、女の子は畳の上に座っていた。

「助かったぜ鏡介」

「当然だ」

「……鏡介？えゝまさかあなた鏡介先輩ですか？【公共団体】の嘘みたい信じられない」

鏡介の方を見て、アイコンタクトで知り合い？と聞いてみた。

鏡介は少し考えたあと

「まさか、日向妹か？」

「はいそうです。うわうわうわゝ話ししちゃったよ憧れの【公共団体さん】とゝ」

「えつとあの〜」

「なんですかあなた？人が喜んでる時に」

ものすごい酷いことを言われた。

「おいおい、我が愛の親友であるコウになんて口の利き方だ日向妹、コウのことを馬鹿にしている人間はいてはいけない」

「鏡介先輩が親友っていつてるってことはまさか!？」

そついつて女の子は俺に抱き付いてきて

「た、じゃなくて幸一先輩だ〜」

今、最悪なやつと間違えられた気がするが、俺はそんなことを考える暇もなく、抱き付いてこられたせいで後ろに倒れ気を失ってしま

う。

九月二日

「おし今日はなにやるか〜」

「そつだな〜ふむ、愛について語るつ」

「・・・なんかいつもやってること同じだね」

「いいんだよ同じが一番さ、そう思うだる日向」

「ああ、そつだ、変わることも大事だが、変わらないというのはも

つともむずかしいことだからな、それができるのはすごいことだとおもう。」

『なんか詩人だね』

「運動神経抜群、容姿最高、なおかつ誰にでもやさしく、詩人、日向なんであんたこんなやつらとつるんでの」

「だって楽しいじゃん」

・・・

目を覚ます。

後頭部が痛む。

目の前には俺の部屋の天井。

俺は昔を思い出していた。

それはきつとなにかをうつたえているのだろ、夢とはそういうものだ、夢にも意味がある。

これも日向がいつていた気がする。

ふと横を見る。

手に暖かい感触、そして間の前に女の子、目が潤っている。

「よかったよ、幸一目が覚めたよ。もうだめかと・・・」

「わかったから手を放してくれないか水玉のきみ」

「あうあ、それもついやだよ」

その時ドアを朝鈴が開ける。

「遅いよあんた今何時・・・シツレイシマシタ。」

そして階段を下りる音がしたのち

「つるおばさん!!!あれ何!!」

この子は物扱いかよ。

ちなみにつるおばさんとは俺の祖母である。

そして、階段の上がる音がして夕が入る。

口をパクパクさせ目を潤し

『しんじてたの・・・』

手話をしながら後ろを振り向いたのでなんていったかわからない。

夕は階段を降りる。

途中でこけたのはいうまでもない。

「とりあえず事情説明だな、しゃべれるえ〜っと、
み・・・」

「小春、日向 小春・・・です。」

そして、今度は朝鈴、夕と一緒に部屋に入る。

「とりあえず、説明してもらいましょうか、この女はなに?」

コクコクコク、夕も頷く。

「フフフ、それについては俺様が説明しよう。」

そういつて、上から落ちてくる。

「ボ〜ンジュ〜ル〜、諸君」

「おまえどこにいた？」

「天井に張り付いていた。」

「やめろ、黒いカサカサするやつ思い出す。」

『いいからはじめて』

夕が涙目でうったえるので、鏡介に話をすすめさせる。
何力所かおれが訂正してなんとなく伝わったと思う。

どうやら学校の屋上から俺を運んだのは鏡介と後からきた団で、鏡介が見張る条件で小春の看護を許可したらしい。

「そういえば日向って」

俺が説明の終わった鏡介と、小春の方を向き訪ねる。

「そう、あいつだよ日向ひやうが狼ろう」

「妹がこっつてことは兄もまさか」

俺がそう聞いた時みんなが静まりかえる。

「朝夕、日向妹つれてちょっとでといて」

「あ、あの〜私なら大丈夫です。それに幸一先輩にはちゃんと本当の事を知っていて欲しいし」

「本当のこと？」

「コウ、おまえの親友である俺様がある程度短く話すぞ。」

そういつて鏡介は床に座り俺を見る。

「結論からいうと、あいつは死んだ、おまえのいうとおりこの学校に入り、たしか明後日が命日だったはずだ。」

そういつと小春がうつむきはがら

「コク」

頷く。

「あいつとふざけあつた俺たちならあいつのすごさわかるだろ、あいつは、陸上で活躍していた。大会予選で全国大会のラインをクリアしていたんだ、それでも変わらず俺らとふざけ合ってたんだ、初めてあつた頃一人を好んでいたあいつがだぜ」

鏡介がめっちゃくちゃ真面目に話している。

「ちょうど一年前の明後日、うちの学校の文化祭があつた。日向妹、こいつもこの学校を希望していたから兄に連れられて一緒に向かったんだ。あのうちの街の商店街の外にでっかい十字路があるだろ、信号無視だった。その男は謝った。しかし、なにも取り戻せなかつた。唯一助かったのはこいつの命」

「づぐっ・・・ひっぐ」

小春が泣き始める。

「本当なら日向妹もあいつ狼も助からなかったはずだった。日向妹の臓器はほとんどがぼろぼろ、逆に狼は脳に影響がでていた。そこでさあいつこういったんだよ「小春の命・・・俺の命」最後まで詩人だったさ、あいつはそういうやつだった。本当なら脳も働かずしゃべることなんて出来ない・・・奇跡とよべるものだった。」

そういいながら鏡介の目にも涙がでる。

「結局俺が最後にみれたのはあいつの写真だけだった。確かにあいつは一人の命を助けた。でもそれはこいつにとってもきつい生活のはじまりだった。肉体的には拒絶反応も見られずすぐに体力も回復した。しかし、二度と兄に守ってもらい一緒に歩くことは出来ない、そしていつも言われる。兄が生きていれば良かったのにと・・・」

「おいそんなこと」

俺はそういつて小春のほうを見る。

「いいんです。本当のことですから」

そういつて涙を拭いながら話す。

「しかし、それはあまりにも・・・」

そしてみんなだまりこむ。

少しすると俺はあることを考えついた。

「鏡介、今俺が考えていることがわかるか？」

俺が考えたこととは、今日の祭りで小春も入れて暴れまくり、さらに今後【公共団体】をつかって大人からのいじめを減らす

「あゝたりまえだ。今日の祭りでも日向妹入れて暴れまくり、さらに今後【公共団体】をつかって大人からのいじめを減らすとかそんなもんだろ我が親友はそういう世話焼き多いからな」

みごとに当てた。

それを聞いていた小春は

「はうわうわ、いいんですか？」

「そつちがめいわくじゃなきやな、なゝおまえら」

そつというドアが開く音、そしてなだれ込む人々

「ははは、ばれてたみたいだね」

「・・・おはよう」

「おはよう、香に団・・・それに食いしん坊」

「ねゝ誰それ？僕？僕なのですか？」

大河、もちろんこいつだ

「あと夕ちゃんも理解したよね？」

『うん姉さんが教えてくれた』

そういつて朝鈴を見る。

「なによ、文句ある?」

「今日は午前は学校だから午後の2時に校門前集合！
絶対こいよ水玉」

「はづ!?!」

「サイテ〜」

『えっ、なにがなにが?』

「フツ、愛」

「・・・わけわかんね〜」

「ね〜ね〜、早く学校行かないと、こちらはともかく
この子が」

時計の針を見ると八時十分、学校までは二、三十分、つまり

「鏡介、三人ぐらい運べるか?」

「フッフ、愛の力があればいける!!!しかし、いま
はハングリーだ、おまえが愛を永遠に・・・」

「・・・走る」

「だな、とりあえず俺、鏡介、大食らいと朝鈴はともかく、残りの三人は……」

「はづわ、ひどいよう見えても私、走るの速いんですよ」

と小春が言う

「どれくらい？」

「五キロなら十五分切れる」

「はい決定、じゃ夕ちゃんは朝鈴に、香は鏡介、団俺に付いてこい」

「しきるのがあるところがうね〜普段ボケボケなのに」

「……時間」

「こういつてる間にも時間はすぎる。

「ダ〜ツシュだ、我が親友達よ」

「小春ちゃんもほら」

そういって手を引く

「あの皆さんわたしのことは呼び捨てで呼んでください、あと私も友達でいいんですか」

「フッフ、愚問よ日向妹」

「あなた人の話聞けないよね」

「私は香さんでいいよ」

「・・・先輩面」

「俺の名前は・・・」

「大食らい」

「まだいうか」

そういつてかける。

少し涙を浮かべていた小春は前を走り後ろを向いて

「先輩、覚悟してくださいよ。私あまえまくりですから」

「・・・条件がある。今度狼に会わせる」

「もちろんです」

そして、俺たちは走る。

それぞれが足りないところを補い、みんなで遅刻しないために

「おゝい、待ってくれ、仲間だろ」

遅れるのは大河、実は夕より遅い

「ぎりぎりねあんた達、二日前なのに」

良姉さん、が俺たちが教室に入って十秒後に来た。

「あいつ、速かったな」

「さすが日向妹だ」

「・・・よくしゃべれるね」

「あれ、菊地くんは？」

「菊地って誰？」

「さ？少なくとも我が親友にそんなやつは？」

「え〜とつつこみいないな、ちなみに大河の姓だよ」

香がそういつてくれた。

「先生、やつなら先の戦いで燃え尽きました」

それを言った瞬間、教室から大爆笑

今日は授業はなく、ただ話で終わる。
あとどつやら昨日のテストの採点が終わったらしく先生がみんなに
点数を述べる。

「明日、順位が張り出されます。校長には明日までばれないので自分の点数聞いた人はいいわけでも考えなさい」

ちなみに俺は二百九十九点、三百点満点だった。

さらには夕、鏡介、団、香は好成績を収める。

あつという間に学校も終わり、俺たちはいったん着替えたりするために帰路につく。

「おまたせ」

香も来た。

これで人数は俺、団、大河、香である。

どうやら夕と朝鈴は浴衣を着るらしい、そのために先に来た。

「俺を忘れてるようだ」

そういつて後ろから沸いてでる。

「悪い悪い、登場はもっと考えようぜ」

「ハハハハそうだな、しかし！！！きょうは祭り
そこでフフフ」

不適な笑いを浮かべる。

「しかし、香も浴衣似合うな」

「・・・俺もそう思う」

「うわっめずらし、この二人が褒めた。」

「馬子にくも衣装!!!!・・・グワツ」

「バゝカベたすぎだって、本当でもいっちゃだめだし」

「馬鹿に馬鹿といわれた・・・無念」

そうして鏡介は倒れた。

その後、夕と朝鈴登場

「「遅い」」

俺と香はいつもの朝鈴の口癖を使う。

「うるさいわね、浴衣着てたんだからしょうがないでしょ」

「夕ちゃん、すごい似合ってるよ。あっちなみに朝鈴も」

『ありがとうコウ君』

夕ちゃん

「すいませくん遅れました。」

そういつて小春が走る。

「うわわ、止まれ、止まれ、はっ」

ドスン、俺は小春とぶつかり吹っ飛ぶ。
夕がものちなみに朝鈴もである。
しかし、俺はなにもしてないぞ。

「すみません、すみません遅刻しそうだったので」

「・・・もう五分ほどすぎてるけど」

「はう！？そこは忘れて」

『コウ君、私、金魚すくいに綿飴にくじ引きに盆踊りにヨーヨー釣りにリンゴ飴に焼きそばに・・・色々したいな』

「そんなに！？回れるかな？」

『したいな』

ものすごい威圧感が俺を襲う。

「・・・いつ」

ナイス助け船、団。

「先輩、先輩似合ってます？」

「ああ」

「よかった〜自信なかったんだ〜、あつ〜しあわせです」

商店街に入る。久しぶりの商店街はこの町の人以外にも大勢の人が来る。

名物の打ち上げ花火一万発があるからだ。とはいってもどれくらいすごいかわからない、しかしとても綺麗だった記憶がある。

「じゃ暴れますか」

「おう！まかせろ我が親友」

「・・・なにしようかな」

「あれ！？夕は」

いつのまにか夕はいない

「あっあそこ、あそこです」

小春が指さした先には夕とヤンキーおそらく別の街のナンパ三人組だ。

おそらく俺より年上だろ

「フッフ【公共団体】復活！！！」

「許可する」

「人変わっちゃったね」

「・・・夕がからむとね」

「僕も加わるでしょうか？」

「いら〜ん!!!」

「ガビ〜ン」

そういつて大河はへたり込む

「いつもどおり周り見といて」

そして、俺、鏡介、団が向かう。

その途中、おじさんに声をかけられる。

「おう幸一の坊主じゃね〜か」

「八百屋『太郎』の次郎さん!？」

この人は祭りにすべてをかける有名な親父さんである。

おれが前に見た時は金魚の巨大化に成功して巨大な金魚を作ったのだ。

結局誰も救えなかったのだが

「どうしたんで〜い怖い顔して、このヨーヨーを持っていきな」

みるとまわりは水だらけ、顔に水がたくさんついてる人があちこちに

「今年は必ず割れる水風船を自作してヨーヨーにしたのだ」

相変わらずわけのわからん。

「じゃ次郎さん三つ、あとで金は渡します。」

「昔のよしみだもってけ泥棒」

そういつて渡される。

いまにも割れそうだ。

ちなみに香や朝鈴、小春も結構人気があるので俺らの戦いを見といてもらう。

そして鏡介が

「フッフ、我が親友にてを出すとはいい度胸だ」

「なんだてめ、今からおれはこの子をナンパすんだきもいこといつてね、で帰れ」

その言葉に鏡介は切れる、しかし俺を見てなんとか抑えた。
そして涙目の夕に

『そこに朝鈴とかいるから俺が目を引きつけてる間に逃げろ』

『わかった・・・でも怪我しないでね』

『当然』

そして俺は

「いくぞ」

そういつて俺は水風船を二個投げる。

それはみごと夕を抑えていた二人の顔に当たり夕は逃げる。

「鏡介」

「フッフ、ハハハハ、俺様を馬鹿にしたなその罪はその汚い顔の骨をぐちゃぐちゃにするまでしてやる」

そういつて一番強そうなやつに拳を入れる。

鏡介は負けない、それはこの町にいるやつ、都会で色々見てきた俺でも確信できる。

俺とぶざけ合うだけでも俺はギリギリなのだ

「てめゝ兄貴になにしやがる」

俺は今発言したモヒカンヘッドの肩を叩き

「夕の恨みだ!!!」

「フッフ、あいつが夕と呼ぶ時は本気だ、死んだなこいよあんだボクサーかなんかだろ」

「そこまでわかっていて俺を殴るか、けっ気にいらね」

「おまえに気に入られる必要など・・・皆無!!!」

モヒカンは拳を振るう、鍛えてはあるらしい、しかし俺も昔祖父の影響で武術をたしなんでいた。

モヒカンが一発二発と俺に近づき、三発目の時俺はやつの手をつかみその勢いのまま相手を後ろに転げさせる。

さらに立ち上がってきたモヒカンに俺はある臓器に向かって拳を振る。

するとモヒカンは倒れうなることもせず、じたばたする。おそろくしばらくは立てないであろう。

昔独学で医学を学んでいた俺の脳が役に立つ。

「・・・ブイ」

そういったのは団である。

いつのまにか相手は倒れていた。縄でグルグル巻になっていた。

「愛の勝利さ、どうするよこいつ」

「うっ、ちっちひろさん」

俺のとなりのモヒカンがしゃべる。

そこには人間と呼べない姿の宇宙人や宇宙人がかわいそうなくらいボロボロだった。

「とりあえず、このちひろちゃんとその仲間達を縄で縛って」

団がすぐにグルグル巻にする。

そして俺はちひろの持つてる鞆の中にごっそりさつきもらった水風船をいれた。

「コッウ警察つれてきたぞ」

大河が来た。

「三年に一度の大活躍だな」

「ガビビーン」

「どうかしたのかねどうしたこれは？」

縄で縛られた三人組をみていう、さらに俺たちをみて

「お〜【公共団体】か〜？なつかしいなどうした？」

「お久しぶりです。」

「ここここ【公共団体】！？まさかあの？」

三人組のモヒカンがおどろく

「とりあえずそのヨーヨー盗んでいたのをみたんで、あと夕ちやんがナンパされたので」

「それじゃ〜しかたない、ほらっしっかりあるけ」

「おっおぼえてるよ〜」

「達者でなモヒカン千尋ちゃん」

「くっくっけんなくそ〜」

暴れた俺たちの周りにはたくさんの人だから、とりあえず大河をおいて逃げた。

「うわっおいてかれた」

「わっわうあゝすごいねゝ驚いたよ」

『コウ君大丈夫？問題ない？』

「問題ないって、あっこれ」

そういつてどこかであったある物を手のひらにのせる。

『これっ、髪飾り？まさか』

そうこいつの髪には小五までつけていたのだが、そこはいろいろな事情が加わる。

「あゝその、えっと、普通の店で買った方が良かったかな、そうだよねごめん返してくる」

そういつて取るうとすると、顔を横にふり涙目になり顔を真っ赤にさせ

『これがいい、これでうれしい、これじゃなきやだ、もう二度とはなさない』

そういつて髪につける。

「似合ってるよ」

そういつと顔を俯せる。

「なになにこつそり何やってるの？なにやられたの夕？」

「・・・いじわる？」

「フッフ、俺のあいが勝ったのか？」

「たぶんあんたの負け」

そういつて周りに冷やかせられる。

たくさん楽しんだ、夕が希望していた物に加え色んな人と暴れたり、輪投げとか、射的などでとても高いものをねらって俺がはずしたら鏡介が取り、みんなで笑い会う。

そして、花火大会が始まる。

何百発か打たれると職人の名前が呼ばれる。

そのあとに玉の名前や説明がある。

しばらくすると司会が

「次の職人は加藤 鏡三郎、玉名は【公共団体赤光】」

「おいこれって」

「フッフ、マイファザーさ」

そしておやじさんはしゃべりはじめる。

「次にうつたやつは【狼青光】青と言いながら緑色に見えるやつですわ、息子が作れ作れ言うもんで徹夜の作業だったんです」

とてもなまりのあるしゃべり、でも小春は

「あうあうあう」

「鏡介まさかこれ」

「フフフ、人の愛も美しい」

その緑色は二発しか打たれなかったが、一つの玉を二つ目の玉が包むように見えた。

「楽しめた？」

「もちろんさ我が親友よ」

「・・・おまえじゃない」

「つまれなかったかな？小春ちゃん」

「ブンブンブン、すごかった。狼兄さんと遊んだみたい」

おれはよりつらい思いをさせたのではないのだろうか？
少し悩むといつの間にかみんなに睨まれる。

「幸一兄さん、下向いてたら花火みえませんよ」

「」「兄さん！?!?」「」「」

「フフフ、ブラザー」

「ちょっと小春ちゃん？」

「だめですか？」

みんなに睨まれる。

特に朝鈴には、もう食われそうなほどに

「ま〜好きにすればいいさ」

「あう〜やった〜」

そして花火も終わり、楽しかった祭りも終わり、明日もこの仲間
新しい仲間も入りもつと楽しい日々を期待しながら目をつぶる。

九月三日

誰もいない、独りぼっちだった。

しかし、誰かに頼ろうというわけではない、誰かと仲良くしよう
というわけではない、ただ、会いたい、君に会いたい、昔近くに
いてわからなかった君の存在の大きさ、だんだん少なくなっていく
君との過ごせる時間。

・・・君に会いたい

目覚まして目を覚ます。

嫌な夢を見た。

おそらく都会にいた頃の夢だろう、あまりいい思い出はない。
今日は小春も・・・鏡介もこの部屋にはいなくてほっとした。
下からは笑い声、朝鈴と夕がもつぎているのだろう。

「遅い」

ちなみに今の時刻は七時である。早く行ってなにをする気なのか俺にはわからない。

祖母のまさに朝食といわんばかりの和食に迎えられる。

登校中は相変わらず他愛もないことを話す。

こんな夢を見たとか、この人がねくなど誰か一人が話し他の二人で返す会話だった。

今朝あんな夢で目を覚ましたからだろうか、いつもよりしっかり会話に参加する。

『そつえば来週から修学旅行だね』

「へっ!？」

俺は驚く、当然だ何も聞いてなかったから。

「へってあなた知らなかったの？」

「来週って三日後じゃん」

ちなみに今日は金曜日、明日学校が午前で終わり、そこから二日後である。

「あんだどこ行くか決めなさいよ」

『コウ君私達と東京いこ』

「えっみんな同じ場所じゃないの？」

「うちの学校は大阪、東京、福岡、台湾から一つ選べるの、ちなみに私達は東京、あんたのせいで」

理由はなんとなくわかる。

俺が東京にいたからみんなदैいっておどろかそうとでもしたのだから。

そして、おれは夕に肩を叩かれる。

『実は最初に東京行こうっていったの姉さんなんだよ』

すると俺はたまらず笑ってしまった。

教室に入るとみんなその話題で盛り上がっていた。

学校全体で行くため、高校生活で三回も修学旅行にいけるのだ。

ちなみに、小春は昔住んでいた福岡、良姉さんは台湾らしい。

俺はみんなと一緒に東京に行くことにした。

あまり気が進まないが、みんなと一緒にならきつと何か変わると思ったからだ。

昼に校内放送がなる。

「え〜あつ、おっほん、みんな聞いてくれ、今から校長先生のありがた〜いお言葉がある。みんな心して聞くように」

「え〜ただいまからそれぞれの学年の一位〜五位までのテスト結果を発表する。」

どうでもよかったが、昼だったのでみんなで食事を取りながら話していた。

「・・・次々二年生、一位は・・・へっ？いや、なんでもない、松葉 幸一、点数は二九九点」

テストは三百点満点なので、一点落としたということが、クラス内では俺以外は盛り上がっている。

「二位は高橋 夕得点は二八〇点、前回もすごかったが今回もよく頑張ったといっておこう」

さらにクラスが盛り上がる。

俺も自分のときとは大違いに喜ぶ、本人の顔はまっかだった。

さらにその後、鏡介が二七一点で三位、そして二六九点と僅差で団と香が同率四位だった。

上位が【公共団体】関係だったことに校長はいらつきを隠せないくらい変な口調だった。

そして、一年の順位が呼ばれ校長の話が始まる。

そして、校長がぐだぐだ話し始めてしばらくたつ。

そのある一言に俺たちは行動を起こした。

「我が学校は勉強が大事だ、それが出来ない奴らでもスポーツぐらいはできるはずだ、なのにたとえば一年の日向 小春とか」

俺は鏡介、団を見る。

「あゝ僕のほうも見て欲しいんですけど」

「あゝ悪い、今回は待ってる」

「そんなの関係あるか僕もいくぜ」

「だまりやがれコノヤロ!!」

鏡介がおもいつきりガンつける。

「ひ」

大河はおもいつきりビッて後ろに後退し窓から落ちる。

「うわ」

「よし、いくぞ」

「おい、まかせろ我が親友」

「・・・まかせろ」

たぶんきつと、ここ三階だけど彼は生きているだろう。

俺たちは放送室の中に入る。

「なんだね君たちは」

「誰かが僕らを呼んでいる。」

「そんなときには飛んでいく」

「・・・きつとそれが誰かの助けになる」

キューピーン

「レッド幸一」

「・・・ブラック団」

「パープル鏡介」

「「「我ら【公共団体】！！！！」」」

「これ放送で流れてるよな」

「・・・んぐ」

今それにきずいた団が両手両膝をついて落ち込む。

「フッフ、まっいいではないか」

「なにをしとるんだね君たち」

校長が迫ってくる。

「校長先生、ちょっとお話があります。」

俺がそういうと

「本来なら君たちが私と話しなんかするわけないんだ、しかし君たちはみんな五位以内に入ったからその権利を与えてやるう私は心優しいからな」

俺は一瞬殴りにかかろうとしたが鏡介がそれをとめる。

そしておれは話し始める。

「とりあえず校長に話す権利にもう一人増やそうかと思ひましてね」

「ほーう、なんだねそれは」

校長は思いのほか乗ってくれた。

「要するに校長は勉強もしくは勉強ができればいいんですよ？」

「・・・まっそうだな」

「たとえばいままであなたがばか〜にした生徒が陸上部現部長に勝つたりしましたらどうしま〜す？しかも、現部長の得意な五キロで勝つたりしたら」

鏡介が説明する。

そう、この現部長は五キロで市の大会で二位に選ばれたのだ。

「ははは、そんな生徒がいるとは思えんがな」

「・・・日向 小春」

団がその言葉を放った時、学校中が静まりかえる。

「いいだろう、体育の授業をさぼっているやつがどれほどのものか、しよせん結果は見えているがな、時間今日四時、コースは私が指定しよつ」

そういつて負けるとは微塵も思っていない校長はわらいながら放送室を出る。

そして、俺はマイクをとり

「一年の小春、聞いているか？おまえが本当の兄貴を思っつきもちがどれほどかみしてもらおうぞ」

「フッフ、果たしてそれは愛なのか！！」

「・・・勝算はこっちが上」

「小春、あんたしっかり走りなさいよ」

「応援するからね」

香、朝鈴、夕もきた。

すると廊下でも、盛り上がり始める。

あとで教室をみると小春は仲良しクラスのやつから質問攻めをされていた。

そんななか俺をみつけて

「幸一に・・・先輩」

「あぶないな、おまえ、あと大丈夫か」

「うん、逆にみんなから話しかけられてうれしいです。ただ、私勝てるかな」

小春はすごい不安だった。

「大丈夫だよ。今でも兄貴忘れないために毎日練習してるんだろ、大丈夫、負けたら俺がおまえを守る。」

「うわうわわわ、いいんですかそんなことって」

「いいわけないじゃないか！！！」

鏡介が椅子のしたから出てくる。

しかし、俺が教室内で

「あゝ鏡介先輩がいる〜」

この一言で十分だった。

一年生で俺の存在を知ってるやつはまだ少ないとっていい、今日でだいぶ多くなったがまさか小春と話してるやつだとは思わないだろう。

その点、鏡介は【公共団体】でもリーダー的存在、陰の生徒会長、運動神経抜群、などさまざまないところがあるらしい、そのため

「みんな鏡介先輩をかこめ〜」

「色々話を聞くぞ」

一年が鏡介に集まる。

「フツ、我が親友よ、やるじゃないか」

そういつて鏡介は、もんのすごいスピードで消えた。

「あのスピードで走れたら、世界新だな」

「鏡介先輩なら出来そうですね」

放課後、校庭には多くの観衆が詰めかけていた。

校長が俺、鏡介、小春、そして陸上部女子部長霧崎部長を集めてコースの説明、コースはこの学校の外周を三周というシンプルな物で、邪魔や卑怯なことがないように飲み物をあげられるのはスタート地点で三周のうち一回それぞれの代表者が与える。

また、それぞれにチェックされる場所がありそこを通らないといけないことになった。

この校長にしては真面目なルールだと思う。

そして、いったん解散、レース開始は十分後となった。

「緊張するか」

「あつあつあつ、助けてよ、幸一兄さん」

「・・・霧崎は先行逃げ切り型」

そういつてPCを取り出して過去の記録を見せる。

「小春ちゃんはどれくらい走ってる？」

「毎日二十キロは欠かしたことはないですよ」

俺は正直驚いた。

そして、霧崎部長のタイムを見て考える。

「校長先生、一人一緒に走る人つけていいですか？」

校長はしばらく考え、了承した。

「どうする気だ、俺にはわからないんだが」

大河が聞く

「だって馬鹿だし」

大河は一人落ち込んでいた。

「鏡介、頼みがある」

「おう、まかせろ我が愛の親友よ。この小娘のペースメーカーをやればいいんだな」

「なにもいってないが完璧だ」

「あの〜どういうことでしょうか？」

「霧崎部長に付いていってもいいが、その場合、むこうは自分のペース、つまりこっちが不利になる。」

「だからゴールタイムの時間をみて〜、俺が案内するのさ」

実際問題はないと思うが念には念をおす。

そしてレースがはじまる。

案の定、飛ばしまくる霧崎部長、おそらく最初の一キロは二分台で走るだろう。

実は霧崎部長のゴールのタイムはそれほど早くない、みんながつかれるだけなのだ。

だから、弱いところにしか勝てないのだろう。

鏡介はいわれたとおりのスピードで走る。

一周目が終わりここで相手の霧崎部長は飲み物補給をした。

そしてその水筒を落とすと、中からスポーツドリンクとは思えないほどの白い液がでてくる。

「団、ちょっとあの水筒調べてきて」

「・・・わかった」

そして約四十秒後に小春が来る。

水分補給はまだしない。

意外にも応援してくれてる人は多いがこれの九割は鏡介にむけられたものだった・・・。

二周目が終わる。

先にきたのは霧崎だった。信じられないスピードで走っている。

とてもじゃないが県で止まるレベルじゃない。

「・・・やっぱりはいってた。」

「成分は分かるか？」

「・・・時間かかる、でも競技では使ってはいけない成分だと思う」

予想したとおり、せこい手をつかっていたのだ。

約一分後に小春がきた。

そして俺は鏡介に片手で暗号を送る。
すると鏡介は頷き、小春にそのことをつけ、飲み物を取……らず
にダッシュを始める。
まるで百メートル走をやるかのごとく走っていた。
観衆や校長はもちろん、隣で走っていた鏡介や俺も驚く。
しかし校長は

「あんなスピードで約一キロ走れるとはおもえんがね」

そう他の先生と話しているのが聞こえた。
そして、なぜか鏡介が戻ってくる。

「鏡介、どうした？」

俺だけじゃなくみんなが鏡介に近づくと

「ゴールで待っててください、先輩」

鏡介は息を切らしながらも必死に小春のまねで答える。

そして約二分後、先にゴールに現れたのは小春だった。
綺麗なホームとはいえないが、それでも力強く、なんか常人にはな
いものが見えた気がした。
なんと霧崎部長の一週目のタイムよりはいいのだ
みんなが小春に駆け寄る。

「すごいな日向あんなにはやいななんて」

「私感動しちゃった」

みんなが思い思いに小春に話しかける。

小春は息を切らしていたが、満面の笑みでこちらを見つめる。

そして、霧崎部長がゴールする。

タイムは、部長が地区予選で出した最高記録より二十秒早い、さらに小春の出したタイムは全国大会出場の参考タイムより早かったのだ。

「すごいあなた、私の負けね」

そついいながら二人は握手を交わす。

部長という権力をもっているので、鏡介と交流があり性格はいいやつらしい。

そして校長がこちらに近づく。

「いやゝすばらしい、さすがはあの小僧の妹といったところか」

相変わらずむかつくやつだった。

「・・・メチルテストステロン」

そついった瞬間、校長は顔を赤くしてごまかすように逃げる。

「ドーピングか？」

「・・・そつ」

「しかゝし我らはかったんだ、日向妹祝うぞ」

しかし、小春はみんなと仲良く話している。

「ま〜よかったじゃないのお・に・い・さん」

「まったく」

香と朝鈴が話しかけてくる。

『でもこわかったよ〜』

「まっ負ける気ゼロだったけどな」

「そっいえば大河は？」

「生きてるよ」

「ちっゴキブ〜りめ」

「あんたらね〜僕は落ちたんですよ。いたたた」

そしてみんなで大笑いする。

しかし、一番頑張ったのは小春だ。

多分このいまの小春の笑顔が狼が一番見たかった小春の姿だったと思う。

九月四日

俺は走っていた。

隣には、小春が走っている。

小春は俺に付いてくるために思いっきり走る。

それでもだんだん離れた行く距離。

しかし、俺は止まり、小春を待つ。
そして今、小春は俺の横を笑顔で通りすぎ、一人で駆けていく、俺はその場から動くことが出来なかった。

目が覚める。

今日は土曜日、学校は午前中まで、そして、狼の一周忌である。

「遅い」

『おはようコウ君』

「おはよう夕ちゃん、朝鈴」

いつもの通り朝の挨拶、そして、登校する。

途中で香と団に合流、さらに木の上から鏡介、猫に追われる大河

「僕そんなことされてないから」

「おい、人の心を読む大河は寿命が八年縮まるんだぜ」

「なにそのリアルな数字、僕死ぬんですかね」

「そついえば今日小春は？」

「学校休むらしいよ、逆に今日学校行ったらもみくちゃんにされてそつだけど」

「あんたほんとむっせきにんよね」

「しかし校長も普通ドーピングまでさせますか？」

「フッフ、学園側最大の壁俺様が言ったんだ、校長も内心びくびくだったんだろ」

『でも勝てて良かったね、あんなに速いなんてびっくり』

「でも鏡介が走ったの無意味じゃない？」

大河がそういった瞬間、一筋の閃光とともに大河が仰向けになっていた。

「……今日帰り街よろ」

「ん？なんで？」

「……修学旅行」

「やべっ俺準備してねえ」

『わたしは終わってるよ〜コウ君との旅行だもん』

「あのね〜、一応ここにいる人同じ班だからね」

「ぐっ、しっしまった〜、俺様としたことが、遊び道具買い忘れた」

「……何する気？」

「フッフ、愛のみぞ知る」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

『・・・』

みんな黙りこくってしまった。

校門前、良姉さんがたっていた。

「やったねあんたら、校長今日休みだつて、しかも胃潰瘍」

「教師の言葉じゃないつて」

「しかもなんかあつちドーピングしたらしいじゃん」

「僕の実力からすれば・・・ぐはっ」

俺と団の間に入ってきた大河に二人で殴る。

「・・・虫がいたからつい」

「絶対冗談だよね」

「じゃ授業に遅れないようにね」

そういつて良姉さんは駆けてった。

「あと二十分もあるのに遅れるわけ」

大河がそういつた瞬間、ものすごい地響き

「あゝあ」

「・・・どうするこれ？」

その地響きの正体は昨日の勝負のを見てたり聞いたりした人達だろう。

「せんぱい」

「きや〜」

人数はおよそ四、五十人が走ってこちらにきた。

「どうする鏡介」

「フッフ、散れ皆のもの」

そして俺は慌てふためいていた夕の手を取り

「こつちだ夕ちゃん、逃げ遅れるな〜」

俺がそういつと夕は顔を赤らめて頷く

「こら、まちなさいよ」

朝鈴もこっちに来る。

大河がみんなに囲まれたかったんだろうが夢かなわずみんなに踏まれていた。

半分ぐらいが俺たちに付いてきてしまった。

団と香の所にも半分、鏡介はすでに教室のベランダから手を振っている。

「我が愛の親友よ助けはいるか？」

「いや、たぶん大丈夫」

『なの？』

「あんたら速くはしんなさいよ」

そういつて前を走っていた朝鈴は思いっきりジャンプして二階に飛び乗る。

『姉さんすごい』

「でも女とは思えないよ」

「フッフ、恋の相手など男でも女でもかわらんのだ」

いつのまにか鏡介が隣で走っていた。

「・・・」

『・・・』

いつの間にか教室の中にいた。
そしてすぐに団と香も来る。

「イリユージョン？」

そして残された大河はみんなに囲まれて・・・

「痛いっ痛いっ、おまえら俺先輩だぞ」

蹴られていた。

四、五十人に・・・

「あいつも頑丈だよな」

「痛がつてるけどね」

『助けてあげよ』

「夕ちゃん、やさしさは時に人を傷つけるんだよ」

うん、と全員が首を縦に振る。

『みんな・・・ひどいね』

そして、

「よし今日は全員いるな」

良姉さんが出席を確認する。

大河が校庭で一人屍になっていた。

1時間目、歴史教師である鈴木が教頭代理となったため自習、まっ静かにしてるわけもなく

「フッフ、この自習も愛の力」

「そういえば何となく思ったんだけど」

俺がそうだった瞬間周りが静まる。

「え〜つとさわいでてください」

またクラス内で様々な会話がはじまる。

「大河って馬鹿だよな」

「ちよつとんな唐突に・・・」

「・・・ああ」

「なにあたりまえなことってんの」

「フッフ、馬鹿だな」

「ばかよね」

『馬鹿・・・だね』

「皆さんひどいって」

そして俺は退屈しのにぎに

「な〜大河、人間って空飛べるんだぜ」

「おいおいコウ、そんなわけ・・・」

「うんとべるよね〜」

「へっ!?!」

大河が香りの発言に驚く、香はこういう時のアドリブが早いのだ。

「フッフ、愛の力が・・・なくても可能だ!!!」

「そんな・・・ばかな」

「・・・まじ」

「あんたそんなことも知らないの」

「夕、本当か?」

大河が夕の方を見る。

夕は一瞬とまりそして頷く。

「そうかそうなのか、人間はとべたのか〜」

そして、大河が空を見ている間に俺たちはにやける。

「どつやれば飛べるの?」

大河が聞いてくる。

「フッフ、飛ぶためにはちょっとした道具が必要だな」

そういつて鏡介は、手品のようにかばんをだし、そのなかから・・・何も出さなかった。

「フッフ、これぞ都会ではやりり！流行最先端の裸のマントだ!!」

「えっこれ何かあるの」

「フッフ、これは愚か者にはみえないしろものなのさ」

「あっこれねこれ、赤い生地がかっこいいね」

「これ青でしょ」

すかさず香がいう。

「あっそうそうこの青まさに空と一体化」

大河があわててとりつくろつ。

準備が整い、大河は・・・

「ひえ〜〜」

3階から落ちた。

『大丈夫かな』

「死ぬときは一瞬のほうが楽だって」

「こんなんじゃ死ぬやつじゃないし」

みんながシ〜ンとする。

おそらく日向を思い出していたのだろう。

「ごうせんぱ〜〜い・・・うわっ」

小春の声があったので下を見る。

すると倒れていた大河に足が引っかかってこけていた。

「なにやってんだよ大河」

「おい小春がこけてんじゃね〜か」

「僕のせいなんでしょうか・・・そうなんじゃない
ね」

「あわわ、大丈夫です〜。私のせいですから」

「あれ？ないてんの小春ちゃん」

大河のその声に反応して俺は・・・
三階から飛び降りる。
足が少ししびれたが、みごと陸上部のマットに落下したのでだいぶ
痛さはなかったと思う。

「あんたらね〜」

香が片手で頭を抑えて抱えている。
あんたら・・・？

「グググ、これぞ愛的力量」

「あうう〜え〜え〜と」

後半いつもの鏡介からはありえない声が聞こえた。

「中国語？」

「心服口〜服」

「あの〜え〜と、あうわう〜」

小春は困っていた。

「・・・その通り、だろ」

「フフフ、そのとお〜りだ」

もともにもどった。

「そつえばどうしたの小春ちゃん」

おれは目の赤い小春にたずねる。

「幸一兄さん・・・うわ〜ん」

小春はなぜか泣いているが今自分のいる場所は全教室から見える位置にいて、しかもなんかタとかの視線が痛いわけでした

「鏡介、とりあえず教室に、人間技で」

「フン！！」

また、いつの間にか教室にいた。

「だから人間技にしてくれ」

「甘いな、我が愛の親友、これぐらい鍛錬でどうにでもなる」

「とりあえずあんた、その子下ろしなさいよ、見てることうちが恥ずかしい」

朝鈴に指摘された俺は自分の置かれた状況を確認する。

胸が濡れてる、おそらく小春の涙だろう。

両手に重い感触、おそらく小春をお姫様だっこしてるからだろう。

俺はその場で赤くなり、すぐに小春を降ろす。

「タちゃんの赤くなる理由がわかったよ」

『コウ君ひどいよ』

とりあえず、今は小春から話を聞きたい……がクラスの中で今全員がこちらを見ている。

「大河……」

「コウ、あんた落とした友人わすれちゃだめでしょ」
すかさず香がいう

「あっそうだったけ」

朝鈴も忘れていたらしい。

「……書き置き」

そういつて団は紙になにか書いて前の机においた。

「ナイス」

「じゃ屋上かな」

「フッフ、我が親友よ、今日は日が強い、運動会用のテント、茶道部の傘、体育館の屋根、好きな物を選ぶがよい」

「そうだな」

「茶道部の傘、わたしあそこの下で寝てみたかったのよ」

と朝鈴、つてか体育館の屋根を選んだらどうするつもりだったんだろつ。

そして大河を除く七人は屋上に座る。

「畳まであるのね」

と朝鈴は驚く。

「茶道部のやつだよ、テストの日に鏡介が持って来ちゃって」

「まっ愛のためだからな楽勝さ」

そういつて両手には赤く少し赴きのある傘を持っていた。

『はは、相変わらずだね』

そしてなんとか小春は泣きやみ話は本題に、

「すみません、急に泣いたりして」

「いや大丈夫だよ気にするな」

そういつて俺は小春をなだめる。

「しかし、どうしたっての？今日狼の・・・」

「うっ、うわ〜ん」

また泣いてしまった。

「あさすず〜」

「フツさずが愛敵を地獄にたたき落とすとは」

『ねえ〜さんだめだよ泣かしたら』

「なっなによみんなして」

しかし、どうしたものか・・・

「とりあえず首を縦か横に振ってくれいいかな？」

小春は首を縦に振る。

大方の予想はついている。

多分小春は狼と向き合おうとしたのだろう、しかし親の問題が・・・

「親になにか言われたのか？」

一瞬小春は止まり、首を一回ゆっくりと縦に振る。

やはりそうだった。

たしかに、ここで親と口論するのも大事かもしれない、しかし今日
はまずい、狼が可哀想だ、なので俺は

とりあえず狼の墓に向かい二人いやここにいる全員と狼を対面させ
たいと思った。

「とりあえず、狼の墓にいこ」

みんなが頷く

約八年前小学三年の時クラス替えで始めてあいつを見たと思う。その時は耳の聞こえない夕にたいして男子のいじめが酷かった。なので俺たち【公共団体】は毎日のように殴り合いをしていた。そんな中、狼はいつも一人でいた。みんなあまり存在に気付かない、俺もそのなかの一人だった。

三年になって少したったある日の放課後、下駄箱で待ち合わせをしていたはずの夕がいなくなっていた。どこにいったか分からず不安になった俺。

「鏡介！！！」

俺が大声でさげんだあと、ダダダダズサ

「ハアーハアー、どうした我が親友」

「ちなみにどつから来た？」

「我が親友の家の前でたいきしていた。」

ちなみにここから俺の家まで歩くと十分はかかる。

「夕をみなかったか？」

「ああ、俺は見てない、もうしわけない」

「そうかすまなかったな」

「じゃもういつていいか？今から盗聴器とやらをつけたいんだが」

それは犯罪です。

「じゃ話したいこともあるが夕を探してくる」

「俺に話したいこと・・・なんだって〜!」

とりあえず俺は階段を上ってみる。

とちゅうで鏡介のとんでもない声が聞こえたが無視した。

屋上で女の声が聞こえた。

俺はものすごいあわてていたので誰の声が分からなかったが屋上の扉を開ける。

目の前に現れたのは多分小五、六年であろうがたいのいい人達三人が俺の同じクラスの狼、さらに小さい女の子、今思うとそれが小春だったのだと思う。

狼は少し血を流していた。

一人目のパンチをよけると二人目のパンチでよろめき、三人目のやつに今度は蹴りで足を痛められる。

後ろにいた女の子は今にも泣きそうだった。

俺は当然のごとく足が勝手に動き狼とその三人組の間に入っていた。

「え〜と理由わかんないけど手伝うよ」

「えっ」

そういつて俺は三人組に向く。

「なんだおまえ、関係ないチビは引っ込んでろ」

「そつだ俺たちを誰だと思っている」

「泣く子も黙る・・・ブヘボッ」

俺はおもいつきり一人の脇腹にヒットさせる。

「軽いんだよ」

そついつて俺の脇から現れたのはものすごい早さの狼であった。

そして俺がなぐつたはずの男に蹴りをいれる。

「へブツ」

そついつて一人動かなくなる。

「てめーら調子にのりやがって」

そついつて二人が俺を囲む、片方にはものすごい見覚えがあった。なぜなら先日鏡介にぼこぼこにされたやつだからだ。

そのとき俺は鏡介を呼ぶことしかできなかったので、相手にも自分にも腹が立っていた。

「そついえばおまえ、あの難聴のチビと一緒にいるやつだろう」

その相手の放った一言の後俺は

「・・・うーんとだれだかしらないひと」

「俺か？」

狼がそういつたとき

「俺の拳軽いつて言っただろ？まっ見てろよ」

その後の記憶はない、俺が目覚めたときには転がってる三人と狼、小春、そして噂を駆けつけた鏡介や団、大河それに夕もいた。

「・・・目さました」

「フッフ、我が親友話は聞いたぞ」

『コウ君無事？』

俺の周りに人が集まりだした。

そんなとき狼が俺の前にあらわれて膝をついてあたまをさげた。

「すまなかつた、本当は助けてもらってまじ感謝してる」

「ちよっと待ってくれ、こいつらやったのは・・・」

そついうとみんなが俺を見た。

「俺？つていうか頭あげてくれよまったく」

「いや感謝しきれない、なにせ小春をまもってくれたのだからな、あんたには・・・」

その一言でその場にいたやつ全員がこいつをシスコンだと思ったのは言うまでもない

「コウでいいよ」

「おれは狼だ日向ひむつが 狼ろっ」

その後も狼はしばらくの間一人でいた。しかし、一ヶ月もたつとまるで昔からの友のように一緒にいた。

とりあえず、一度支度のためみんな家に戻り再度俺の家に集合となった。

もちろん学校はまだやっていたが俺たちにとってはもっと大事なことでと思うことを良姉さんにそのことを伝え、早退ということにしてもらった。

小春はこのまま一人にすると何をしでかすかわからないのでうちにこさせた。

「はう〜ここが幸一兄さんの部屋ですか」

「前にきているはずなんだがな」

「わっなんでそういうこといんですか」

やっと小春が笑い出してくれたので俺はうれしかった。

「あとなにか必要なものは・・・」

俺がそういつて忘れ物がないか確認していると上から段ボールが落

ちてきた。

「うわっ、ビックリしたな、幸一兄さんこれなに？」

小春が興味津々に段ボールを見ていた。

「あいつらからの手紙だよ。時代は変わったのに未だに文通」

「ええ、いいじゃないですか心がこもってるような気がします。それにしてもまじめですね、こんな取っ手あるなんて・・・ちよっとみてみませんか？」

時間はすくなくしたが、俺も何となく見てみたくなった。

「わ、綺麗な絵、これ夕先輩ですか？」

「あ、それは朝鈴、ちなみにこの柔らかい感じの絵が夕、この写真は団、この字がだんだん斜めになってるのが大河、綺麗に行数をそろえているのが香、このおつきく一文字「愛」って書いてあるのが鏡介」

「ふわ、すごいですね、なまえみないでわかるなんて」

それはそうだ、この何百枚にも及ぶ手紙にはその枚数以上に俺を助けてくれたのだから

「あれ・・・幸一兄さんこれは？」

そこには自分で作った詩、そして毎回変わる楽器の絵そして下の方に一言「約束忘れるなよ」の文字

「狼もさ、送ってくれたんだよ何枚も」

小春が、我を忘れてるかのように段ボールから手紙を出す。

手がかりは詩、楽器の絵、「約束忘れるなよ」の文字

そして小春は何百枚の中から二十枚くらいの手紙を取りだし抱え込んで何かつぶやいた。

そのとき俺は忘れてはいけない「約束」を思い出せずにいた。

みんなが俺の家の前に着た。小春が狼からもらった手紙をどうしてもみたいというので貸してあげることにした。
そして霊園に行く途中

「わわわわ、先輩隠れて」

そう言われてみんな物陰に隠れる。

その目線の先には黒いスーツにグラスンというどこかのやくざのよ
うな格好のいかにも筋肉質そうな男が五人立っていた。

「あれだれ？」

俺は小春に小声で訪ねる、するとなぜか鏡介が

「あれは、日向家のガードマンだな」

「わわわ、なんでわかるんですか」

「フツ、これぞ愛」

「背中見てみなさい」

朝鈴がそういっているのでせなかをみてみた。すると

「日向家死守それぞ我が誇り」

「……なにあれ？」

みんなが小春を見つめる。

「わわわ、そんなみないてください、本当に恥ずかしいんですから」

「しかし、今の時代あんな典型的なガードマンっているんだな」

「で、近づけるの？」

朝鈴そう訪ねると

「……きついな」

「そうだな、あのガードマン強そうだし」

「っていつか何でガードマンなんか」

どうやら日向家の人々はよっぽど小春を嫌っているらしい

「どうだ鏡介いけるか？」

と俺がたずねて横をみるとそこには鏡介がいなかった。

「ね、小春、ガードマンってどれくらいいるの？」

香がそういうと

「この前庭に五十人くらいいましたけど」

俺はこれはたぶん小春には悪いけど無理だと思った。

「フッフ、我が親友よまたせたな」

いきなり鏡介があらわれた。

しかもなんかでっかい風呂敷持ってるし

「無理だな」

唐突に鏡介が言ってくる。

「実際に墓の前に人がぎょうさ、あと我が親友ちょっとこっち来てくれ」

そいつって、俺と鏡介はみんなから少し離れる。

「おそらく同じ結論が出ると思ったんでな、ちょっと出過ぎてしまったよ、だ」

「主語いつてくれって」

「残念だ、俺とおまえに言葉なんていらぬはずが、まさか！……！偽物」

「まじめなはなしなんだろ」

「ああ、日向妹の家に行って来た。あいつの部屋に黒ずんだシミが
たくさんあつたんだよ」

つまり、虐待を受けていたのだろう。

「確かに人の家庭に首をつっこむのはだめかもしれないがな」

鏡介が珍しく自分の行動に自信を持っていなかった。

「悪いな俺も同じ事をしていたな」

つまり、あいつの風呂敷の中には

「わっ、わっ、わっなんで私の家具が？」

「・・・なるほど」

「あいつ〜」

あつちではもう風呂敷をあけてだいたいの内容がわかっていた。

「ってことでのんぐだぞ」

そういつて鏡介は朝鈴の肩をたたく

「なんでよ」

「我が恋敵よ、日向妹と我らが愛の親友が同じ屋根の下で一緒に暮らすんだぞ」

夕は顔を赤くさせて、ブンブン首を横に振る。

「で、でも〜でも〜」

「あ〜もう遠慮しないの」

朝鈴はそう言うが小春はまだ悩んでいた

「明日、途中まで一緒に行こうな」

俺がそういつて、小春は

「わかりました。高橋先輩お世話になります」

「あなた、コウだと言つこと聞くのね」

『よろしくね〜小春ちゃん』

そして、結局狼の墓参りにはいけなかった。

俺はものすごい後悔した。

無理しても言つた方が良かったのではないか、しかし、もう日が変わってしまった。

外に光はいつさいない。

そして何も解決しないまま修学旅行を迎える

修学旅行変

修学旅行初日

「幸一、私あなたのこと好きです・・・」

俺は目を覚ました。

今日から修学旅行があるせいか東京にいる頃の夢を見た。

「ま、会うこともないだろ」

そういつて俺は一人納得する。

「おはよ〜」

「遅い」

いやまだ朝六時だし、なんで行事の時は昔からこうはやいのか

「コウ兄さんおはようございます」

『コウ君おはよ〜、ねえねえ昨日とっても面白かったの』

「なにかあったの？」

『あのね〜昨日小春ちゃんの歓迎会したんだけどね、トイレに案内したら戻ってこれなかったの〜』

「わ、わ、わ〜夕先輩ひどいですよ〜」

よかった、どうやらうまくやっていけそうだった。

問題は山積みだけどなんとかしてやんないといけないからな

そして荷物を持ち集合場所の駅に着く。

残念ながら小春と一緒にいられるのはここまでだが、小春の周りには人がいた。

自分で得た友達だ、少しでも明るくなって欲しいと思う。

「おはよ〜我が親友」

鏡介達 came。

「今日はなんか普通だな」

「フッフ、それは荷物が重いから〜だ!!!」

そういつて鏡介は大きな風呂敷をおろす。

「団の荷物は軽そうだな」

「・・・現地で買うから」

そういう団の持ち物は小さな手提げ鞆一つだった。

「じゃ、全員きたから行きますか」

班長香がそういうと

「ひい〜、おまえらひどいな〜」

大河が走って来た。

「あ〜ワスレテター。ゴメンゴメン」

「かたことですか」

そして電車に乗り込む。

東京までは電車一本では行けず、途中で新幹線に乗換える約二時間の旅である。

「ね〜コウ、東京ってどんなところ？」

俺は困った。

実際東京で遊んだことはあまりなかったからだ。
とりあえず俺は

「人が多い」

といった。

俺たちは電車の中でどこに行くかの話し合いをしていた。
どうやら団が有名な電気街に行きたいとのこととそこに向かうことにした。

東京についた。

結局決まったのはそれだけで後は適当という非常にアバウトな旅行

になりそうだった。
初めての東京にみんな

「わくなにあれ、たか〜い」

『見てみて、コウ君あれなに？綺麗』

「なにここ、人多い」

「フッフ、俺の愛の大きさ並みか」

皆田舎者まるだしだった。

「どうした大河立ち止まって」

俺が聞くと

「いや〜あまりに大きくて足が震えて」

「フッフ、チキンめ」

そして、団の希望の電気街に着く。

「・・・ここは天国？」

そう言って団は一人奥に入る。
とてつもなく張り切っていた。

「おいおい、団の目とてつもなくクレイジーだったぞ」

「あんな張り切ってる団久々よね」

鏡介と香もそれに気付いたらしい。
しばらくすると、両手に三袋ずつ荷物をもった団が現れる。

「それ全部買ったの？」

香が聞くと

「・・・大きいのは配達してもらった。」

団の目はとても達成感に満ちていた。

そして、今度は主に朝鈴の希望で服屋をまわることになった。
どうやら制服ではまわりたくないらしいが、俺にはそういうのは
わからなかった。
まわっている間、団はずっと新しく買ったデジカメの説明書を読ん
でいた。

「へーいろんな店があるのね」

「わくなにあれ、しかも安い」

『姉さん姉さん、これどうかな』

女子達はすごい盛り上がりようだった。
そんな時、突然朝鈴の腹の音が鳴った。
みんなが注目する中、朝鈴は顔を赤くして

「コウウ、おなか空いた」

ものすごい目で俺を見てきた。

『わ、わたしもおなか空いたな』

「そうね、コウお昼にしよ」

夕と香がカバーする

「フフフ、俺がおまえを食べてやろう」

「しかし、俺どこに何があるか知らないし」

「せんべいあるけど、どっ？」

「おっありがたい」

と大河は誰かからせんべいをもらう

「・・・この醤油味なかなか」

「フフフ、このりともべ〜ストマッチー!!!」

「たしかにいけるわね」

『おいしいね』

「で、あんた誰よ」

みんなが流してきたものを止めたのは朝鈴だった。

「幸一、ひさしぶりね」

この声はまさか

「ひつ光か？」

目の前に現れたのは市川 光である。

「おい、気安く我が親友にはなしかけるんじゃない・・・」

鏡介がそういおうとしたとき

「あゝあなた夕ね、なにこれ幸一、人形？かみさらさら、きれ」

鏡介を無視して、光は夕にむかって

『えっえっえ』

夕は光の行動にとまどっていた。

「わゝ顔真つ赤、ちょゝかわいい」

「コウなにあれ？」

朝鈴が聞いてくる。

「あつそのなんだ、俺の中学時代のクラスメイトでせんべい好きだよ」

「ひどいな、高校でも同じクラスだったじゃん」
そういつて光は近づいてくる。

「そういえばひどくない？あんなにメールをおくったのに」
そういわれて鞆の奥の携帯を見る。

「・・・メール60件」

団が見てくる。

そういえば携帯を東京を離れてから一度も開いていなかった。

「まっいいや、こんどからちゃんとみなよ」

「ああ悪かったな」

こんな騒いでるやつだが、頭のよさはよく、もしでは毎回全国十位に名を連ねていた。

親も医者と弁護士というエリート一家である。

しかしこいつがここにいるという事は・・・

「「「「「あつ」「」「」「」

ある五人の男の声が聞こえた。

俺は少しでも身を隠すようにしたが無意味だった。

「よ、松葉じゃねーか」

こいつらは一応同じ学校にいたやつらで、光と一緒にいたとき、
当時ほぼ他人との会話を拒絶していた俺に絡んできてうさ晴らしに

殴ったりしていった奴らなのだ

「相変わらず光と一緒にいたんだな」

五人の一人が話しかけてくる。

「……………」

「あいかわずだまってんのなおまえ」

「……………」

「お、おいコウ」

大河が話しかけてくるが俺は黙りこくる

「いい気になってんじゃないぞこおらー！…」

鏡介が動こうとするが俺は目で止める。

「おいなんだ松葉、かわいい子つれてんじゃないか」

そういつて夕の手を取る。

「ん……………」

俺は思わず反応してしまった。

「どうした松葉、おまえには光がいるんだろ」

そういつた瞬間真つ先に反応したのは夕だった。
急に目を赤くさせ手を放し走りかけていく。

「夕」

朝鈴が叫び追っていく。

「ひかり!!!」

俺は叫び

「香、団ついてっくれ」

「僕は？」

大河は聞いてくる。

「おまえは残れ」

「えっ!?!え!?!」

迷子になってもらったら困る。

「ほら団、行くよ」

「・・・まってくれ香」

今一瞬間に違和感を感じたがそれよりも今は

「おいなににらみつけてんだよ!!!」

一人がそういつていまままで耐えてきた俺はつい・

「まあちよつとまてよ」

そういつて鏡介は俺の前に出て

「おまえらに聞きたいことがある、このコウの肩にあるナイフの傷はおまえらか？」

そんなもんいつ見たんだよ。

たしかにこの傷はあいつらにやられたものだ、当時の俺はやらなきゃいけないことがあった。

どんな犠牲を払っても、たとえそれが自分の命でも

結局一瞬だった。

切れた鏡介が体の丈夫な大河を巧みに使いあいつらは逃げていった。

「僕のことは気にせず夕を」

ボロボロになった大河が力を振り絞る。

「鏡介任せる」

本当なら大河をおいて鏡介に探させた方がはやいが、さすがに東京で迷子はまずいと思った。

俺は走った。

三十分ほど走っただろうか、夕と光が一緒にいるのを見つけた。ちよつと入りにくかったのでちよつと離れたところで

俺は空を見上げた・・・

Before Story 4年前

俺は心が乱れていた。

思春期という時期、父親の死、ある人への責任・・・理由をあげればいくらでも思いつく。

母親に連れられた東京。

俺はただ母の後に付いて歩く。

アパートに着く、古くもなく新しくもない二階のアパートだ。

部屋は三部屋、風呂もトイレも台所もあった。

母は俺を座らせ荷物を置き、印鑑、通帳、保険証を渡し明応大付属中学というところに入るように告げて家を出て行った。

次の日には荷物も来た。

通帳の中にはお金が入っていた。

両親とも医者なので金は問題ないだろうと思った。

今唯一感じられること、田舎にいる友達だった。

次の日から学校に通う。

責任を果たすためにはそれ相応の成績を取らなければいけなかった。毎週のようにくる手紙には励まされた。

返事を書く。

このときだけが安らぎだった。

学校では成績のために勉強、家では責任を果たすための知識を入れる。

家はどんどん汚れたし、髪はぼさぼさになり、髭まで生えてしまっていた。

そんな生活が続き一ヶ月ほどがたった。

最初の校内テスト結果は162位、学年の人数200人。

かなり下だった。

また勉強をする。

睡眠は毎日三時間、手元には常にコーヒーがある。

「おいガリベン君、残念だったね〜」

同じクラスのやつが話しかけてくる。

名前は知らない。

「おい！！聞いてんのお前？勉強してもむだなんだよ。皆知ってるんだぞお前が家に帰っても勉強してる事くらい、才能ないんだよ諦めな」

俺は無視を続ける。

その時だった。

一人の女の子がいきなり俺の解答用紙を見る。

「いつ市川さん」

さっきまで俺に話しかけてたやつがそう言った。

どうやら市川という名前らしい、よく見ると結構美人だった。

そしてその市川という女の子は俺の解答用紙をパラパラみて

「すごいね君、基本はできてるし、応用力も高い、全部細かいミス、

確かにこれは私も危ないかも、それに・・・」

そういってその女の子は俺に近づき、俺のぼさぼさ髪の毛を手であげて

「やっぱり、結構かつこいい」

そう言っただけに微笑む、俺も一瞬照れる。
しかし、すぐに

「市川さんが危ないなんてわけないじゃん、ずっと1位なのに」

俺はその言葉に驚く。

「先生に言われたのよ。あなたの1位を超える人材が現れたって、名前聞いたら同じクラスの幸一君」

俺は思いっきり反応してしまった。

「「「こっぴどいぢー!?!?!」」」

俺の周りにいた奴らはそういって俺をにらみつける。

これが、俺と光の出会いだった。

それから何かと光が近くにいるようになる。

俺もなぜか光とはよく話せた。

身だしなみも整えていた。

何日かするとお互いを名前で呼ぶようにもなる。そんなある日俺は放課後勉強を教わっていた。

「ね、いまから幸一の家行っていい？」

「ゴミ屋敷だぞ」

これは決して嘘じゃない、しかし光は

「いいの、幸一が家で何をしてるか知りたいの」

「えっ？」

俺はクラスではみんな俺が家で勉強していると思っていると思っていた。

「だって一緒に勉強してたらわかるよ、幸一のこの効率の良さなら、家でもやっていたら私なんてすぐに抜かされるよ」

そういつてせんべいを食べる。

「うーん至福だね！」

「なんで俺たちは家にいるんだ？」

気がついたときには自分の家に着いていた。
しかも部屋もかたづけられていた。

「幸一って実は友達思いなんだね」

「えっ？」

そうやって目の前の段ボールを突き出される。
中には、九割方夕と鏡介がしめる手紙の山が入っている。

「じゃ私も帰るね」

「えっ、もうちょっといればいいのに」

「いいの？ ホントに？ でも私困っちゃうな」

俺は時計を見るともう十時を過ぎていた。

「気をつけて帰れよ」

「酷くない、まっいいや」

そういつて俺たちは玄関まで行く。

「あっ、そうそう、今度家来なよ。私の父親医者だから少しは役たつと思うよ。それに学校の勉強なら私手伝うからさ、一人でにっまんないように」

その時俺はほっとした。

人に協力してもらえるから？

自分の努力を知ってもらったから？

俺にはこの気持ちの理由はわからなかった。

なんとか光が夕を説得し、俺たちはホテルに着く。部屋は班に二つあり、男女で分けることにした。

「ね、コウなんでこの人いるの？」

大河がたずねる。

「逆らえないからしかたないだろ、それに夕達はすっかり仲良しだし」

「じゃ明日ここいってみたい」

『うわ〜面白そう』

「東京ってこんなものもあるのね〜」

そういつて女子達は観光用の雑誌を見て話しあっていた。

その時、鏡介が急に立ち上がる。

実は鏡介はまだ光を信頼していなかった。

「市川だったか？」

「ん？光でいいよ」

鏡介は光に話しかける。

「ちょっと外きてくれ・・・そして我が愛の親友が信頼しているものを見せ〜てもらおう」

そういつて二人は外にでていく。

十分後

光が部屋に戻ってくる。

「幸一、あいつ結構出来る。」

そういつて、腰を下ろし煎餅を食べる。

「うーん至福だね！」

俺は扉を開ける。

するとそこには倒れて痙攣しているかのように震えている鏡介のすがた。

「フッフ、デストロイだぜ」

そういつて鏡介は倒れる。

「・・・あの人何者」

「俺もわからない、鏡介と同レベル位だと思ってたけど、それ以上とは」

その後暫く、光の話しになる。

「へー親が医者と弁護士、金持ちぞー」

香がそういつ

「実際俺も光の家行っただけど、広さは夕ちゃんの家と大差無いと思

「うよ。」

「東京って土地高いのにすごいな〜」

『ふうんコウ君、光さんの家行ったんだ』

夕がなんかにらんでくる。

「あっそうそう、そういえば団」

俺は無理矢理会話をそらそうとして、思い出したネタは

「おまえ、香の事」

ズバツ

俺は夕、団そして復活した鏡介が俺を押さえ倒す。
すると香は

「なにやってんの?」

「コウを取るの誰かあらそ〜てんのさ」

『そうそう』

「ふうん団もはいつてんだ」

「・・・」

団は顔を赤くして首を横に振る。

「バーカ」

朝鈴は俺たちをみてそう言う。

香とちょっと離れたところに俺は連れて行かれた。

『コウ君だめだって、香この事知らないんだから』

「ってか気付くの早すぎだよ、僕知ったのこの夏休みなのに」

と大河

「フッフ、さすが我が親友」

「だって団の行動が香相手の時だけ違っただし」

「あんだ、他の人に対しては敏感なのね」

「・・・まっいつか話すつもりだったし」

「告白しないの？」

俺はそう聞くと、団がまた顔を赤くしてしまった。

「フッフ、これじゃ無理だと言うことさ、理解したかな我が親友」

「ああ理解したよ鏡介」

「フッフ、これはやるしかないだろう」

『姉さん、コウ君がコウ君が・・・』

「えっ？私も参加するわよ」

「・・・変な事するなよ」

団はそう言ったが今の俺たちを止めるものは何もなかった。

「いいからいいから」

「フッフ、俺たちにまゝさせるがいい」

その後就寝時間になったが、寝るはずもなく・・・

「香は夕にまかせといたよ」

と朝鈴

「香はなんか疑問を持ってたけどね」

と光

「多分それよりも、夕がここにこない方がすごいと思ったけどね」

俺がそつたずねると

「ああ、それなら僕がコウを一日使いたい放題って夕にいった

「からな」

「せめて俺に聞いてからにしろよ」

「どうせ断らないんでしょう」

朝鈴が不機嫌に言い出し。
となりで光は笑っていた。

「フッフ、大河、おまえなんて……人間以下じゃこのボキヤ」

そついつて鏡介は大河をボコボコにしはじめた。

「……それよりもどうしたらいい？」

「なにげ楽しんでんだろ」

「……つた」

と暗い中でも団が照れているのがわかった。

「つん、若いね」

「同じ年でしょ」

光と朝鈴がいう

「まっ最後はお前の決意だし、いい傾向じゃないか」

「とりあえず、明日行くところは決めてあるから、途中で別れればいいのかな？」

「・・・明日？」

「早いほうがいいからな」

「そうそう、その別れた後、幸一のお母さんの働いてる病院に行こうと思ってるんだけど」

「えっ!？」

俺は光の発言に驚く。

俺は中学になってから一度も母親には会っていない。手紙は何度か出していたが、この年になるまで会う機会、いや、会うつもりがなかったからだ。

「私も行くつもりだし」

「フッフ、みんなで会いに行くのもいいかもな」

「じゃ明日みんながんばりましょう」

「フッフ、がんばるのは、この二人だな」

そういつて鏡介は俺と団の肩を掴む俺は、不安だらけだった。でも、会いに行くことにした。

修学旅行二日目

「母さん、なんで東京いかなきゃいけないだよ」

「・・・」

「父さんが原因なのはわかるけど、なんで俺が東京行かなきゃいけないんだよ」

「・・・」

俺は母親の無言の眼差しが痛かったが続ける。

父親が死ぬまで、母親とここまで言い争った事はなかった。

「それに、夕ちゃんはどうなるんだよ」

「・・・」

「まさか、見捨てるきなのか？おい、答えてくれよ」

「ねえ、コウ落ち着いて聞くの」

母親が口を開く。

「今、日本でこの病気を治せる人はいないの、あなたの父親がこの専門のトップだったの、ここまで言えばわかるでしょう」

そう言って母親は俺から離れていく。

俺は目を覚ました。

田舎を離れる直前の夢だった。

「おい、大丈夫かコウ！おいコウ！」

目の前には鏡介の顔があった。

どうやらうなされていたらしい、額には多くの汗がたれていた。

「大丈夫だって、それよりも、お前にコウって呼ばれるのも懐かしいな」

「フッフ、そうかそうか、心配して損したぞ」

「ああ、悪かったな」

「フッフ、我が親友がそんな事をきにするでない、じゃ飯だから早く下降りてこいよ。そうしないと俺がお前をくっちまうぞ」

そういつて鏡介は部屋を出ていく。

団や大河はもう下に行っているらしい。

「あいつさ、あんたがいなくなった時、多分夕よりくやしがつてたんじゃないかな」

いきなり朝鈴が部屋に入る。

「暫く本当に落ち込んでたんだと思う、なにも出来なかった自分に」

それは、まるで自分にもいい聞かせるよかのように朝鈴は話していた。

「早く降りてきなさいよ。夕が待ってるんだから」

「待てよ、たまには一緒に行こうぜ」

「そうね、やめとくわ、隣で涙目になってる子がいるから」

そういつて横から出てきたのは、すでにボロ泣きの夕であった。

「え〜つと、夕ちゃん下で待ってたはずじゃ」

『だって、コウ君遅いんだもん』

夕は目を赤くして今にも泣きそうな顔で話す。

「あ、ごめんごめん、一緒に行こう」

そういつて俺は、夕の頭をなでて食堂に向かう。

そして、夕に聞こえないように朝鈴に

「悪いな」

「なに気にしてるのよ、あんたらしくもない」

そして食事を取る。

俺はみんなに自分の気持ちを悟られないようにたくさん食べた。

電車に乗ってついた場所は昨日雑誌で見ていた所である。

その場所とは浅草の有名な雷門通りである。

「うわ〜ここか〜」

香が目を輝かせている。

「ここいう所は似てるよな」

『香こつこつのに目がないから』

「じゃうまくやれよ我が親友」

「・・・ああ」

そして、俺たちも行こうとした時

「コウ」

団の声が聞こえる。

俺が振り向くと、何かを決意したかのように

「・・・互いにいい結果を」

「おう」

俺と団は互いに片腕を挙げる。

実際言っただけにして近めの物陰に隠れる。
しばらくすると、団のここにくる香。

「あれみんなは？」

「・・・コウの母さんに会いに行った」

団は馬鹿正直に答えた。

「おいあいつは馬鹿か？」

「あいつの頭なら嘘の口実でもつくれるのに」

大河と朝鈴はそう言うが俺は、団が本当の事を言ってるのに違和感はなく、逆にあいつの本気も感じられる気がした。

「フッフ、まっあいつらしいではないか」

『団くん香の前じゃ嘘付かないからね』

そうなの？と俺が首をかしげると、みんなが頷いた。団の話を書いた香は少し黙って

「うん、行くつか団」

「・・・えっ？」

「あそこに駄菓子売ってるんだよ」

そう言って香は団の手を取り奥に向かっていった。

「いい感じじゃん」

「じゃ私達も行くよ」

「せんべいも買ったしね」

いつの間にとみんな驚いていた。
俺たちが立ち上がり歩こうとしたが、夕は一人物陰から団と香が向かった方向を見ていた。

「夕ちゃんいこ、あの二人に問題なんかないよ」

『う、うん』

何か夕に元気はなかった。
そうしていると大河は

「大丈夫、全てうまくいくって」

そんなことのんきに言っていたが、夕は少し元気を取り戻したみたいだった。

一時間後、着いたのはものすごくでかい病院だった。

俺の母親はここで外科医をやっている。

四年に母親としての責任を止め、手紙とお金を送るだけの存在となつた母親。

確かに、今の世の中様々な理由で母親としての責任を行えない母親はいる。

それでも、俺は母親を本気で憎んだ時期もあった。

多分俺を見捨てたからではなく、俺の隣にいる大切な存在を見捨てたことに腹を立てたのだろう。

そして、何も出来ない俺の苛立ちを母親にぶつけていたのだろう。

今、俺はあの母親に会って何が言えるのか、何を言えればいいのか分

からない。

その時、俺の周りには
腕を肩にまわして言葉をかけてくれるやつ
心配そうにしたから見つめてくるやつ

馬鹿なことをわざと行うやつ

言葉に刺はあるけど根は優しいやつ

俺の全てを知り、同情ではなく協力してくれるやつ

そしてここにはいないけど、

物静かだけど、勇気があるやつ

いつでもなにかがあっても、変わることなく接してくれるやつ

俺達は病院に入った。

「あそこのエレベータで三階に上がって右の奥の部屋ね」

俺たちは光の言うとおりにして、一個の扉を前にする。

そして、その扉を開ける。

そのなかには、棚に入らずに散らばっているファイル
、様々なノートが置いてある三つの机、そして少し、痩せ老いてい
る女性が一人いた。

俺は口を動かさずにいた。

いや、動かしたかった。

でも言うことが思い浮かばなかった。

そんな中、その女性は涙を流し、俺に抱き付き

「こういち、こういち」

俺は一言

「母さん」

これしか言えなかった。

どれくらいの間がたったのか分からない、長い間かもしれないし、一分しかたつてないかもしれない。その無言を打ち破ったのは朝鈴だった。

「お久しぶりですおばさん」

「そうね、久しぶりね、鏡介君に大河君、朝鈴ちゃんに、光ちゃん話しはあなたの父から聞いてるわそれに・・・」

母親は夕の方を向いて手をゆつくりと伸ばし夕の頭に手を置き、ゆつくり頭を撫でて

「夕ちゃん」

『お久しぶりです、おばさん』

それからしばらく、ぎこちないながらも会話をする。

いままであった事、その内容のほとんどは手紙で書いたことであった。

あえて、夕の事に関してはいっさい話さなかった。

そして、帰る時間となる。

たった時間は実際一時間もいれなかった。

その別れ際母親は妙な事をこっそり口にする。

「夕ちゃんの髪飾りにあの人の言葉が」

「えっ!？」

「こういち、母さんね今度町に戻れそうなの、今度は逃げないつもり」

「わかった、待ってるよ」

昔の頃の家族ではないにしても、大事な一步を踏み出せた日だと思っただ。

しかし、髪飾りについては謎のままだった。

その後、団と香と再び合流する。

成功したようには見えないが失敗したようにも見えない。前から決めていたとおり、俺一人が団にこっそり結果を聞くことになっている。

「どうだった？」

「・・・明日まで考えさせてくれと言われた。」

その時、この二人を取り巻いていた微妙な空気が理解できた。

そして、俺からさりげなくみんなにまわすと、みんな色々な表情をみせた。

とりあえず、はやく明日になることを望んだ。

そして、団が成功することも望んだ。

その後、食事や買い物をしたが、俺は母親の言っていたことが気になり、ほとんど覚えていなかった。

今日の夜は光もいったん自宅に帰り、みんなも肉体的にも精神的に

も疲れていたもので、消灯時間になるとみんな寝てしまった。

修学旅行三日目

夕

私は目を覚ました。

時刻は五時をまわったあたりだった。

私は寝るということが嫌いである。

耳の聞えない私にとって、光も消える事は、この世界に私しかないという寂しさを感じるからである。

私の部屋にある人形もそれが原因かもしれない。

まだ皆寝ているかな？と思い周りを見渡すと香の姿がなかった。

私は香と団君が上手くいつて欲しいと思う反面・・・

『うらやましい』

そう思っていた。

とりあえず私は姉さんといったん帰ったはずなのに同じ部屋にいる光さんを起こした。

そして、ふとコウ君のことを思い出すのだった・・・

幸一

鏡介に起こされて目を覚ます。

何時も何かしらの夢をみるはずなのだが今日は見なかった。

鏡介の話しによると団は香に呼び出されて、宿の庭にいるらしい、俺は眠たい目を擦り、髪はボサボサのまま外に向かう。

庭には俺と鏡介以外全員が物陰にかくれていた。

「遅い」

朝鈴が小声で話しかけてくる。

夕はそれでも声大きいと感じたのか指を口の前に立ててこちらを向く。

「そういえば鏡介何で団がないことに気付いた？」

鏡介は当たり前のように

「睡眠なんて一時間あれば十分だろ、あとは寝たふりだったさ」

「ちなみにあの二人の声って聞こえる？」

「フッフ、俺様を誰だと思っている。この距離ならなんの몬드いもない」

しかし、ここで夕はきき耳をたてようとしていた鏡介をとめる。

『聞いちゃだめだよ。』

「確かに、俺としたことが勘違いをしていたようだ」

「ほんとだよな、団だって頑張ってるんだからな」

「覗いてる時点でだめなんだけどね」

朝鈴のそんな言葉に俺は、たしかにねと返しつつ、二人を見る。

残念ながら薄暗くて二人の状況はわからない姿がギリギリ見える程度である。

二、三分たった頃だろうか、団が急に腕で顔を覆う。

泣いているのだろうか、そう思った時大河が何を思ったか物陰から走り出した。

その瞬間、団が香を抱きしめた。

「鏡介！」

「フッフ、では我が親友を盛り上げに行くとしよう」

そして、俺達は団と香に向かって走り出した。

先に出たはずの大河を抜き去り、大河は

「僕の方が先に出たはずなのに」

と叫んでいた。

それに気づいた団と香は互いの体を離し、顔を真っ赤にする。

そして俺と鏡介は

「だ〜ん！！！！」

と言いながら、ラグビーのタックルのごとく突っ込む。

俺たち三人は倒れ込み、さらに僕も混ぜると言わんばかりに大河も倒れる。

「団」

俺がそう呼びかけると、かなり照れくさそうに、指をピースさせ

「・・・ブイ」

それを見た俺達は、感情のままに団をぐちゃぐちゃにしてやった。

女子の方は、夕が何も言わずただ大泣きして、逆にそれを香が慰めていた。

朝鈴は肘で香の背中を叩き、光はやったねと自分の事のように喜んでいた。

そして、日差しが出てきた。

まだ半袖だと微かに冷える時間、一人の男の恋が実った瞬間だった。

「本当に、しあわせそうな顔しやがって」

と俺は団の頭をグリグリ押しやってやった。

「・・・次は誰だろうな」

団はそっぴいながら俺の顔を見る。

俺は困った顔をしていたのだろう、団はうつむきだした。

「次は、もちろんぼ・・・」

「無論俺様だ〜!!!」

そっぴいながら鏡介は俺に抱き付いてきた。

それを見た団はほっとしたのか

「・・・そっかもな」

と言い出した。

朝食を取る時間になる。

団と香はなにも変わらず、普段通りの会話をしている。
俺は香に向かって

「ね、なんで普段通りなの？」

「だって、こつという関係になった時、みよくによそよそしかったり、会話の途中で気まづくなったり、そんなイメージない？」

夕や朝鈴も俺と同意見らしく頷く。

「だってね〜」

「・・・ああ」

このとき、二人が本当につきあいはじめたんだと実感した。

「それよりも今日どこ行く？」

香が話を変えてくる。

やっぱり恥ずかしいのだろうか、見ていて面白かった。

『じゃ、今日は課題終わらせちゃお』

「課題？」

俺がそんなのあったって顔でたずねると

『あつたよ〜』

と夕は顔を膨らませこちらを見る。

俺は一生懸命思い出したが

「思い出せない」

「大丈夫大丈夫、私も忘れてたから」

『姉さん！？』

「それで課題って？」

その課題というのは、班ごとに調べた事を発表するという、なんか小学生じみた事をするというものだ、しかも全校生徒の前でやるというのが驚きだ。

「・・・そういえば題材ってどうする？」

「フッフ、どうすれば社会のトップにのぼりつめることができるのか、様々な会社の社長に話を聞き、実行しようではないか」

「いや、社長には会えないでしょ」

それ以前に題材としては問題があると思うのだが、こういう時俺たちは毎回の様に結論が出る。

最初、適当に終わらせて遊びたい俺、朝鈴、大河。

真面目にやりたがる夕、香、団。

好きなことなら努力を惜しまないが大抵俺がいる方につく鏡介。次に夕が涙目で俺に訴えてきて、俺移動、俺に続く鏡介、これで勝負あり、結局真面目にやっってしまうのである。

今回ただでさえ凝り性の光がいるため大変なのはまのがれない。

結局、東京の歴史とかいうありふれていて、資料探しの比較的簡単

そんな課題になり大きな図書館に移動する。

電車で揺られること三十分、俺は少し前まで頻繁にお世話になっていた大きな図書館につく。

「変わってないな」

「最後に来たのつい最近だしね」

相変わらず煎餅を食べる光とそんな会話をすると、後ろからの夕の視線が寒気となってくる。

この図書館は建物の大きさだけでなく、本の蔵書もすごい、様々な専門家達も足を運ばせるほどである。

「とりあえず、何人かに別れて探して集合する？」

「そうだね、じゃどうしようか？」

そういつて振り向くと、すでに鏡介の姿はなく、みんな呆然とする。

「あいつ」

香がそういつて怒る。

当然だ、あいつがこんなところで課題を真面目にやるやつならこんな呆れない。

「・・・香一緒に行かない？」

「うーん、じゃ行こうか」

そういつてちょっと照れくさそうに団と香が図書館に入る。

「じゃ、私も……」

『「ちょっと待った!!!」』

俺と夕が逃げそうになっていた朝鈴の手を掴み、逃がさないように連れて行く。

それを見ながら光は笑いながら図書館に一人向かう。

俺は声をかけようとしたがいつの間にか消えていた。

『煎餅食べたまんまなのがいいのかな?』

「まっ大丈夫でしょ」

俺達も図書館に入る。

「僕を置いていかないで」

大河は走って俺達を追いかけてくる……が残念ながらその思いは叶わず、後に図書館の迷子のお知らせで放送されたのは、言うまでもない

夕

図書館の中でとりあえず課題に近そうな本を、私、コウ君そして姉さんと一緒に探す。

実際多くの本が短時間で見つかった。

私は先に奥の方に向かう。

角を曲がろうとすると、そこには手をつなぎながら本を探す香と団

君の姿があつた。

私はとつさに本棚に隠れる。

そして、その二人を見ながら

『羨ましい』

と一人で考え込む。

しばらくたつと姉さんは

「ごめん、トイレ行ってくる。これだから本が多いと困る。」

「さすが朝鈴、予想通りだね」

「うっさい」

そういつて姉さんはトイレに走って向かう。

途中係員に見つかり怒られるのを見て、私達は笑ってしまった。

「さすが朝鈴、予想通りだね」

『それさつきも言ったよ』

そして、二人して笑う。

そして私はふとさつきの二人を思い出し、勇気を振り絞ってコウ君の手を握る。

コウ君は機敏に反応して、手を放しこちらを向いて、その放した手を私の頭の上に置いて、膝を曲げ視線を私に合わせて

「タちゃん、どうしたの？」

私が望んでるのはそんな事ではない、ただ手をつないでくれるままでいい、とにかく妹みたいに扱われるのが嫌になっていた。昔はあんなにうれしかったのに

幸一

「夕ちゃん、どうしたの？」

俺がそんな言葉をかける。

それはそうだ、急に手を掴もうとするのは今までの夕では考えられなかったからだ。

夕は目を少し赤くさせたのでハンカチを出そうとしたが、夕は泣かなかった。

俺はその事にもすごい驚いた。

なぜなら、昔から目を赤くさせたら必ず涙が流れていたからだ。夕も変わっている。

いや、成長しているんだなと知り、うれしくなったが、結局、夕のさっきの行動は分からなかった。

その後、パラパラ本をめくり、もし必要な資料だと思ったらかごに入れる。

そして、さらにその中から厳選したものをコピーする。その作業をただ繰り返し返す。

かなりの量を探したので、ふと休憩を入れようとした時、何かが首に絡みつき、体重がかかる。

「どうした、鏡介」

「フッフ、さすが我が合いの親友、まさに奇跡」

「おまえ、俺が他人だったらどうするんだよ」

「そんな100パーセントありえないことは口にするとも皆無！」

こんなくだらない会話をしていると、周りからすごい視線、さらに近くにいた夕と朝鈴は他人の振りをする。

「ところでどうした？」

そういうと、鏡介は俺から飛びはね、一回転して着地する。

「まっいいから、こっち来てみろ」

そういつてついでいくと、そこには机にパソコンを置き、資料を見てまとめる団とそれを近くで見て感心する香の姿。

二人は時々顔を合わせて照れ笑いをする。

「いいね〜わかいね〜初々しいね〜」

「うわっ光!？」

「でも、本当なんかカップルみたい」

「まっ俺様達にはとうてい及ばないがな」

そっいいながら課題のことを忘れ二人の行動を見て笑っていたらいつの間にか閉まる時間になる。

「そっいえば昼飯食べてない」

と香がいうと

「いや、おまえ達見て俺達はお腹いっぱいだよ」

と俺がいつてみんな頷くと

「・・・えっ!?!」

そういつて団は顔を真っ赤にする。

実際はそれをみていて腹がたつたので、二人と見あたらなかった大河を置いて昼飯を食べていたのだ。

「とりあえず結構集まったみたいだし、今日中に終わるかな」

「フッフ、発表の時間が楽しみだな」

そういつて鏡介はものすごく不気味に笑う、多分いつもの悪ふざけだろうが、こいつは何しでかすか分からないからな

「委員長として、注意しとくからね」

と香も半ばあきらめて言う。

「幸一、私が止めてもいいけど」

光がそういつてくる。

「ほ、う、この俺様を止めると」

「一昨日の勝負わすれたのかな？」

そういつて二人はにらみ合う、俺は案外気が合うんじゃないかと思
った。

『あの二人仲いいよね』

夕もそう思っていたみたいだ。

その後宿に戻る頃にはもうあたりは真っ暗だ、夏が過ぎると日が落
ちるのが早く、なんか少し寂しい気持ちになる。

課題を終わらせるため、女子の部屋で資料をまとめる。

鏡介は

「フッフ、やらねばならぬ事があるのさ」

といつて男子の部屋にこもってしまった。

いつもの事なので気にしないようにしていた。

資料の方に関しては、かぶっていたのはあったものの、ちゃんと別
々の物があったのでとりあえず形にはなりそうだった。

『そういえば明日で最後だね』

不意に夕が言い出した。

「光とせっかく知り合えたのに」

「そんな事言つて、実はずっと私と幸一が二人っきりにならないよ
うに見張ってたのにな？」

「うっ」

『そうなの姉さん?』

「そうなの朝鈴?」

俺と夕がほぼ同時に話しかけると、急に顔を真っ赤にさせ、フンと
いってそっぽ向いてしまう。

『じゃ、明日二人で遊んできたら?』

と夕が言ってきた。

俺は困惑していたが、光は目を輝かせている。

「じゃ、昼までに駅着けばいいんだよね?」

俺がたずねると香と団が頷く。

『じゃ楽しんできてね〜』

「でも、課題終わらせないと」

「いってそんな事私達やっとかから」

「・・・そうだよ、少しは楽しめ」

そうして俺と光は明日少しの時間だが遊ぶ事にした。

修学旅行最終日

夕

私はなんであんなことを言ったのだろう。
コウ君と一緒に最後まで遊ぶつもりだったのに、やはりあの時の言葉が気になったのだろうか？

修学旅行初日、変な男達に引き寄せられ、その男が言った。

「おまえには光がいるんだろう」

これが聞こえた時、私は自分の中で何かが砕けたかのように涙をながして走った。

前からコウ君のことは好きだった。

それを私と離れていた三年間コウ君と一緒に過ごした人、何かの間違いであつて欲しいと思いつつも真実がわからない私とはとにかくあの場所にはいられなかった。

しばらく走ると、誰かが私の肩を掴んだ、光さんだった。

今もつとも会いたくなくて、もつとも会わなければならぬ人に捕まった。

「私、こうみえて結構運動神経いいんだ」

確かに私は息を切らしていたのに、彼女の肩の動きは乱れていなかった。

すると彼女はある方向を指差し

「えっと、さっきの言葉で逃げたってことは、普通にしゃべっても問題ないんだよね？私あなたとお話したかったんだ」

凄く頭のいい人だと私はおもった。

彼女の後に着いて行くと彼女はベンチに腰を降ろし、煎餅を勧める。

私は首を横にふり、ベンチに少しスペースを開けて座る。少し沈黙が続いた後、彼女がこちらを見てしゃべり出した。

「さっきはさわいでごめんね、幸一が見えた時ね、うれしかったんだ」

煎餅のバリツとかんだ音が聞こえた。

「それに、夕ちゃんにも会いたかったしね、ああ、私のこと光でいから」

さっきのごとく私は圧倒される。

わたしは、コウ君のことをたずねると、彼女は

「あははは、残念ながら何でもないよ。多分向こうは何とも思っていないんじゃないかな、あなたのこと本当に大事なんだと思うよ」

私は少し驚いて、話の続きを聞く。

「私のこと、大事な友達だって、結構悲しかったんだよ。あきらめずに三回も告白したのに・・・」

その言葉を聞いて、彼女は本当にコウ君の事が好きなんだとおもった。

そして、それでも友達の間を続けている二人、コウ君も彼女が必要な存在なんだと思う。

『コウ君、友達大切にする人だからね』

「私もそう思う、それに・・・いや、なんでもない」

彼女はそこで口を詰まらせる。
なんなのか分からなかった。
でも、なぜか安心していた。
その後、私達は仲良くなっていた。

そして、昨日の最後という言葉に私は思わずいってしまっていた。

『じゃ、明日二人で遊んできたら？』と

そして、朝七時に二人は宿を出る。

幸一

朝七時、俺は光と外に出る。
昨夜は夕のなんとなく寂しそうな顔を思いだして眠る事ができなかった。

「ずいぶん眠そうだね」

「まあな」

「夕ちゃん？」

「まあな」

「嘘つかないんだね」

「まあな」

「私の事好き」

「ごめんなさい」

「よし、ちゃんと起きてはいるようだね、じゃはりきっていき〜！」

そして俺たちは、正確には、光と彼女に引っ張られる俺は、遊びに出かける。

とは言っても、この時間はまだ店とか開いていない、とはいってもサラリーマンや学生で道は混んでいた。

「気にはしないんだな」

「もつちろ〜ん、幸一が私の事どう思っているか分かっているつもり、でもね……」

そこで、光は一瞬悩んだのか一息入れる。

「幸一が思っている事はつきり言わないと、気づかないうちに人を傷つけるんだよ。」

「……」

俺はそこで夕の事を思い出した。

なぜかは分からないが、俺は夕を傷つけているのかもしれない。

「じゃ、行こうか、私はもうなにもいわないし、敵に塩を送りたくないし」

「へっ!?!?」

「なんでもない、なんでもない、あつバス来た。これ乗ってこれ乗って」

「おし！行きますか」

俺は一回顔を叩き、そう言う。
向かった先は、水族館だった。

「ほら、鮫だよ鮫」

「普通こういう時、イルカとか、観賞用の色鮮やかな魚とか見ないか？」

「だって歯だよ歯」

そこには、口を大きく開けている鮫がいた。

「そういえば、ここにいる魚なんで食べられないんだろっな」

「ここにいる鮫はね常にお腹いっぱいなんだよ」

「その発言、夢ないって」

次のコーナーには小さな観賞用の魚がたくさんがいた。

それを見ると、以前、みんなで水族館に行った時に、夕がその魚を見て、そこから動かないでずっと目で追っていたのを思い出した。
そして、ポーとしていた。

するとそれに気づいた光は溜め息をつき

「はい」

そういつて手を差し出す。

俺が不思議そうな顔を見ると光は深呼吸をして

「今日のデート代、夕ちゃんのとこ行ってきな」

俺は黙って頷き、金を出して

「今度はちゃんとメール返すよ。」

「頑張れよ。あっちのほうもね」

そういつて、俺は走り出す。

別れ際に、なんで敵に塩振ってるんだろ、という光の声は忘れる事にした。

走り出したものの夕達の居場所がわからなかった。

そこで、修学旅行初日に団が買った携帯に電話をかける。

「・・・団です。」

「俺だよ俺、幸一、今どこにいる?」

「・・・えっ!?!」

そうするとなにか風が走るような音がして

「フッフ、我が親友どうかしたのか?」

「お前、確認しろよ」

「そうそう、大変な事が起こった。落ち着いて聞くがよい」
そう言って一息おくと

「夕が倒れた。」

俺は自分でも信じられないくらいの早さで病院についた。

「教訓、1つ、人の話は最後まで聞こう。」
と鏡介がいう。

「2つ、夕の事になると我を忘れすぎ」

と朝鈴がいう。
そして、夕が歩いてきて

『コウ君、どうしたの？』

俺は訳が分からなくなりましたね。

「寝不足だって、昨日あんな事言わなかったら良かったのにね」

『それより光さんは？』

「夕ちゃんが心配だったからな」

そういつと夕が顔を真っ赤にする。

「……医者がもう帰っても大丈夫だって」

「フフフ、じゃ遊ぶとしようあと三時間しかないぞ」

そうして俺たちは騒いだ、夕はまだ眠いのかすごい静かだった。

そして、俺達は帰った。

最初はいやだったけど、東京に来て良かったと思った。

「そう言えばもうすぐ文化祭だね」

「……あと一ヶ月あるけどね」

「フフフ、騒ぐとしよう」

電車の中でそう言う話をする。

『楽しまないかね』

「ああ、そうだな」

学園祭編

十月一日

「いやあ、あれは本当面白かった。」

修学旅行が終わり約一ヶ月がたった。

今は通学中、修学旅行が終わって三日後に行われた発表会の話しをしている。

「あんだね、確かに先生達も笑ってたけどさ、私達までおこられたじゃないの」

『本当面白かったよね。校長の歴史とかいって勝手に映画作っちゃったし』

そう、修学旅行最終日に鏡介が作っていたのは、校長の昔の写真や卒業文集を面白おかしく画像化したものだった。

「っていうか、あの写真とかどっからとってきたんだ？」

「フッフ、昔の事などどっくに忘れてしまった。」

「そつえば、私達大事な事忘れてない？」

香の発言に皆が考える。

学校に着くとそれがなんなのかわかった。

「後一週間で文化祭です。皆さん案出してください。」

朝のHRで委員長である香が黒板の前に立つ。

「喫茶店とかでいいんじゃない？時間かかんないし」

とある男子生徒がいう。

それに対して、お祭り男の俺達が黙っていない。

俺と鏡介は同時に立ち上がり

「どうせなら賞取るうぜ！」

その発言に皆は「おお」と声をあげる。

そして鏡介は俺に抱きつく。

賞とは文化祭でもっとも素晴らしいクラスに送られる物で、生徒、先生の票によってきまる。

「しかし、なにをやってたらいんだ？」

確かに、一五クラスと委員会の出し物が戦うわけだけなら簡単には勝てないだろうと思う。

「・・・劇」

だんが拳手をしてパソコンを広げる。

どうやら過去五年間のうち四回が劇で賞を取ったらしい。

『じゃ劇だね、何にしようか？』

「タがヒロインやって、人魚姫とかは？」

朝鈴のそんな発言に夕は少し考えて

『やだよ、私にはコウ君刺す事なんて出来ない』

実際刺さないのだから問題ないのではないか、っていうか俺が王子役なんだと思いつながら聞く。

「フッフ、じゃシンデレラだ、当然俺様は魔法使いのおばあさん役だ〜!!」

「・・・そのおばあさん悪役になるよ」

しかも、鏡介を悪役にした場合誰も勝てない。

そうやって騒いでいると、香が「静かに」と叫ぶ。

そして、十分間、自分一人で考えるように言われた。

俺は色々昔話を思い出そうとするが、案がいまいち合わない。

何分か経つと黒板に何個か案がでる。

二十人で出来るという物はやはり難しいらしく、みんなも困っているみたいだった。

誰が言ったのかは分からなかったが、クラスの票の結果、白雪姫と人魚姫の僅差のすえ白雪姫となった。

配役は推薦という奇抜な策が取られた。

つまり、この人ならこの役を完璧にこなすだろうという物だった。とりあえず、役の種類を考える事になったのだが、なんだが景色が暗くなる。

『コウ君、コウ君』

なにかが俺を揺すり、目を覚ます。

黒板には色々書いてあった。

すると黒板の右から二番目、カタカナで二文字「コウ」「ウ」さらにその上に王子役とある。

「全く、あんたが寝てるせいで」

朝鈴が肩を震わせ話す。

俺はとりあえず状況の確認をする。

最近確かに睡眠時間は毎日三時間と短かったが、どうやら寝てしまっていたらしい。

「役決まったって事でいいのか？」

「フッフ、波瀾万丈だったぜ、まさにミステリーさ」

とりあえずもう一度黒板に目をやる。

王子ーコウ

監督+選曲ー香

作本+小人その6ー団

悪の女王+衣装ー鏡介

小人その2ー大河

照明ー夕

姫―朝鈴

「質問が一つや二つではないんだが・・・」

「はいはい、だいたい分かってるわよ」

「とりあえず、朝鈴が姫なのと鏡介が衣装やってる事はありえないだろ」

「あんたのせいなのよ。」

俺はわけが分からなかった。

「フッフ、その謎はだな、我が親友・・・よし皆のもの三十分前の回想だ」

そう言うとみんな鏡介のかけ声で元の位置に戻る。
みんな面白いな〜と思いつつ見守る。

「はい、じゃ役も決まったから、推薦して」

香がそういつと真つ先に手を上げたのは鏡介だった。

「フッフ、木の役はとりあえず大河だろ、歩いていても犬に尿をかけられ、手を広げれば野良猫に引っかかれ、汗には大量の虫が止まる。か〜んぺきな木なのだからな」

「僕そんなことされませんから」

「監督は水村さんがいいと思う。このクラスまとめられるの水村さ

んくらいだろうし」

クラスの女生徒がそういう。香は独り言で「やっぱり私劇の上にながれないんだ」と言う。

「その代わり私監督なら台本書くのは団だからね」

団と香は顔を真つ赤にさせる。

クラス全員で「おお〜」と言う。

「これさっきも言ったのか？恥ずかしくないの？」

「はい我が親友は黙って寝たふりしてる」

鏡介に注意された。

そして夕が手を上げる。

『姫役は姉さんがいいと思う』

「えっ！？私？無理無理絶対無理」

ぼくっとしていたのか、朝鈴は夕の発言に驚く。

そこで鏡介は、立ちながら夕に対して

「フッフ、いいのか夕よ、俺が一言コウを王子役にしたいといったら、朝鈴とコウは・・・そんなことが許されるかこゝのやろう、朝鈴ふざけんなよ。コウは俺様のもんだ」

「なにいつてんのよ。あんたに姫やらせたらそれこそ終わりよ。悪の女王でもやってなさい」

「・・・正確には一応城の王妃らしいぞ」

「いいじゃないのよそこらへんはオリジナルよ、オ・リ・ジ・ナ・ル！！それに姫って言ったら夕じゃないの普通に」

「ね〜はやく終わらせない？もう六時よ」

ちなみに今は七時を少し回ったあたりである。

ここで鏡介は

「フッフ、ここに役の種類を書いてある紙が十九枚ある。さあみなものここに役を人の名前を書きまくれ！！！」

「鏡介、あんたいつの間に、まっ気にするだけ無意味か、じゃみんな書いて」

香がそういつて全員分配る。

その結果を書いた結果が今の黒板の状態らしい。

朝鈴がさつきから怒ってたのは、俺の一票があったら夕と同票なると思っていたのだろう。

俺が朝鈴に向かって

「おまえ馬鹿だな」

と言つと朝鈴は

「うつさいな、なにが馬鹿なのよ」

「だって俺が夕ちゃんに負担かけさせるわけないだろう、それに夕ちゃんが姫役になっていたらお前どうするんだよ。お前裏方やったら全部壊しちゃうし」

「どづい意味よ」

「あゝ、ほらそこ喧嘩しない、姫と王子が喧嘩するとか前代未聞でしょ。じゃこのまま提出してくるからみんな帰っていいよ。」

香がそういつとみんな解散する。

「じゃ待つてようか」

『そつだね』

「フッフ、我が親友、それに夕よ何もわかってないな、ここは団一人に任せて邪魔もくのは立ち去るんだよ。じゃあな団よ。そしてあの世に逝ってしまった大河よ」

「僕を殺すなんていい度胸だな、お前の家に根を張って居座ってやる。」

俺が「やっぱ木じゃん」って突っ込むと大河は「しまった」と言う。

「じゃあな団、台本しっかり頼むぜ」

『バイバイ』

そして帰り道、やはり話すことは文化祭だ。

「香とか団とか二役もこなすの大変だろうな」

「そうね、二人とも責任感強いからね。」

「フッフ、我が親友よ俺様も二役だぜ、衣装は任しとけ、完璧な衣装を作ってやるよ。」

そう、この鏡介が衣装を作る。

残念ながらこいつは本当に器用なのだ。

どれくらい器用かと言うと、ゴミから自転車を作ったり、廃車を復活させたりを小学生でおこなっていたのだ。

つまりこいつに言わせると、衣装作りは寝てても作れるのだ。

「まあ俺様だからな」

「人のモノローグまで読むな」

その後、俺の家の前まで着く。

「そういえば小春は元気か？」

『大丈夫だよ。今日もクラスの文化祭の準備で朝先に行っちゃったし、あっコウ君絶対に来てだって』

あの日から、小春という少女は高橋家でお世話になっている。

あの時から状況は何も変わっていないのは残念だ。

とりあえず俺にできることは、会って話すことだけである。

「そんなことないわよ。あの子今とても元気よ。まあ私たちの親も

すごいんだけどね、毎日の様にパーティーだかなね」

「俺って考えてること口に出してる？」

朝鈴は「なんのことだろ？」と喋って顔を背ける。
正直怖い。

「じゃ〜夕ちゃんまたね」

『うん、また明日』

「・・・」

朝鈴がこちらを向いている。

「朝鈴」

「えっなに!？」

「いくら姫役が嫌だからって休むなよ。」

ドスツ、鞆が俺の頭に当たる。

「じゃまた明日」

そういつて夕と朝鈴は少し離れたところの大きな家に向かって歩き出す。

俺は「また明日か」と一人で呟く。

田舎に戻ってから一ヶ月ぐらい経つが、言葉の大切さを改めて感じた気がした。

夕食後、俺は自分の部屋にいる。
修学旅行から帰ってきてから、俺はまた勉強をしている。窓からは高橋家が見える。

そこらじゅうが明るく、盛り上がっているようだった。

小春は今幸せなのだろうか、俺はどうしたらいいのかな？と思いつながら勉強する。

そして勉強が終わると次は日課なっている・・・

十月二日

目が覚める。

ピキツ、体中が痛い、どうやら机の上で寝てしまったのであろう。

椅子から立ち上がると布団が落ちる。

誰が乗せたんだろ？と思いつつリビングに向かう。

今日は土曜日、都会とかだと休みなのだろうかこの学校ではちゃんと午前中だけ授業がある。

とはいっても、午後は文化祭の準備があるので平日と対して変わらない。

下におりると、朝食を食べてる夕と朝鈴と小春の姿があった。

俺の姿に驚いたのか朝鈴はご飯をのどに詰まらせる。

「コウ兄さんおはよう」

『コウ君おはよ〜』

「何であんたがこの時間に起きてるのよ」

「みんなおはよう、それにしても朝鈴、早く起きても遅くおきても文句言うのなお前」

今日の俺はいつもより三十分近く早く目覚めていたらしい。
夕と朝鈴は制服姿、小春は走っていたのかジャージ姿だった。
今はこうして小春もうちで朝食をとるようになったが、最初は大変
だった。

しかし、俺の祖父母はどうやら小春の家に電話したらしいのだがそ
したら「うちには娘はいません」と言ったらしく。
今では

「小春さんここをあなたの家と思って使っていていいからね」

と言う状況になっている。

少しはやめに家を出る。

『はい、コウ君お弁当』

「ありがと夕ちゃん、いつも悪いね」

俺はそう言い、夕の頭を撫でる。

最初の一週間近くは大変だった。

なにせ、俺が食べるたびに『これ好き?』と聞き、俺は当然嫌いとは
言えない、夕の作る料理は確かに美味いし、見た目もいいのだ。
しかし、次の日に出るのは、前日好きだと答えたものに新たな料理
を追加された質問される。

危うく、重箱を持ってきそうな勢이었다(実際一週間後、重箱を
用意したらしいが、朝鈴がたまたま起きて止めたらしい)。

今でも、質問はされるが量は本当にちょうどよくなって助かっ
ている。

しばらく歩くと、いつも鏡介と出会っ場所に着く。

どんなに早かろうが遅かろうが、ジャストタイミングで現れるはずの鏡介は来ていなかった。

「さすがの鏡介もあんたの早起きまでは見抜けなかったようね。」

『でも逆に、俺とそんなに早く会いたかったか、我が親友とかいいそうだけどね』

「でもどうしたんでしょ、鏡介先輩」

時間には余裕は全然あるのだが、先に行くことにした。

さらに、行く途中で小春に文化祭で何をするのか聞かれたが、「今は内緒、当日のお楽しみ」と言っておいた。

その後、よし姉さんは鏡介が欠席するとのことを告げた。

俺は真剣に驚いてよし姉さんに理由を尋ねた。

なぜなら、あいつは何よりも学校で楽しむことを好きなやつだからだ。

幼稚園も小学校も中学校も高校の今まで全部来ているのだ。インフルエンザでも内緒で学校に来て、学級閉鎖でも学校に来るほどのやつなのだ。

確かに早退は何回かあるけれども、欠席したことは一度もないはず。しかし、よし姉さんにも理由は分からないらしい。

俺は多少心配になりながらも、授業は聞かず、自分の勉強にいつも通り行く。

この間、光に頼んで俺の元学校の授業の資料と、受験用の資料を送ってもらっているのだ。

今はそれを行うことしか俺には出来ないから・・・

どうやら、鏡介に心配されるという文字はないらしい。

鏡介は、帰りのHRが終わると同時に教室に入る。

なにやら大きな風呂敷を持ってきて、鏡介は珍しく肩で息をしていた。

そして、鏡介は俺のほうを見て

「フフフ、ついに完成したくせ、我が親友との時間、とてつもなく大事な時間、俺にとっては一億払っても取り戻したい大切な時間を使い、全員分の衣装を作ってきたのさ。受け取れこのやるくども」

そういつて鏡介は風呂敷の中にある衣装を、みんなに投げ渡した。

「しかし、どうやったんだよ」

「フフフ、愚問だよ我が親友、そしてこれが王子役の衣装さ」

鏡介の用意した服は、ピッチピチのボタンつきの青い服に王冠、よく絵本などで見るカボチャパンツ、そしてとどめが純白の白タイツという服を、こともあるうにこの男は作ってきたのだ。

「お前、俺がこんなの着てうれしいと思ってるのか？」

「フフフ、どうせなら何も着ないという手もありかもな・・・じゅるり」

俺は一瞬背筋が凍った。

この男ならやりかねないからだ。

そう徹夜なんて簡単なものかと思うかもしれないが、おそらくこれだけの量を作るだけの集中力をつかったのだ、今の鏡介はいつも以上にやばいかもしれない。

少しの間の後鏡介は俺の肩を叩く。

俺はビクツと仰け反る。

鏡介は急に大笑いを見せる。

いつもの不敵な笑みとは違うものだ。

「悪い悪い、我が親友よ。お前の反応があまりにも面白いのでな、しかしこの服の配色に5時間を費やしたんだが、いかに結果が分かっていたとしても残念だ。」

「そんな時間あるなら、学校来いよ！」

俺は、ため息をつきながら、鏡介服を渡し、代わりに白いタキシードみたいな服と赤いマント、そして王冠。

どうしても王冠は外せないらしく、鏡介徹夜してまで頑張ってくれたので、王冠も受け取ることにした。

「しかし、あんたもマメよね、監督の服まで作ってくるなんて、とりあえずみんな試着してみて」

香はクラスメイト全員にそういうと自分の服を確かめる。

深めの帽子に作業服のような上着にサングラスまで用意していた。

皆がそれぞれの役の衣装を着る中、俺はパソコンを打っている団のところに行く。

「調子はどう？進んでる。」

「・・・とりあえずね」

そういつて団は椅子の背もたれに体を預け、腕を伸ばす。

俺はパソコンの中身を見ると、もしかしたらこいつも徹夜組だろう

と思うほど、いや実際には徹夜組かもしれないが、かなり進んでいる。
ちゃんと役名とコメントさらには表情まで細かく書いてあるのに、後半まで終わっている。

「・・・香に聞いたらグリム童話風のできたいらしいからね、資料探したら後は簡単だよ。」

「お前寝てないだろ、少しは休めよ。」

「・・・鏡介ほどじゃないって、それに俺が出来ないと何も進まないし、授業サボってまでやってるからね、早く終わらせないと」

団には珍しく、長く俺に話しかける。

団は本気なのだろう。

団どころか、このクラスにはふざけてるやつはいるけど、皆本気で挑もうとしている。

そこへ、鏡介入ってくる。

「ほれ、受け取れ、我が親友たちよ。」

そういって、俺にはブラック、団には微糖の缶コーヒーを渡す。

「俺は要らないのに」

俺がそういって鏡介は

「フッフ、コウよ、人の心配をする前に、自分の心配をするんだな、分かってるんだぞ、お前が最近夜遅くまで起きてることくらい」

俺はあわてて鏡介の口を塞ぐ。

どうやら団以外には聞こえてないらしい、別に聞こえてもかまわないのだが、夕に嘘はつきたくない、これが俺の本音だ。

「おい、我が親友よ、皆の前で照れるじゃないか」

そういわれると俺は手をすぐ離し、皆の視線が集まるなか、缶コーヒを一気飲みする。

「とりあえず、サンキューな鏡介、あと団本当に無理はするなよ。手伝えることあったら言ってくれ」

「・・・ありがとう」

そういった後、俺の肩を誰かが叩く。

振り返ると、そこには長い髪をつけ、白をベースに青や黄色を使ったドレスを身に纏う女の子の姿があった。

『どうかなコウ君、姉さんから借りたんだけど』

と手話で話す女の子、俺はその子に対して・・・

「いたっ、何すんのよコウ」

デコピンをした。

そして、この女の子の正体は朝鈴だった。

俺も一瞬と惑うほど似ていた。

手話も使ってきたのでさらに悩んでいたかもしれないが、それほど朝鈴がきれいに見えてしまった。

「馬鹿だろお前」

俺がそういうと朝鈴は俺の足に蹴りを入れた後、自分の席に座る。クラスの皆は俺が朝鈴と夕の区別が出来たことに対して歓声を上げる。

「フッフ、さすがは我が親友だ、しかし実は簡単に見分けがつくんだよな、胸というところで」

「確かにそれは簡単に区別がつくかもしれないが、同時に友としての地位を失うぞ。」

朝鈴はすぐに元気になり、笑顔で俺の頭を靴で殴った。

結局、団は俺たちに助けを求めず、一人でパソコンを打っていた。

この日はとりあえず舞台をどうするかとか簡単なものしか決められず、明日は全員学校前に集合してまたいろいろ文化祭のために準備するらしい。

その後家に着いた俺は、いつもと同じくことをする。

その時、劇で着る衣装が一瞬目に映り、なぜだか俺は笑みが出て、勉強に取り組み始める。

夕

コウ君が夜遅くまで起きている。

私は耳が聞こえないが鏡介君がそうだったことは分かった。

そしてコウ君は私達にそのことを知られたくない雰囲気だった。

何なのだろう？

それに、姉さんは何をしていたのだろうか？

照明係の私は劇を上からしか見えない、想像すると、少し孤独を感じた。

なぜか今は悪い考えしか出ない、自分が自分じゃないみたいだ。とりあえず忘れて寝ることにした。そして、皆疲れてるかもしれないけど明日パーティーでもしたらどうだろう?などと思いついた。

十月三日

夕

いつも通り朝五時に目を覚ます。私の周りは人形がたくさんある。自分で買ったもの、姉さんが買ってくれたもの、そして、コウ君のくれたもの……。みんな私が孤独を感じないためにある。これらの人形がなかったら私は未だに一人で寝れなかったかもしれない。今日は日曜日なのでパパもママも寝ているのでこっそり台所に向かい料理を始める。今日は学校は休みだがお弁当を作る。もしかしたらコウ君が喜んでくれるかもしれないからだ。ほうれん草のあく抜きをしているとき、階段の方から人の気配を感じる。おそらく姉さんだろう。

「おはよー夕……。って今日は休日じゃん、もう一眠りしなきゃ。」
「駄目だよ姉さん、今日は文化祭の準備なんだから、主役がない」とはじまらないよ。」

「はいはい」と返事をして姉さんは欠伸をしながら、洗面台に向かう。

「ん〜いいにおい、料理美味くなったんじゃない？それよりもあんなのまじめさにも驚きよ。」

姉さんが髪を梳かしながら、こつちを向き話す。

はつきりいつて私の料理は姉さんに全然及ばない。

私は結構量とか気にして作り、姉さんは完璧に目分量なのに美味しい。

姉さんの料理は食べるたびに微妙に味が変わるが決して不味くならない、逆に美味くなっているのだ。

「あれっポストになんか入ってる。」

そういつて姉さんは玄関に向かう。

そして、白く少し厚めの二冊の本、ついに私達の舞台が始まった。

幸一

カチ、カチ、カチ、カチ

部屋の中、時計の音が大きく感じられる。

現在の時刻は四時である。

明日、いや今日は学校がある。一応集合は九時だった気がする。

「よしもうちよつと頑張りますか」

そういつて俺は本のページをめくる。

勉強の本ではない、俺にとっては勉強より大切と即決に言えるものがこの本によつて得ることが出来るかもしれない。

本のページ数は全部で千を超える。

さらにその本が俺の部屋の至る所に隠してある。

決して十八歳未満は読んではいけないという本ではない。

とりあえず窓から外の景色を見ると・・・鏡介の顔があつた。
驚くのだが、夜なのでうるさくするわけもいかず、窓を開けて鏡介
に入るように促す。

「邪魔するゝぜ、我が親友」

「こんな時間にどうした？なんかの悪巧みか」

「フッフ、それもナイスな意見だが、残念ながら俺様は今クラス
全員にこれを配っているのだ。」

そういつて渡されたのは白い厚めの本、文化祭の台本だった。

「今日は団の家に泊まっててゝな、台本出来たらすぐ動けるように
準備していたのゝさ」

「いつてくれれば俺も手伝ったのに」

俺がそういつと鏡介は少し悲しい目つきで、まじめに話しかける。

「コウにはこれがあるからな、真剣な話、俺様はコウにこんなこと
をしてほしくない、ただ昔のように遊べればそれでいいじゃないか」

「やめるわけにはいかないんだよ。諦めたくないんだろっなきつと」

「俺はそれには手伝えない、でも少しでもお前に問題が出たらやめ
させるからな」

鏡介は言葉を強めにはなつた後、いつもの表情に戻り、窓枠に足を
掛け

「フッフ、我が親友よ、ちゃんと寝るんだぞ、ではさらばだ」

そういつて鏡介は普通に二階のこの部屋から降りていった。

俺は鏡介の言葉が思ったより響いた。

なので、少し寝ることにした。

何日かぶりのベットの中心で

目が覚めたのは八時だった。

リビングに着くと、ボーっとしている夕とイライラ台本と向き合う

朝鈴の姿が見えた。

先に気づいたのは夕だった。

『おはようコウ君、九時集合だから一応びったりだね、姉さんは立腹だけだね』

「おはよう夕ちゃん、朝鈴は台本覚えたか？」

「コウ、遅い！それにこんなの覚えられないじゃない、あんなはどつなのよ」

明らかにいつもの朝鈴より言葉遣いが悪い、まっ主役だしねと思いつつ、鏡介に渡された俺は台本をぱらぱらめくる。

俺の出番は後半だけなので

「問題ない」

そういつて俺は、台本をテーブルに置く。

『コウ君すごいね、もう覚えちゃったんだ。』

「いいわよね、楽なやつは」

俺はその後朝食を取るが、朝鈴が隣でぶつぶつ念仏のごとくつぶやくのが気になり、せっかく祖母が作ってくれた朝食を食べることが出来なかった。

三人で学校に向かう。

今日は制服ではなく、私服であるので気持ちは軽い。

昨日は会えなかった所で鏡介と会う。

「残念ながら我が親友よ、今日は団はこれないのだ。」

理由は大方分かっている。

昨日もギリギリまでこの台本を作っていたのだ。

たった二日でこれほどの台本を作って平気で学校にこれたらそれこそ俺の友達はみな鏡介レベルになる。

「フッフ、香とデトーらしいぞ」

「「おいましてころ」」

俺と朝鈴が同時に突っ込みをいれる。

この後、学校の門の前に香がいて、分かっではいたが少しでも疑っていた自分がいたので、とりあえず誤っておいた。

団は本当に休みらしいが、鏡介と香が細かく聞いていたので、学校の教室に忍び込み、準備をはじめ。

俺は最初夕と一緒に大道具の方の準備を手伝う。

とりあえず、前半に出る役の人だけ香の所でミーティングを始めているらしい。

ふざけて時々遊ぶやつはいるが、それでもサボるやつはいない、いいなごういうの

『コウ君これ運べるかな?』

そういつて倉庫の中の夕が指さしたのは、大きな箱だった。

「何が入ってるの?」

『照明用のライトだよ。』

箱からはコンセントが二、三本出ていた。

俺は力を入れて持ちあげると、夕は『さすがコウ君』と言ってくれた。

倉庫から教室に戻る途中、俺は夕に話しかける。

「姫役じゃなくてよかったの?夕ちゃんなら似合うと思ったのに」

『駄目だよ私なんかじゃ、皆に迷惑かけるだし、音聞こえないから、照明ももう一人手伝ってもらわないと出来ないし・・・ただでさえ、私駄目な人なのに』

「そんなことない!」

そういつて俺は、夕の手を掴む。すると箱が落ちる。

「やっちゃった」と俺がいう。

どうやら中身には故障はないみたいだった。

一応あとで鏡介に見てもらいつか、と考えながら箱を再び持ち上げる。

夕はまだ黙っている。

「少なくとも、夕ちゃんがいなかったら今の俺はないよ。過去に模試で全国一位取った俺、友達を大切に思える俺、それに……ってこんな恥ずかしいこと言わせるなよ。」

『そんなの Kou 君が努力しただけだよ。私なんて』

「あゝ、もう自分を低くみるなよ。少なくとも俺にとって夕は大切なんだから。」

夕は驚いた顔をする。

夕は何か聞こうとしたみたいだが教室に着いたので黙ってしまった。教室の中には校長がいた。

一応、胃潰瘍は治ったらしい。

俺に気づいた鏡介は、俺に対して片手で

『校長にばれた。どうやら文化祭なんてしょうもないものだと思っているらしい。』

なるほど、校長の考えそうなことだ。

「だいたいね、学生なんて勉強してればいいんですよ。」

俺はその言葉にカチンときた。

東京でも何度も同じ言葉を受けてきた。

俺はたまたま校長に対して

「じゃあ、学校の期末で結果出せば問題ありませんよね。」

俺がそういって校長は、少し笑みを浮かべ

「君は松葉君だったね、君と森君、水村君、高橋君それに加藤君、君達には全国模試を受けて結果を残してもらおう。」

ちなみに森君は団で加藤君は鏡介のことである。

俺も一瞬忘れていた。

「結果と言つと具体的に？」

俺がそういって校長は「ほう、受ける気かね？」そしてさらに笑いをこめて

「では文化祭の一ヶ月後に行われる昨年二万人が受けた模試で、一人でも千番以内に入ってもらおう。」

俺は一瞬驚く。

千番以内と言つことは偏差値で言つと七十近く取らないと不可能だろう。

「フッフ、いいだろうその条件のもうじゃないか、しかし、達成できなかった場合は？」

鏡介は自信満々でそういって、校長は笑いながら教室のドアの方に向かい。

「君のクラスみな、私の監視下で勉強してもらおう。行事などの参加は一切なしだ。」

「そんな馬鹿な、いくら校長でもそんな権利」

クラスの皆わめく。

「黙りなさい。本当なら全員停学にして、文化祭を参加させない方法もあるんだぞ。」

そういうと、全員が静かになる。

こんな沈黙を破るのは・・・いや破れるのは鏡介だ！
鏡介俺の肩に腕を回し。

「フッフ、望むところだ、いいよみなものしゅう!!」

するとそこらじゅうから、「おう!」「まかせたぞ」など様々な声が飛び交う。

クラスが盛り上がる中、校長は教室からいなくなる。
夕は俺の袖を引っ張り

『大丈夫かな？心配だよ。』

「任せとけ、それより文化祭だ。とりあえず勉強はそれからでもこのメンバーなら問題あるわけがない。」

みんなの盛り上がってる中、文化祭の準備始める。

校長はいつの間にか消えていた。

とりあえず今日は前半の台本についての話し合いと舞台作りを行う。

「そういえば後半のところなんだけど、アドリブのところどうするのあんた達?」

香の言葉に俺と朝鈴は反応する。

後半のアドリブというのは、お姫様を起こすシーンについてである。台本を何度見ても、このシーンはアドリブとしか書いていない。

「とりあえず、背中叩いて林檎はきださせればいいんじゃないのか？」

たしか原作でも林檎が吐き出された記憶がある。

「え、そこはキスでしょ。」

香がそうだった瞬間作業をしていたはずのクラスメイト達がみんないつせいにこちらに注目する。

「ちよつ、な、なにいつてるのよ」

朝鈴が顔を真っ赤にさせてこれでもかと言わんばかりに動揺している。

とても高二の対応には見えない。

「まあ、待てちよつと落ち着けよ。ほらほら夕ちゃん泣かないで、そんなことするわけないんだから」

『泣いてないもん、コウ君でも動揺するんだね。』

動揺？俺が？

どうやら外から見ると、俺は動揺しているみたいだ。

俺は一度大きく深呼吸して

「大体高校の出し物でそんなものやったら、それこそ退学だよ。」

「それはそうだけど、ほらたとえば二人が何かの上に乗ってるときに、それを引いちゃったりしたらアクシデントで片付くし、ね？ みんな」

香がそういうと、皆が大きく頷く。

どうやら俺の味方は、顔を真っ赤にしている朝鈴だけらしい。

俺が頭を片手で抱えていると、不意に一人の男子クラスメイトが

「第一さ、お前、朝鈴と夕どっちと付き合っているわけ？ まさかこの期に及んでただの幼馴染で通るとは思っていないだろ。」

そういうと、クラス皆に、俺と朝鈴、それに夕まで囲まれる。

頼みの鏡介はと言うと、真ん中あたりで香と笑いながら話している。

「おい、劇の準備は？ もう時間もないぞ」

「ああ、そんなものどうでもいいわよ。実際に演技するのは明日からだし、こっちの方が大事なんじゃない？」

今、この人自分の彼氏と友達が徹夜して作ったものをそんなもの呼ばわりしたぞ。

皆に囲まれて、絶対絶命のピンチ、このとき俺の左右の手が握られる。

『コウ君こっち』

「コウ、こっちよ」

さすが姉妹、見事二人同時に俺を引っ張って逃げようとする判断にいたる。

しかし、残念なことに、二人の引っ張った方向はまったくの正反対。

つまり俺は、腕が取れそうな痛みを味わっている。

それを見ていたクラスメイトは、さっきまでの殺気と違い、はちきれんばかりの大声援に変わる。

夕を応援するもの、朝鈴を応援するもの、そして俺の今の苦痛に耐える顔を見て笑っているものまでいる。

当の本人達は、むきになり、俺を引つ張る。

その後、何とか香が俺を救出してくれて助かった。

この騒動の間に皆、なんで俺達を囲んでいたのか忘れてしまう。その後五時頃まで作業は進む。

「はいはい、今日はここまで、そして今から朝鈴アンド夕の家でパーティーをします。早めの前夜祭です。本番直前は皆絶対それどころではありません、私がそうさせないからです。なので来たい人は来ちゃってください。では、解散」

帰り道、香は団を迎えに行くと言って途中で別れ、鏡介は、「俺様にはやらなければならぬ使命が」と言いながら分かれる。
一応皆後で来るらしい。

三人で帰る途中不意に夕が

『あ、お弁当』

「お弁当？」

『ごめんね、コウ君弁当作ったんだけど、渡すの忘れちゃった。』

夕がものすごい今にも泣きそうな目でこちらを見る。

今日は準備してる時間があまりにも多く（途中で大分おかしな方向に進んだが）食べる暇がなかったのだ。

「まだ残ってる？」

『うん、これなんだけど、もうさめちゃってるし、ごめんねコウ君』

俺は夕の手の上に置かれている弁当を取る。

『えっ！？コウ君？』

慌てる夕を尻目に、俺は弁当の箱を開け、中身を取る。どうやら作業中にも食べられるようにと、おにぎりにしたらしい。

俺は素手でそのおにぎりをつまみ、口に入れる。

そして、何回か噛んだ後夕に向かって。

「ありがとう、美味しいよ。」

夕はそんな反応されると思っていなかったのか、一瞬固まり、いつも通り涙を流す。

「まったくあんたも、コウがこうすることぐらい分かってるんだから、毒でも塗っときなさいよ。」

「おいおい、そんなことするなよ。」

その後、高橋家で盛大なパーティーが行われる。

夜桜さんの料理や昼野おじさんの酒？でさらに盛り上がった俺達はその盛り上がったまま、男子用の泊まり部屋に案内される。

軽く三十人は寝れる広さがあるので問題はない。

俺は、夜風に当たろうとベランダに出ると、庭に朝鈴の姿が見えた。女子人はほとんど酒を飲んでいない。

おそらく部屋で話している女子がほとんどのはずである。

俺は二階のベランダから飛び降りる。

その音に気がついたのか朝鈴はこちらを見る。

そして、後ろに白い本つまり台本を隠す。

「どうしたのよコウ、皆もう寝たのかと思った。」

「それは、お互い様ってことだろ、こんな日にまで練習してるなんて・・・お前らしいな」

俺は笑いながらさういう。

朝鈴は昔からさういうやつなのである。

努力の才能ってのは、きつところさういうやつを指すんだらうと思つた。

「なによ。私が何しようと思つて別にいいでしょう。」

朝鈴は顔を真っ赤にして俺に言葉を返す。

「そつえば懐かしいよなこの木、昔から大きいと思つてたけど、今見てもでかいと思えるもんな。」

庭に生えてる木の中でも、ひときは異彩を放ち、高橋家、いやこちら辺の民家に生えてる木の中でももつとも大きい木、昔だけでなく戻ってきた初日にも部屋に入るのに利用した木である。

夕がまだギリギリ会話できるころはよくここではしゃいでいた。

少しの間二人とも思い出に浸っていたのか黙っている。

その沈黙を朝鈴が破つた後、俺達の昔から続いていた関係は、小さいようでも大きく、浅いようでも深く変わってしまう。

十月四日

「ほら、そこ声小さい、恥ずかしいならやめてしまえ!」

香という名の鬼監督がここに誕生した。

今日は朝練として皆で体育館を借りて練習、団と香は舞台のまん前に座り、悪いところを指摘する。

「ほら、もう何度いったら分かるの? 客にね背中見せちゃいけないの」

「オイオイ、そんなかりかり怒るなよ。もつとのんびりいこうぜのんびり」

舞台の端にいた鏡介がそういうと、香は不気味な笑いをして、鏡介に対して

「鏡介くん、そんなこといっていいのかな? 私は監督なのよ。私の権力があれば、あなたをコウに抱きつかせたりさらにはキスマでできるのよ。」

「フッフ、俺様がそんな言葉に動じるとでも・・・何なりとお申し付けください、どうかわたくしめを部下としてあなたのそばにいさせてください」

弱いなく、そう思いながら俺はカーテンの裏にいる。

舞台の上、俺の位置からギリギリ見ることの出来る範囲に、笑っているが明らかにいつもとは違う朝鈴の姿があった。

昨夜、あいつは俺に

「コウ、私さあんた一人に夕のこと背負わしたくないんだ、私もあんたと一緒に背負いたいの、苦しみでも何でも・・・でもその気持ちは半分ぐらいかな、正直に言うと私あんたのこと好きなの。ずっと一緒にいてほしい・・・付き合ってほしいの」

突然の告白だった。

俺は、その返事を引き延ばそうと

「返事は今じゃなきゃ駄目か？」

「今じゃなきゃ駄目、ほら私馬鹿だから、きつとあんたに言いくるめられる。だからコウの今の本当の気持ちをおしえてほしい。」

答えは不思議と早く出た。

「ごめんな朝鈴。俺にはお前と付き合う資格なんてない、俺は本当はお前らに恨まれなきゃいけないんだぞ、俺の父親は一人の少女さえ救うことが出来なかつたんだから。なのにさ、皆優しくしてくれるんだよ。だから俺は一人でやらなきゃいけない」

俺の頬には涙が流れた。

「誰もあんたを恨んでない、そんなの当たり前じゃない。皆あんたと一緒にいたいのに、逆にあんたが一人で解決してることの方が腹立つ。じゃあさ、そういうのなしで、私を見てくれることは出来ないかな？」

俺は服で涙を拭き、目の前の朝鈴を見る。

姉なのに、少し夕より小柄だが、曲がったところが嫌いで、言葉も

きついが学校の皆からも実は人気がある。
俺からしてみれば、この世で一番長く一緒にいた人である。
夕の検査のとき、いつも俺を見つめて「大丈夫だよな？」と聞いてきた女の子。

最高の『仲間』である。

「ごめん、俺にはお前をそうは見ることは出来ない。」

そう言い放つと朝鈴は俺の横まで来て、こちらを向いて「そっか」といって、俺の頬にキスをする。

「じゃあさ、今告白したのが夕だったらどうなってたかな？」

俺は少し間を置いて

「今まで一番近くで見てたやつがなににいってるんだよ。決まってるだろそんなこと」

朝鈴に言われた条件だったら、俺の答えはおそらく、初めて夕と会ったときから決まっていただろう。

「夕のことあんたに任せるからね」

そういって、朝鈴は戻っていった。

俺はただその場に立ち尽くし、隣にある大木をただ見上げているだけだった。

夕

「次のシーンって何色だったっけ」

『・・・』

「あの〜高橋さん？」

私は同じ照明係の人に肩を叩かれて反応する。

『へっ!?!えっ?と何かな?』

「今やってるシーンの色を聞いたんだけど、大丈夫?ぼくとしていたけど」

どうやら私はぼくとしていたらしい。

私は『ごめんね』と頭を下げて謝る。

昨夜、姉さんに言われた言葉が私の頭から離れなかった。

昨夜、ベットで横たわっていた私はなぜか急に孤独に感じて、眠ることが出来なかった。

すると、扉が開く。

廊下の光で一瞬誰か分からなかったが、姉さんだというのに気づくのに時間はかからなかった。

「あつ夕起きてたの?こんな遅くにごめんね」

『どうしたの姉さん、大丈夫だよ。今眠気がなかったから』

すると姉さんは私のベットの足元に腰掛ける。

私も上半身を布団から出し、姉さんの顔を見る。

暗くて表情が分かりにくかった。

しばらくすると姉さんが

「私ね、コウとキスしたんだ」

そういつて姉さんは顔を上に向けてしゃべる。

私はきつととんでもなくあっけにとられた顔をしていたのだろう。

「私、負ける気ないからね、おやすみ」

姉さんは私に何も言わせないまま部屋をちよつと早歩きをして部屋を出る。

キス？姉さんとコウ君が？負ける気ない？

私の頭の中でぐるぐる回っている。

そして、今は寝不足も加わってさらに回る。

朝、コウ君も姉さんもいなかった。

一瞬、二人で一緒に学校に行ったのかと思ったのだが、どうやら姉さんは早くいつて練習していて、コウ君は自分の家に戻って寝ていたらしい。

二人の様子はどう見てもおかしい。

姉さんは普通にコウ君と話しているのだが、コウ君は話しくそうだった。

そして、二人とも元気がなかった。

私はどうすればいいのか？

姉さんを応援する？姉さんと喧嘩する？

「・・・告白すれば」

いきなり目の前に現れたのは団君だった。

告白？新たな選択肢が出た。

でもコウ君には絶対迷惑になるに決まっている。

それよりもなにか団君は知っているのか、私は疑問に思いたずねる。しかし団君は首を横に振りその場を立ち去る。

私が答えを出すのに、そこまで時間はかからなかった。姉さんもちろん大事だが、私の頭の中で多くの割合を占めていたもの、思い出が濃いものはコウ君だったのだから。

「あつ高橋さん、そんな照明の機械動かさないで、壊れちゃうって」

幸一

放課後に入ると香のテンションはさらにヒートアップした。

昼飯中に朝鈴は鏡介に呼ばれて外に出て行くのを見た。

朝鈴はなぜかいつもの自分に戻っていた。

午後の授業中に俺が鏡介にたずねる。

しかし、鏡介は「フッフ、安心するがいい我が親友」といつて寝てしまう。

寝る前に、我が親友とのキスといていたのは聞かないことにした。

「ほら、大河！なんでそこでアドリブ入れるかな？次ぎやったらあんた本当に木の役だからね」

「ひくじゃ小人2の役は？」

「私がやるわよ。皆もそうだよ、やる気がないなら別の人入れるから」

こういつて皆気合を入れて、劇を始める。

準備は夜八時頃まで続き、とりあえず、台本持ちながらの通しは出来た。

香いわく、感情がこもっていない、動きが鈍い、自分を捨ててない

などまったく納得していなかったが、そんだけ吼えても嫌われないのが香の凄さかもしれない。

香から「解散」と声が出たのだが、台本を読んで暗記したり、香や団のところに行つて、自分のことについて詳しく言ったり、皆ほんとに劇をしようとしていた。

俺も便乗して台本を読む。

そして、最後のおおとりアドリブの部分はどうするか？これが俺達のクラスの売りのひとつと言われたら手を抜くわけにはいかないのだが・・・俺はため息を付く。

家の前に着くころにはもう十時になっていた。

皆と一緒に帰つたのだが、微妙なきこちなさも感じた。

高橋家の前では小春が待っていた。

俺達に気づいた小春は橋つて近寄る。

「幸一兄さん、おかえり〜」

「『あの〜私達は？』」

「わっわ〜ごめんなさい、お帰りなさい朝鈴さん、夕さん。」

小春とこの二人はすっかり仲良くなつていて、本当の家族と言っても過言ではない様に思えた。

そして、俺はいつものごとく、勉強と例の事を行い夢に落ちる。

十月七日

夕

朝、学校の下駄箱、人は誰もいない。

いるかも知れないが私は音を聞き取れないので分からない。

私は紙の封筒をコウ君の下駄箱を三、四回確認してから入れる。文化祭本番まであと三日、日にちに関しては問題ないと思う。

ここで断定できないのは、私は誰かに告白というものをしたことがないのだから・・・

私は誰もいない筈の教室に向かう。

本当に誰もいなかった。

登り始めた太陽が少し眩しかった。

幸一

朝鈴も夕も先に家を出てしまっていたため、いつもより遅めに家を出る。

言い訳だが、実は夕に遅く学校きてね、でも遅刻しちゃ駄目だよと言われたのだ。

今、俺の隣には小春がいる。

二人つきりているのは久々、いや初めてだったかもしれない。

「そういえば幸一兄さん、劇どうするんですが？その、なんとというか朝鈴さんとキスするの？」

「はっ？えつと誰が言ったの？そんな話」

俺はわけが分からなくなつて小春にたずねる。

そうすると小春は鞆の中から少し大きめの紙を取り出す。

「何が起こるか分からないクライマックス

二年A組の豪華キャストが送る

白雪姫」

そう書いてあるポスターと写真にはでかでかと朝鈴の写真を中心に回りに小さく皆の写真が張ってあった。

「クライマックスってあれですよね？キスとかそんな感じですよね？」

「いや、それはないだろう、ってか俺にもわからないんだよな」

そういうと、小春はなぜか「そっか」といいながら笑顔でこちらを見つめる。

その後、文化祭の話で盛り上がる。

今日は鏡介にも会わない不思議な朝だった。

下駄箱で小春と分かれて、下駄箱の中を開けると中に手紙が入っていた。

えっ！？なに？今の時代、こんな時代錯誤なこと・・・そして俺はそれを見て落ち着くとその手紙はおそらく夕なんだと思った。

そして、その考えは見事当たる。

いつも一緒にいるのに、手紙で話すということは、よっぽどの内容なんだろう。

そして、夕が遅くくるように言った理由も分かった。

俺は屋上に行き、畳の上に座って手紙を広げる。

内容はとても短いものだった。

『コウ君へ

文化祭初日、朝のミーティングが終わったら、一緒に回って下さい。返事はそれとなく返してくれればいいです。』

これだけだった。

手紙の裏も確認したが何も書いてない。

返事はもちろんOKなのだが、こんなこと普通に言えばいいなと思いつながら、手紙をポケットにしまおうとしたが、少し大きかったので、それに落としたくなかったので、財布の中にしまう。

その時、チャイムが鳴ったので慌てて俺は鞆を持ち教室に駆け込む。

「ギリギリか？」

「残念アウトだよ。」

と良姉さんが出席に斜線をつける音が聞こえる。

『残念だったねコウ君』

「まったくなにやってんだか」

と夕と朝鈴

「フッフ、具体的には屋上で何をやってたかだ〜な」

「おいおい何の冗談だよ。」

そう俺が鏡介返すと、まあ「シークレットだもんな」といわれた。まったくどこにいるんだか。

そして俺は夕に向かって久々の手話を使う。

文化祭の返事はOKと伝える。

夕は満面の笑みを見せる。

この笑顔を見せられると、何でも出来る気がするのだが、まっ実際には何も出来ないのだが。

逆に涙を見せられると断れないことになるんだけどな、甘い俺、と心の中で思う。

しかし、夕と一緒にいくことを決定しといてよかった。

俺、鏡介、団、大河つまり【公共団体】で休み時間、廊下を歩いてみると、いろんな人に回ってくださいといわれた。

それも2、3人ならよかつたのだが、まあ色々騒がせてる面子と言
うこともあり、何十人にも声をかけられる。

小春にも断つたがさすがに胸が痛んだ。

鏡介の交渉により、なぜか今度（正確な日にちまで決められたのだ
が）買い物に付き合うことになった。

団は声をかけられるたびに「・・・香がいるから」で切り抜ける。

実は隠れファンが多かつたみたいで、本人は毎回毎回赤面していた。
俺も大体は先約があるですんだ。

鏡介は今日始めて知つた真実なのだが、生徒会を陰で操つてゐら
しく。

やることが多いと言う理由で断つた。

大河は断られた人に片っ端から声をかけるが、すいません。とこと
わられ、最後の方には声も聞いてもらえない始末だつた。

「僕ってきつと不幸の星の元に生まれたんだろうね」

そついつて大河は壁に寄りかかり、体育座りをして落ち込んでいた。

「・・・あれは哀れじゃない？」

「鏡介、あれはなんとかなんなの？」

「フフフ、まっもう少し離れてみてみるよ」

まるで予言者の様に語る鏡介。

離れたところから見てみると、大河のところかかに一人の影が近寄る。

なんと、同じクラスの女生徒 華歌果かか 花梨かりんだつた。

いかにも言葉が詰まりそうな名前だつたので、目立つ、しかも、黒
くて長い髪にくりつとした目つきで結構人気があつたりするらしい。

「え〜っと鏡介、俺に分かるように説明してほしい」

「フッフ、昔から気があったみたいだぞ、まっ普段はあんな役回りだから、話しかけられないみたいだが、なんだったら好きになった経緯まで細かく説明する〜が」

「・・・大河にはもったいないけどな」

「何気ひどいよね」

そして、大河はダツシュでこっちにくる。

口をパクパクさせている。

言葉にならないみたいだ。

その後、しばらく大河をからかう。

大河もまんざらではない顔をする。

放課後の練習では、どうやら二人とも小人役だったらしく。

大河にも春が来たのかと思いつながら殴られたりしてて、そこらへんがいつもの大河なのでほっとした。

そして、ついに文化祭当日を迎える。

「ところで鏡介、あいつが幸せってどう思うよ」

「フッフ、許されるわけないじゃ〜ん。まっ文化祭を見てるがよい」

「・・・お前も結構ひどいじゃん」

文化祭初日

目を覚ますとそこは教室の中だった。

昨日はほとんど徹夜で最後の小道具作りや劇の確認、ポスターを町や学校に張りまくった。

そして、ついに今日最後の通しを行って本番を向かえるところまで来た。

短い期間で、いや短い期間だからこそ、皆が緊張を・・・多分そんなものないのだろうけど、ここまでのものが出来た。

俺達の学校では、文化祭は二日間行い、劇は二日目なので今日は自由に遊べるのだが、皆鏡介が作った練習用の衣装を来て校内を周り、一人五十枚チラシを配らなければならない、出来なければ鏡介がなにかすることは目に見えているので、多分皆真面目に配るだろう。

そして、時計を見る。周りの連中もまだ寝ているので大丈夫かと思っただが、あと五分でチャイムが鳴ることを知り、急いで練習用の衣装に着替えて、一枚体にポスターを張り、教室の中に入る。

残念ながら何人かは、これから行われる鏡介のオープニングセレモニーを見れないと言うことになる。

現在教室には三分の二ぐらい教室にいる。

もちろん鏡介や団はいない。

ここでチャイムが鳴る。

もう一度チャイムが鳴るとき、つまりあと三十分後に文化祭が始まる。

そして、放送室から聞き慣れた声が聞こえる。

「フッフ、元気にしてるか諸君、放送室は我々【公共団体】が乗っ取った。」

いやいや待て俺はここにいるんだが、確か大河はまだ寝てるはずだし・・・皆の目線が痛い。

放送で走る音が聞こえる。

そして、扉が開く音

「おい、どういうことだラジカセじゃないか」

これもおそらく鏡介の演出だろう。

「さゝ皆のゝ者、校庭を見るがいい。そして文化祭を楽しもうじゃないか」

ここで、放送室に入ってきた生徒は「鏡介の兄貴最高でした」といってラジカセのスイッチを切る。

皆校庭を見る。

するとそこには色々筒みたいなもの、マイクを持った鏡介の姿があった。

そして、体育館を指差す。

するとそこから、紙で出来た校長の巨大（おそらく縦横十メートルは超える）写真に文化祭とでかでかと書かれたものが吊り下がる上に立っているのはおそらく団だろう。

皆が拍手をするがいまいちもりあがらない、すると鏡介は

「フッフ、さゝ皆の者、ここに文化祭をはじめようじゃないか」

そういつて筒についているひもに火をつける。

筒の数は合計五個、それら全部に火をつけ終わると、鏡介は皆気をつけるといつてダッシュで逃げる。

そして撃ちあがったのは花火だった。

もう日が出ているので、花火の綺麗さは半減してしまつたが、その花火の火の粉が、たまたま、校長の写真に当たり、全部燃え上がった瞬間学生のボルテージは最高潮を初っ端から迎える。

おそらく、鏡介が校長に提案したのだろう。

校長の巨大ポスターを貼っていいかと、もちろん校長はこれを断るわけがない。

そして、‘たまたま’花火の火の粉がふりかかっただけなのだから、校長も文句は言えないが

「いいわ〜最高だよ鏡介」

『コウ君お腹、お腹がハハハ、笑いすぎて痛い。』

花火の音で皆目が覚めたのだろう。

学校中が笑いの渦である。

その後鏡介たちも教室に戻ってきて、良姉さんの朝のホームルームを行う。

そして、最後に「みんな、青春しろよ！」と言うと、みんなが先生年寄り臭いと言いながら終わる。

チャイムが鳴る。

このときは、まさかのちにあんなことが起きるとは想像できるわけがなかった。

俺は正門に向かう。

夕が集合場所は絶対ここだと言ったからだ。

理由はまあ簡単な気がするが、初めから、全部見たいらしい。

俺に気づいて近づいてくる女の子。

「で、何でそんな格好なんだ？」

『コウ君意地悪だよ〜』

今日は俺達のクラスはそれぞれの役の格好で学校でチラシ配り、夕の役は照明担当、ここまで来れば予想がつくかもしれない。

夕の格好は・・・白雪姫役の衣装だった。

おそらく、鏡介がすべてを知っていて渡したのだろう。果てしなく似合っている。

鼻痕があるに違いないがそれでも似合っている。

『コウ君いこ〜』

そういつて夕は手を俺に向けて出す。

俺はその手を握り

「よっしゃ〜、全部回ってやる。」

夕は『そのいきだよ』と返す。

本来最初に散らし配りなのだが、白雪姫の夕と変な格好といたら鏡介に怒られるのだが、それでも変な格好な俺とが一緒にいるので向こうから人が来るので開始10分で終わってしまった。

外の露店は食べ物類が多かったので、クレープだけ買って校内に入る。

校内に入るとそこは人が大勢いた。

おそらく街の人の半分近くはこの学校に集結しているかもしれない、そんな感じがした。

俺達はどこか展示品の教室にでも避難しようとしたのだが、当然のごとく邪魔と言つか、いたずらというか・・・

「フッフ、皆の者楽しんでるか〜な？」

鏡介の声だった。

「ここ〜で、明日行われる我がクラスの劇【白雪姫】のメンバーでちょっとミニゲームをやります。内容は我が愛の親友達つまり【

公共団体】メンバーを捕まえる、捕まえて俺のところまで連れてきた人には、永遠に結ばれくる愛を願った腕輪を授けよう。」

俺は初っ端、四面楚歌にあってしまった。

『コウ君どんまい』

ドンマイじゃない、俺は逃げる。

夕の足は遅いので、抱きかかえた方が俺のスタミナはともかく早いことに気づき、抱きかかえる。

そして走る。

目標は・・・小春のクラス、きつとあの子なら俺をかくまってくれ
るはず。

中に駆け込み、夕をゆっくりおろして呼吸を整える。

もちろん中ではクラスの活動が行われていたわけで、喫茶店をやつ
てるところまではいいのだが、おそらくこの間の修学旅行で東京行
った人が見たんだろうな

『コウ君・・・なにあれ？かわいい格好なんだけど』

夕よそれを俺に言わせるのか？

あれですよ、メイド喫茶って言っちゃいたいんだけどさ、なんか
言いくいんだよ。

「あつ幸一先輩、いらっしやいませご主人様」

いや待て、思いっきり人の名前言ったぞ小春。

そのせいで、小春のクラス全員に目を向けられる。

そして、こっちにじりじりよって来る。

どうやら、ここでは俺よりも鏡介のほうが人気があるらしい、とい

うよりもこの学校自体鏡介が占領しているようなものなのだが・・・

「小春、とりあえず似合ってるよ。じゃあ皆白雪姫よろしく」

そういって、教室を出る。

いい加減足が疲れてきた。

すると夕は何を思ったのか、俺の手を引っ張って

『コウ君こっちこっち』

そして、着いたのは放送室だった。

「えっと夕ちゃんまさか」

そういい終わる前に、夕は放送室を開けてしまった。

「フッフ、待っていたよ。最初に来たのは誰かな？」

『鏡介君、腕輪もらいに来たよ。』

「フッフ、夕よ、お前がここに来ることは俺様はかんぺくきに予測してゝたのだよ。」

そういって鏡介は放送で「コウを確保したので、後2人だ」といった後、銀色で何かの花のように加工されたものを一個ずつ渡す。

「この花はルピナスか・・・」

ルピナス、花言葉は確か【多くの仲間】だった気がする。

俺がそう尋ねると、鏡介は

「さすが我が親友、ちなみに夕の腕輪は椿だ」

椿・・・か

『じゃあ、私達もういくね、また後で』

そういつて俺の手を引っ張る。

鏡介は「存分に楽しむがよい」と言つて、手を振る。

教室を出る前に鏡介の顔が見えたのだが、なんかいつもの鏡介とは表情が違つていて、哀しい様に見えた。

その後、俺と夕は何も考えず、ただ騒いで遊びまくつた。

お化け屋敷や喫茶店、ゲーム、服屋、映画、さすがに全部は回れなかつたけど、かなりのものを見れたと思う。

あの後ちゃんと小春のところにもう一度行つたし、かなり満喫できたと思う。

夕方になり、夕と俺は階段近くにいる。

『コウ君のど渴かない？屋上行つて飲もうと思つんだけど』

「じゃあ、俺買ってくるよ。屋上で待つてて、知らない人にこえかけられたら、ダッシュで逃げること」

そういつて俺は、近くにある店で自分の分のコーヒーと夕の分で紅茶（夕はレモンティーに目がない）を購入して屋上に向かう。

「あつ、コウ」

階段を上る途中で、俺は静かな感じの声に反応する。

その声に反応して後ろを向くとそこには、朝鈴がいた。片手にはカメラを持っていた。その目線に気づいたのか朝鈴は

「あつこれ？鏡介に頼まれたのよ。私今日暇だったからね」

白雪姫の格好でカメラと言うのもなんか合わない気がするが、あえて口にはしなかった。

「じゃあ、夕ちゃんまたしてるから俺行くね」

「本当に行くの？」

朝鈴がとめに来る。

「分かってるんでしょう。この後あの子が何をするのか、いくら鈍いあんだでも、今ならまだ間に合うのよ。」

「いや、行くよ」

俺は合間を入れずに答える。

そして、俺は逃げるようにして、屋上に向かう。

後ろで「待ちなさい」と朝鈴の声が聞こえたがそれでも俺は止まらなかつた。

屋上に着く。

目の前には再開したときと同じで夕日に照らされる夕の姿があつた。ほかにはもちろん誰もいない。

「はい、夕ちゃんレモンティーでよかつたよね」

俺は夕にレモンティーを渡す。

『うん、コウ君ありがとう』

そして、俺達は飲み物を飲む。

少しの間無言だった。

そして夕はペットボトルの蓋を閉め、俺の正面から約一メートルぐらいととても近い距離でこちらを見つめる。

そして、言葉は短かった。

『コウ君、私あなたのことが好きです。』

この言葉がくることは、なんとなく予想していた。

答えもいくらでも考えていた。

それでも俺は黙っていた。

『コウ君、私と男と女として付き合ってください』

夕は勇気を出して入ったに違いない。

その証拠に夕の瞳には涙が見えた。

俺はこの子が好きである。

おそろくはじめてあった時から、これからもずっと、それでも俺は・
・

「……………ごめん」

夕はうつむいたまんま屋上の扉を開けて出て行く。

俺は壁に思いつきり頭を打ち付け、更に壁を殴る。

血が出たが、痛みは感じなかった。

俺は最低だ、こうなる結果は分かっていたのに、朝鈴

にも止められたのに・・・

俺は壁にもたれかかり座る。

答えは決まっていた。

‘何も関係なし’だったら、俺は自分から告白していたに違いない。俺はとりあえず、何も考えないでボクとすることにした。

なんか体から、一部分大切なものがなくなった気分だ。

次に俺が顔を上げたとき、もうすでに夕日は沈み、色んな人が帰っていた。

そして目の前には鏡介が立っていた。

「いつからそこにいた？」

「フフフ、お前が頭ぶつけてそこに倒れこむところは見てたぞ」

俺は「そうか」と別に何の驚きもなく返す。

おそらく本当のことなんだろう。

もしかしたら、告白もみてたかもしれないけど、鏡介は続けて

「夕は家に送ったぞ、あいつは一人で何人も人を誘いこむからな、ちなみにこの後のクラスの最後のリハはお前出なくていいから、一人でいなさいBY朝鈴とのこだ」

鏡介は朝鈴の真似をしながら俺に伝える。

俺はまた「そうか」と返す。

鏡介には悪いが突っ込む気になれない。

鏡介はそんな俺を見つめて

「まったくお前らはそろいもそろって、フフフ、これだから我が親友はたままないね、オケイ、コウは明日ちゃんと演劇をやる

様に、俺様はやることがあるんでな、大丈夫、俺様をだれだと思っ
てゝる。」

そういつて鏡介は俺の前からいなくなる。

「あと、家帰れよ。何せ寝てないんだからな、そんなとこいると俺
様に食われちゃうぜ」

そういつて屋上から鏡介は出て行く。

一応、いやかなり鏡介は心配しているのだろう。

俺はおとなしく家に帰って寝ることにした。

文化祭最終日

目を覚ますと自分の部屋にいた。

現在の時刻七時、学校に行きたくなかった。

俺は夕をこれ以上もないくらいに傷つけてしまった。

劇は十時開始、鏡介いわく、その後遊びまくりたいらしい。

さすがに学校に行かないわけには行かないのだが、夕は確か家に帰
ったはずだから会う可能性がある。

俺はいつもと違う道で学校に向かうことにした。

いつまでも逃げられない事は分かっている。

でも、会いにくい。

俺は意を決して家を出る。

いつもは玄関から右に曲がる道をまっすぐ向かうことにした。

しかし、玄関には朝鈴と夕が待っていた。

「遅い」

いつもの通り朝鈴が声をかけてくる。

『コウ君おはよう』

「ああ、おはよう」

きまづかった。

とにかく、誰もしゃべらず、ずっと静かな状態で学校まで歩く。多分今までで一番長い登校時間に感じた。

時間自体はいつもと変わらないのだが、もう何時間何日何ヶ月も経っているように感じた。

なんとか学校に着いた。

さすがに演劇にまで引くことは、クラスメイトの今までの努力を無にすることになる。

とはいっても、過去には一人でひきづったりもしたわけだが、などと考えつつ、俺は一人で廊下で気合を入れる。

「はいはいはい、みんなしゅうごう、円陣組むよ。」

香の声でみんなが体育館のステージ裏で肩を組む。

中心には鏡介が腕を組み構えている。

別に学級委員でもなんでもないのだが……まあ一番盛り上がるからみんな何もいわない。

「フフフ、みんな初めに言うておく。俺のため、いやこの我が愛の親友コウの為」

そういつて円陣から俺を引き抜き、大笑いしながら

「死んでく〜れ!!!!」

みんながノリで「お〜！」と叫ぶのだが、俺一人、いや鏡介以外みんな頭の中で分けわかんないはずだろう。それが鏡介でもあるのだがな。

「ブー」

香がスイッチを押して幕が開く。

「昔、あるお城に美しい王女がいました。その人の名前は朝鈴、みんなからは白雪姫と言われていました。」

香があらかじめ用意していたナレーションが劇内に響きランプがともる。

俺達の白雪姫は役名を自分の名前で行うことになっていたのだ。そして話は進んでいく。

「朝鈴が七歳になったころ、王妃鏡介は魔法の鏡にたずねました。」

「フッフ、この世で一番美しいのはだれ〜？もちろんこの私よね、この私だわよね」

「いえ、この世で一番美しいのは朝鈴様でございます。」

「キ〜、なんてこと、この私を差し置いてあの朝鈴が最〜も美しいなんて・・・ありえないわ、殺してやる」

会場は笑いのあと、更に鏡介の「殺す」と言う発言が本当に恐怖に感じたのか、静まる。

ここまででは順調だ、俺は本当に最後の最後でしか出ないので、のんびり見ている。

そして、大河が馬鹿をやつたり、何氣息の合つ様に見えた大河と団のコントがあつた後、鏡介により毒りんごを食べさせられた朝鈴が倒れてガラスの棺おけに入り、俺の出番となる。

鏡介と俺は幕で入れ違いなる。

鏡介は一言

「フッフ、キスしてくれよ。今日だけは何があつても許す。」

鏡介の考えはまさか俺と朝鈴をくつつけて、夕を諦めるとのことなのではないかと脳裏にかすめる。

俺は、夕がいる上にある照明場に目を傾けることは出来なかった。

「その時、本当は白馬に乗せたかったのですが、資金と学校と言う場所の関係上無理だったので、徒歩で現れたのは王子幸一である。」

「長々しい、ナレーションに感謝する。」

俺はそういつてから、舞台の上にかかる。

客席を見ると、本来ある座席数をはるかに超える人数が体育館内にそんざいした。

まさに、休みのラッシュで140パーセントを超える新幹線内を連想させる。

俺は見たことはないが・・・

「おお、これはなんと美しい。おい、そこのチビこの美しいもの名は？」

みんなの視線が大河に行く。

「ひー、ぼ僕ですか？名前は・・・」

「・・・『夕』と言います。」

後ろに控えていた団がそう言う。

今なんていった？夕？そんな馬鹿なわけが

夕

私は今、ガラスの棺おけにはいつている。

薄目を開けるとはつきりとコウ君の姿が目に入る。

昨日私のことを振ったコウ君の姿が・・・

昨日、コウ君に振られた後、私は誰もいないであろう美術準備室にいた。

いつもなら、ニスや油や絵の具のにおいがするのだが、なぜかには感じない、でも理由は鼻水と言うことに気づいたので、鼻をかんだ。

涙が止まらなかった。

ずっと一緒にいた。

ずっと憧れていた。

ずっと私を助けてくれた。

ずっと恋焦がれていた。

ずっと並ぶことが出来なかった。

ずっと好かれてしていると勘違いしていた。

『・・・』

『ガー』

扉の開く音がする。

私は扉の方を向く。

そこに立っていたのは・・・

『鏡介君』

「フッフ、ずいぶんとひどい顔だな夕よ。」

私はあわてて顔をハンカチで拭く。

「まったく、朝鈴も夕もそしてコウもなんでこうお互いがお互いを噛み合わなくしてるのか〜ね、まっこれだからお前らと愛の親友をやめられないわけだ〜がな」

何のことか分からなかった。

鏡介君は更に言葉を続ける。

「知ってるか？コウは多分夕がコウのことを好きになる前から夕のこと好きだったんだぞ、いや残念なことにも今でもそうなのだけ〜が」

「なんで敵に塩ふってる〜んだろな」と言う。

ならなんで私のことを振ったんだらう。

「コウはまだ親父の事を引きずってるんだよ。コウが夕のことをどれほど大事に思っているのか、それを語るには、明日の文化祭はでれなくなるほどになるぞ」

鏡介は笑いながら一方的に話す。

私はコウ君の気持ちも知らなかった・・・

それなのに、ただ私の気持ちを伝えただけだった。

引き金になったのは、あの姉さんの言葉だったんだよね

「ちなみに、朝鈴はコウに告白して振られたぞ、だから夕には成功

してほしい、自分で向かっていかせるためだろ〜うな、あの言葉は「鏡介君聞いてたんだ、いまさらもう驚かないけど

「俺ばっか〜りししゃべってるのも飽きたし、とりあえず俺が伝えたいこと〜は、何も迷わずコウにもう一回告白する〜。あと、さっさと家に帰れ」

私はわけが分からなかった。

コウ君の気持ちは分かってしまったのに、でも私は・・・諦めたくなかった。

『コウ君は?』

「あん?」

『屋上にいるから、風引いちゃうよ。帰るように言っておいてくれる?』

鏡介は私の方をみて、何かを納得したのか

「その仕事は俺が責任を持つ〜て承った。」

こうして、朝私は鏡介君に言われて、このような、状態になっている。

覚悟は決まった。

多分これで失敗したら私は・・・

私は首を横にブンブン振り、悪い考えを吹っ切る。

幸一

俺は驚きながらも何とか言葉を発する。

「そうか、この美しいものは夕と言うのか、この姫は私の国で預かるう。君らも来ないか？」

「こ、幸一様、このような汚いものたちを」

俺の横にいたしもべ役の人が言う。

「うるさい！！さっさと運び出さないか」

俺は出来るだけ迫力を出しす。

それにしたがって二人のしもべが夕の入った棺おけを運び出す。

「ひく、ま、待ってください」

そういつてこけた大河、その衝撃で夕の入っている棺おけが地面に落ちる。

朝鈴に聞いたが、これはかなりの衝撃がくるらしい。

つて言うか、夕にあんな衝撃あたえて、大河め後で死刑だなどと思いつつ、急いで夕の元に駆け寄る。

そして、棺おけを開けると同時にりんごのかけらを客に見せるように落とす。

夕が上半身を起こしてこちらを見つめる。

「……夕様が目を覚まされました！！！」

夕は、小人役に向かって微笑む。

そして、俺の方に向かう。

少しの沈黙。

会場全体が完璧に静まり返っている。

ここで夕は、言った、

「お、おうぶん、だひいふうき（コウ君、大好き）」

それは、言葉としては伝わりにくいものだった。

しかし、何年ぶりに聞いた夕の声は 綺麗だった。

声が綺麗という表現はおかしいかかも知れない、しかし、観客はほとんど夕の状況を知っている。

みんな、驚いていた。

俺の今の表情はおそらくとんでもないものだろう。

鏡介の仕業なんだろうな、いや、団、大河、香、朝鈴、みんなのほうを見る。

みんな微笑んでいる。

そんな顔でみんなに見られると安心してしまふ。

俺は夕を見つめる。

瞳には涙がたまっている。

夕のこの姿は見たくない、それなのに、何日もこんな顔を見てしまった。

「・・・俺達も入るよ」

と団は小声で俺に話しかける。

本当に本当に本当にこいつらは・・・

「がばっ」

俺は夕を抱きしめる。

夕には聞こえないかもしれないそれでも俺は言った。
言わなければならなかった。

「大好きだよ夕ちゃん、ごめん夕ちゃん、俺一人じゃ何も出来なかった。でも、それでも俺はお前のこと」

そういつて顔と顔を見つめあうように少し離れて

「大好きだよ」

そういつて、ごく自然にキスをしてしまった。

その後のことはみんなあまり覚えてなかったみたいだが、一応成功の部類に入ると思われる。

キスをしてしまったことに対して色々問題を生じてしまったが、そこからへんは促した張本人である鏡介が何とかしてくれたいらしい。

とにかく俺達はみんなの前で、カップルと言うものになってしまった。

劇直後、俺達は教室にいた。

「フッフ、完璧だ、俺様のシナリオ通りだったぞ、コウに夕よ」

「・・・まさか本当に告白するとは」

団が少しあきれた顔で言う。

「まあいいじゃんいいじゃん、ってこれ監督の私が言っことじゃないんだけどね」

夕のほうを見ると、朝鈴と一緒に話していた。

二人は少しの会話の後、夕が泣き始めて、それに朝鈴が続いた。

夕は泣き終わった後、俺の所まで来て

『コウ君私達、その〜えつとあの〜』

「カップルってやつだろ、俗に言う」

夕は顔を真っ赤にする。

ああ、きつとこれでよかったんだと思う。

後悔はするかもしれないけど、これでいいと思う。
それよりも前に

「そういえば、夜桜さんとおじさん来てたよね・・・俺大丈夫なのか？」

「いいんじゃない？どうせいつかこうなるって思ってたみたいだし」

『だってどっちと結婚するかかけてたもん私達の親は』

あの人たちは、まあ余計な心配だったのだろう。

「フッフ、しかしこれからはコウを借りるときは夕の許可が要るのか」

『そうだよ。誰にも渡さないんだから』

「おいおい、俺借り物かよ。それより夕ちょっと遊び行かないか？昨日全部は回りきれなかったし」

「・・・やめといた方がいいよ」

俺の提案に団は注意をする。

「そうだね、今歩くとね、今あなた達この学校どころか街中の注目の的だしね」

「フフフ、つまりみんなで回るといことくだ」

「まさか鏡介、ここまでおまえの予測ずみ？」

鏡介は「なんのことやら」といって流したが、おそらくこれも鏡介が計画したことなんだろう。

まあみんなで遊ぶ分には大賛成だけどね。

『コウ君行こう。』

そういつて俺の手を握り、引っ張る。

夕の手首には昨日鏡介からもらった腕輪があった。

椿の花・・・花言葉は『思い』

その後、俺達はみんなで文化祭を回る。

昨日回ったところもあったが、とてつもなく面白かった。

夕がずつと俺の手を握っていたことと、周りからの視線は恥ずかしかったが、そこはかとなくうれしかった。

夕方にどの出し物が最も良かったかの投票が行われる。

この投票は生徒は自分のクラスを選べないらしく。

俺は小春のクラスを選んだのだが、中身がメイド喫茶だったので、俺の書いた紙をみていた香と団に引かれた。

夕は最後まで疑問してきたが、俺は最後の最後まで黙っていた。

そして今現在、俺は屋上に来ている。

隣には夕、みんなで内緒でこっそり来たのだ、鏡介あたりにはばれているだろうが、多分覗いているかもしれない。

下を見下ろすと、みんながキャンプファイヤーで踊っていた。香と団はちゃっかりペアを組み、あんだけ邪魔する予定だった大河は邪魔をするまでもなく、一人で体育座りをして壁と話していた。小春は恐らくクラスの男子らしき人と踊っている。

『綺麗だねコウ君、ここだよね昨日コウ君が私を振った場所』

「そういうこというなよ。俺だって・・・いやなんでもない」

危うく、恥ずかしすぎる言葉を発するところだった。

「フッフ、ハイ、エブリバ、デ皆の者、注目!!」

炎の中から出てきた鏡介は「あちち、熱いって、こここここれがラブなの〜か?」と試みてみんなの中心に立つ。

俺達も屋上から鏡介の姿を見る。

「みんなの盛り上がってる中申し訳ない、先ほど我等が生徒会長から命を受け、この学校でもっともエレガントナ出し物を発表しようと思う。皆の者、用意はいい〜か」

みんなが盛り上がる。

夕は下に下りるか聞いてきたが、俺は夕と二人きりで居たかったので、夕の手を握り無言で止める。

夕は、少し顔をうつむけたが握り返してきた。

「さあナ〜ンバワンは・・・こういうときは下から呼ぶのかもしれない〜が、俺はあえて、あえて言おう。

決して早く終わらせ〜て遊ぶというわけじゃないぞ。」

いや、絶対めんどくさがってるだろうとみんな思ってるに違いない。

「ナウンバワンは、二年A組【白雪姫】だ、みんなサウンキユウだ
！！！」

そして、どっからとり出したのか、ロケット花火を放ち、さらに極大の打ち上げ花火が撃ちあがる。
みんな、さらに踊りまくる。

『コウ君踊らない？』

夕が俺に尋ねる。

もちろん俺が断れるわけ、断るわけがなかった。

俺達はみんなと同じように踊る。

しかし、夕は音楽が聞こえないので、俺の口の動きを見てリズムを取る。

そのため、ずっと見詰め合う形になる。

この日は、先生も誰も止めず。

後夜祭は徹夜で続いた。

「しかし、まさかこの後、この幸せが続く事はナッスイング。

」

「……鏡介変なモノローグ入れるなよ」

俺らの文化祭は団の突っ込みで幕を閉じた。

十月十二日

夕

「くちゅん」

自分のくしゃみで目を覚ますと、目の前にコウ君の顔があった。

「あつ、夕ちゃん起きた？」

私はわけが分からなかった。

昨日屋上で花火を見ながらコウ君と話していたところまでは覚えている。

そして、どうやら私はそのまま寝てしまっていたようだ、しかし屋上で置の上で毛布に包まれ、更にコウ君の腕が私の頭の下にあった。きっと今の私の顔は真っ赤になって、慌てているのだろう。

『えっ？あつあの〜』

「あつ夕ちゃんあぶない！」

‘ドスッ’

畳から落ちてコンクリートに落ちた。

コウ君は心配そうな顔で見てる。

『痛いよ〜コウ君』

コウ君は笑っていた。

「とりあえず教室戻ろうか、多分からかわれるだろうけどね、昨日の今日だし」

私は苦笑いを浮かべる。

私は立ち上がるうとする、コウ君は手を差し伸べてくる。

私はちよつと恥ずかしながらもコウ君に手を借りて立ち上がる。

外は普通に寒かったけど、体は火照っていた。

廊下を歩いていると、ちよつと後ろを歩いてた私に対して

「何で後ろ歩いてるの？隣来いよ。」

コウ君は顔真っ赤にして言う。

『恥ずかしいなら言わなきゃいいのに』

コウ君は「いいよじゃあ先行くから」といってちよつと早く歩く。

私は珍しくコウ君をからかう事が出来たことに笑いながら、コウ君の隣に移動する。

今までコウ君の後ろでしか歩けなかった私にとって、それはとてつもない意味を持っていた。

コウ

教室に入ると、すでにみんな教室内で騒いでいた。

「フッフ、我等が英雄のお帰りだ」

鏡介がそっぴいながら両手を挙げる。

そして、朝鈴は俺の横の夕のところまで走っていった

「夕、大丈夫？コウに何もされてない？」

そっぴいって夕の肩を掴んでブンブン前後に振る。

夕は俺の方を見る。

人に対してまったく疑うことをしない夕の目、俺はこいつに何も出
来ない、出来るはずがない。

『コウ君何もしてないよね?』

「おいおい、俺との夜を忘れたのか」

みんなが俺の方を見る。

確かに俺の声だったが、俺がそんな事言うはずがない。

犯人はもちろん鏡介だった。

「おいおい、声帯変えるのはやめてくれよ。普通の人には出来ないぞ」

「フッフ、一緒の毛布に包まり何もなかったと、コウはこう言いた
いのか、俺も寝たいぞ」

「ほらそれよりも」

香がこのタイミングで会話に突っ込んでくる。

「みんなで遊ぼうよ。今日を逃すと、来週から始まる中間テストに、
私達は来月の全国模試まであるからね」

俺は夕と二人つきりであったかったので、夕の手を取りこっそり抜け
出そうとした。

みんなが騒いでいるのでチャンスだと思ったのだが、廊下に出る直
前に肩をつかまれる。

後ろを振り返るとみんなの笑顔に向かえられて、騒動の中心地まで
拉致されもみくちゃにされた。

「フフフ、これを我が愛の親友に着せるのだ」

そういつて鏡介の手にあつたものは、小春のクラスで行われていた喫茶店の女物の服装だった。

「ちょっと待った！俺が着てもつまらないだろう。なあみんな」

そうは言ってみたものの、みんながそんな言葉聞くわけもなかった。俺はこれだけは阻止しよう

「夕ちゃんがこの服着たら似合いそうだな」

夕はえっ！？とびつくりした顔でこちらを見て

「夕ちゃんがこの服着たの見てみたいな」

「かわいい夕ちゃんなら似合つと思つんだけどな、いや絶対似合つ」

『そうかな？』

夕は顔を赤くさせる。

もう一息だと思つたのに

「フフフ、コウよこの世にはペ〜アルックって物があるのだ〜よ

そういつて手品のごとくもつ片方の手から同じ服を取り出す。

隣の夕をみると目を輝かせてこちらを見る。

おそらくペアルックと言う言葉に反応したのだらう。

『コウ君着ようよ』

あゝ、ドンマイ俺

夕の目をみたら俺はほぼ百パーセント夕を裏切ることが出来ないだろう。

こうして俺はみんなに服を着せられ、外に出る余裕も勇気も持たせられないまま、結局夜まで学校を使って遊び、服を返してもらった。夕は俺が似合うと言っでしまひ。

夜学校から帰るまでずっと着ていた。

おそらく東京にいたらそれこそ大変な目にあっていただろう。

『コウ君楽しかったね』

「そっだね」

それでも楽しいのだから、やめるわけにはいかない、2度とやめな
いと誓う。

「フッフ、コスプレをか？」

「違っって」

奇跡編

十月十八日

俺と夕が付き合い初めてちょうど一週間、未だに二人っきりでどこかに出かけたことすらない。

今俺は高橋家にて、夕と朝鈴と共に明日から二日間にかけて行われる中間テストの勉強中である。

俺は何度め夕なら問題ないから遊び行こうとさそつたのだが、テスト対策を完璧にしないといけないらしい。

しかし、今の夕の実力なら普通に一番を取れるだろう。

これで全然駄目だとしたら、突然の交通事故で記憶喪失か同じぐらいの勉強時間を費やしてる 朝鈴ぐらいだろう。

「さつきから全部言葉に出てるんですけど」

朝鈴が俺に対して勉強でいらいらしながら言ってくる。

「フッフ、ここにいるやつらには勉強など必要ないのさ、」

「『』・・・『』」

皆固まって鏡介の方に目を向ける。

鏡介が座っているところはさつきまで誰もいなかったはずである。

「勉強する必要がないってどういう意味よ」

沈黙を破ったのは朝鈴だった。

「フッフ、自分で気付かないとは、俺様は情けないぞ。つまりコウと夕は勉強しなくても余裕で上位だろう。俺は二人からのおこぼれを貰うから勉強しない。勉強するならコウを遠くから見ていたほうがゆ〜かいだからな」

それは一般的にカンニングとストーカーって言うんだろつなと俺は思う。

「そして、朝鈴に関しては勉強しても補習はまのがれな〜いのだから意味がない」

そういつと、鏡介の頭に缶が当たる。

恐らく鏡介なら避けられただろうが、それでも朝鈴の投げた俺が飲むはずだったコーヒー（朝鈴も夕もコーヒーは飲めないの）が鏡介に当たったのだ。

わざと当たったのだろうが理由が分からない。

「特に深い意味はないのだ〜よ我が親友よ」

そういつて鏡介は扉に向かう

「あれ？帰るんだ。もう少しいいいのに、お茶くらい出すよ。」

意外にも朝鈴が鏡介を止める。

こいつら二人付き合うのではないかとひそかに思ってしまう。

「フッフ、俺にはテストより大切なものがあるのだ〜よ。コウと一緒にいられるという点ではそれをセレ〜クトしたいがそれでもやらなきゃいけないのだよ。」

そして、鏡介は部屋から出て行く。

夕が俺の肩を叩きこつそり

『コウ君、あの二人ってどうなのかな？』

どうやら夕も俺と同じ事を思っていたらしい。
まあおそらくないだろうけど俺は

「実はもう付き合ってるかもよ」

と冗談気味に言ってみた。

夕は『まっさか』と朝鈴の顔を見る。

その後、なんとなく朝鈴に探りを入れてみた。

「鏡介っていいやつだよな」

「ん？そうね」

さらに

「鏡介の用事ってなんだろ？気になんない？」

「別に、あいついつも謎でしょ」

珍しく全部かわされた。

本当になにもないのだろうか、などと思っていたせいで、テスト勉強は進まなかった。

おそらく何もなくても夕で遊んでいただろうから気にしない。

「えっと、明日は国語と英語と世界史だったかな？」

『えっ！？英語はあったけど数学Bじゃなかったっけ？』

「まったく夕は、それ前回のテストだよ。コウなのであってるよ」

夕は驚いて確認する。

まあ全教科勉強してあるし、問題ないだろう。

俺が夕と遊ぶための時間を費やしたんだいい成績取らないと、更には遊びまくらないと

「夕ちゃん、テスト最終日覚悟してろよ。」

『わわわわ、私何されちゃうのかな？』

そして夜

夜桜さんの作った夕飯をご馳走になった後、玄関まで二人に送ってもらった。

「じゃあ、明日がんばろうね夕ちゃん」

『うん』

「朝鈴も・・・うんまあそれなりに」

「うっさいわね、いちいち腹の立つこと言って」

俺は玄関から出る。

少し歩いたところで朝鈴に止められる。

「ちょっと待ちなさいよ」

「どっした？」

朝鈴は後ろに夕がないことを確認して

「あんたのことだから・・・忘れてるだろうけど今からちょうど一週間後夕の誕生日だよ」

忘れていた。

見事に忘れていた。

「忘れてたのね、二人つきりにさせてあげるから、考えときなさいよ」

俺はあわてて「おう」と返事する。

「じゃあそれだけだからバイバイ」

「ああじゃあな、お前の誕生日でもあるからプレゼントぐらい買ってやるよ」

そういうと朝鈴は笑いながら「余計なお世話よ」といって走って戻っていった。

俺は誕生日に何を買ってやるのか考えながら家に帰る。

十月二十日

夕

昨日のテストは出来た、はず、

今日はテストがある、はず、

テストの後コウ君と遊びに行く、はず、

最近の私は確信を持って行動出来ない気がする。
なんか自分じゃなくて他人を見ているような気分になる。
私はコウ君の彼女の・・・はず、
まただと思いながら部屋を出る。

「あつ夕、おはよう」

姉さんが片手を上げて近づいてくる。

『おはよう姉さん』

すると姉さんは、一回私を見て首を傾げる。

そして目の前に来て両手を私の顔の横にだす。

‘パチン’

『！？』

頬に痛みが走る。

私は一瞬何が起きたか解らなかったが、すぐにこの痛みは姉さんか
らやられたらしい、他人を見ている感じでも痛感は自分のものだっ
たので少しほっとする。

「夕、何かあった？さっきから悲しそうな顔してるけど」

『姉さん、それいうんだったらビンタする前にいうべきだよ』

今の私は恐らく涙目になっているだろう。

「そんな顔しているとコウがあんたのこと心配するよ。まああんたが

コウに心配かけさせたい気持ちもわからなくもないし、そういう恋愛もあるかも知れないけど、心配かけさせたくないなら笑いなさい」姉さんにそういわれ、私は少し顔を赤くさせて、笑顔をつくる。姉は「よし」と言っつて、台所に向かう。私も後に続いて自分とコウ君の弁当を作る。私の左手には今日テストの、はず、の英語の教科書があった。

幸一

「ふう、よく寝た」

テストが終わった。

五十分のテスト時間があつたのに、十分ぐらいで終わり、鏡介と手話で少し話した後、ずっと寝ていた。

近くで最後までペン先を机に叩いていた朝鈴が奏でる音は見事に俺を深い眠りに落とした。

「フッフ、我が親友よ。よく眠れたかな？」

「ああ、ばっちり」

そういつて俺はブイサインをだす。

「あんたら余裕ね、本当こつこついう時だけ羨ましい」

と朝鈴が俺達の会話に入ってくる。

「そういえば、団と香は？」

そういつて二人の方を見ると仲良く答えあわせをしている。

もうなんかカップルという感じがして、違和感がない。
俺は二人に容赦なく近づき、団の肩を叩いて

「どうだった？幸せカップル」

「・・・まあそのために二人で勉強してたし」

「幸せカップルに突っ込まれなかった。団もやるようになったじゃないか」

俺がそういうと二人が俺の方を見て香が

「コウ、なんか鏡介に似てきたよ」

俺はものすごいショックを受けた。

『コウ君どうしたの？この世の終わりのような顔してるけど』

「いや、何でもないよ。それよりテストどうだった？」

おそらく大丈夫だったとは思うが俺は聞いてみる。

なんか朝から夕は悲しんでいる印象を受ける。

さらに笑顔でそれをごまかそうとしているので心配である。

しかし、本人が隠してまで笑っているのだから俺はあえて聞かなかつた。

『多分、出来たかな』

「まあこの後遊びに行くんだし、楽しく行こう」

俺がそういつと夕はさっきまでとは違う俺が好きな夕の笑顔をみせて『楽しみにしてるよ』という。
そして、俺はこっそり鏡介を呼ぶ。

「フフフ、どうしたかくな我が親友」

「お前なら俺が言いたいこと分かるだろ」

「フフフ、そんないきなり愛の告白なんて、こまるぜ・・・い、いや待つんだコウ分かつてるわかつてるゝさ、あれだろ夕と二人きりになりたいから協力しゝろだろ」

俺はそんな鏡介がうるたえるほどの顔してたのだろうか？などと思いつつ「よろしく」と伝える。

俺は夕の手を握り走る。

朝鈴の「まちなさいよ〜」って言う声と鏡介の「フフフ、コウに会いたければ俺様を越えていけ」と言う声が聞こえた。

『コウ君、まだHR終わってないよ』

そついいながらもしつかり走って着いてくる夕の姿に笑みがこぼれる。

途中良姉さんに声をかけられたが、謝りながら通り抜けた。
文化祭以来何かしらの邪魔で夕と二人つきりになることがなかった。
下駄箱で靴を履き替える。

「夕ちゃん大丈夫？」

『へへへ、大丈夫だよ。それよりどこ行くの？』

残念ながらこの街には遊べる場所は少ない。

とりあえず制服で歩くと、文化祭の時の件で冷やかせたり目立ったりするので、服を変えようと思い、服屋に向かうことにした。

俺達は手をつないで商店街に向かう。

一瞬手をぎゅっと握られる。

隣を向くと夕が宝石店の指輪を見ていた。

こんな商店街にこんな店あったのかと思いつながら夕に話しかける。

「ほしいの？」

夕の見ていた指輪はとてもシンプルなもので、シルバーのリングにピンク色の宝石が小さく、でも力強く光っていた。

俺の言葉に反応した夕は首を横に振り

『ううん、結婚ってあこがれるな〜っておもっただけだよ。コウ君』

そういつて見られたせいなのか、俺は思わず照れてしまった。

『コウ君いこ、服屋はあっちだよ』

そういつて俺は夕に引っ張られる。

俺は振り返って、もう一度指輪を見つめる。

その後服屋に付いた俺と夕、俺は即行十着ほど夕に渡して試着させる。

俺の渡した服の共通点は全てワンピースだった。

俺の中では、この街に帰ってきたときの夕の姿が最も印象に残ってしまい、もう夕に自分が何か着せるとしたらワンピースしかないと思っていた。

「こんこん」

壁を叩く音が聞こえる。

夕が一着目を着終わったのだろう。

カーテンを開く。

俺は言葉を失ってしまう。

赤いワンピースだったのだが、なんとというか、とにかく・・・似合
いすぎる。

『コウ君？』

俺は夕の手話で我に変える。

「夕ちゃん最高だよ。もうそれ決定、それ以外ありえない、もう即
買わないとその商品がかわいそうだよ。」

『あわわ〜コウ君が壊れちゃった。』

その後、結局俺が渡した服全て買ってしまった。

と言うよりも、俺が少し調子にのってほめ過ぎたのが原因なのだが

『コウ君買ってもらっちゃって良かったの？』

夕は心配そうに聞く。

俺は「問題ないよ」と答える。

実際、俺は金には問題ない。

俺が東京にいたとき、様々な塾や予備校やらに俺の名前を貸す代わ
りにお金を渡すという本来はべたらいけないような方法だが、はっ
きり言ってそこからへんの課長クラスのサラリーマンと一年間にもら
う額は変わらない。

ちなみに俺は黒ジーパンに黒シャツに黒ジャケットという黒尽くめ

でそろえた。

以外にも選んだのは夕で、夕のセンスに少し驚く。

夕は最初に着た赤いワンピースに青色のジージャンを羽織っていた。さすがに十月後半なので日が沈むと寒いのでその対策である。

その後、荷物はコインロッカー（探すのに三十分ほど使ったが）に入れ、もうお互いがお互いを色々な思い出の場所に連れて行く。

例えば、すでに廃校が決定している俺達が通っていた小学校とか、秘密基地として使っていた橋の下とか、遊ぶというから映画とか行くつもりだったが、そんなものはこの街には存在せず、それでも行く場所行く場所で思い出話に花を咲かせる。

夜七時頃になると、もう真っ暗になっていて家に向かう。

夜桜さんとおじさんにからかわれるのも困るし、こんな田舎街でも何が起こるかわからないのだ。

家の前で少し話した後。

『コウ君今日はありがとう楽しかったよ。本当に夕飯食べていかないの？』

「明日からテスト休みでお世話になるからね、今日くらいは祖父母と食事しとくよ。」

夕は『そっか』というが微妙に納得してなそうな顔をしていた。そして、夕は両目をつぶる。

俺は夕の肩に手を置きおでこにキスをする。

『うっ、コウ君いじわるだよ。』

「明日は昼からだよ。鏡介がまたなんか考えてるみたいだから」

俺は笑いながら帰る。

夕は俺が家に入るまでずっと手を振っている事を知っていたので振り返りながら夕が見えなくなるまで後ろ向きで歩く。

家に帰ると祖母から、良姉さんから電話があったことを聞き、電話をする。

「あつ、良姉さん？おれおれ」

「……残念ながら私は愚かではないってか、物忘れするほど老けていませのできります。」

「わわわ、幸一だよ幸一、それに良姉さん全然若いじゃんだってまだ二十……」

「わくわくわ、もう、私だって忘れてるんだから」

さすがに自分の年忘れちゃ駄目なんじゃと思いつつ。

「そついえば電話ってなに？」

「そうそう、明日朝開いてるかな？ちよつと電話じゃ話にくいことだから職員室まで来てほしいんだけど」

「そんな、良姉さん、いくら若い子がいいからって生徒に告白なんて駄目だって、それに俺は夕ちゃんともう二度と離れる気皆無だから」

「そんなわけないじゃん、ちゃんと来なさいよ。」

俺は内容は気になったが、いつも通り、勉強とある事を行う。

十月二十一日

‘びびびび、びびびび、’

念のために鳴らした目覚ましになる。

俺は自分でも奇跡的だと思うが目覚ましより早く目を覚ましていた。おそらく良姉さんの昨日の呼び出しが気になったのだろう。

俺は目覚ましを切って、着替える。

現在の時刻は八時、東京にいた時は午後まで寝ているときもあったのでこの時間には驚きだ。

「よし！」

俺は目覚めのために、一回自分の頬を両手ではさむように叩く。

学校に着いた。

いつもみんなで学校で行ってためか、一人で行う登校は長く感じた。
‘コンコン、’

「はい」

職員室から良姉さんの声が聞こえる。

「二年A組松葉です。失礼します。」

入ると中には良姉さんと世界史のおじいちゃん先生こと田村たむら 清七きよし
十一歳がいた。

他の先生は休日やら部活やらでないみたいだ。

良姉さんは俺がこんなに早く来るとは思わなかったのか、目を一瞬大きく開いた後、いつもの顔よりちょっと冷静な顔になって

「コウ君、早かったね。じゃこつち座ってもらえる？」

そういつて、先生の机の前に座らされる。

そして「飲む？」といわれてコーヒーを置かれる。

俺がコーヒーをすすると、良姉さんは俺の前に紙を並べる。

その紙には見覚えがあった。

昨日まで行っていた国語、数学、世界史、地理、英語、生物、科学のテスト計七枚の解答用紙だった。

「!？」

俺は思わずびっくりする。

これが自分のテストならたとえ零点でもここまで驚かないだろう。

俺の前に出されたのは、夕の回答紙でその点数に啞然とする。

おそらく平均点程度だろうがそれがおかしいのだ前回学年二位である夕がこの点数はありえないのだ。

「もしかしたら朝鈴よりも低いかもな」

俺がそんなことを口に出すと、良し姉さんは少し笑みを浮かべながら、「それはないよ」と言う。

どんだけ悪いんだろうあいつはと思った。

「なるほど良姉さんが相談した言っていたことはこれが」

「そういうこと、話が早くて助かる。ちなみにあんたは全部満点、一問有名大学の過去問入れたんだけどな。」

俺は解答用紙を見る。

最初に見えたテストが世界史だったため目に入らなかったが、数学と科学は共に九十点をクリアしていつも以上に見えなくもないのだが、暗記物の世界史、地理、英語に関してはありえなく低い。細かく見てみると、俺がテストに出ると予測して、俺が見ただけでも五回は確認したところが間違っていた。

「夕が勉強していたことは私も知ってるし、ずっとコウ君が遊びたい遊びたい駄々こねてたのも覚えてるしね」

俺は一瞬赤くなる。

「おかしいな、このテストなら夕ちゃんなら満点取れてもおかしくないはずだ、本当に遊べなかったし、暗記物が出来てないのも気になる。」

良姉さんは「そうか、コウ君でも分かりませんか」と言っただけで、自分用に用意したのか緑茶をすすり

「とりあえず校長には黙っとくけど、なんか分かったら私にいいなよ。コウ君昔から一人で背負うからね」

時間を見るともう十時になっていた。

学校に着いたのが九時頃だから一時間もここにいたことになる。

多分今の俺はあせっているのだと思う。

俺は失礼しますと言って職員室を出ようとすると不意におじいちゃん先生が

「あ、あの〜な松葉君だったかの」

「はい」

「思ったことを口に出しといた方がええぞ、誰も人の考えてること
はわからないんだからの」

俺は一礼してから職員室を出る。

思わず鏡介を思い出したがあいつは例外なんだろうなと思いつつ、
顔を少しうつむけながら学校を出る。

そのまま歩いてると商店街の中を歩いていた。

ほとんどの店は十時に開店するので、にぎわっているといえげにぎ
わっている状態だった。

とりあえず元気を出そうと思い、朝食代わりに肉屋で一個八十円の
コロッケを二個買って更に肉屋のおばちゃんに

「おや、元気ないね、あんたあれだろう、高橋のこの譲ちゃんと
付き合いはじめた松葉のこの坊ちゃんでしょ。見たわよ文化祭、
はいこれ牛乳持ってきな。泣かすんじゃないよ」

「はい、ありがとうございます」

俺はそういつて牛乳とコロッケを手取る。

よほどしけた顔をしていたのだろう。

俺は出来るだけ笑顔で返す。

しばらく歩くと少し元気がでる。

「とりあえずこれからだよな」

と独り言をつぶやきついた先は宝石店。

昨日夕が見ていた指輪を見つける。
たとえ値段がどんなに高くても買うつもりだったが、思ったほどの高さではなく。

事前に鏡介から聞いた夕の指の大きさを言つと、ピッタリの物がす
でにあったので、小さな小箱に入れてもらつた。

まさかこんな高校生が指輪を買つとは思ってなかったのか、店員の
すらつとした白髪のおばちゃんは終始目を丸くして驚いていた。

家に帰り指輪の入った箱を机の中に入れて、昼になったことを確認
してまた外に出る。

この日から、俺は夕の行動を少し注意してみるようにすることにな
る。

十月二十四日

「夕ちゃん？」

俺は夕の肩を叩いて話しかける。

『へ！？・・・どうしたのゴウ君』

これで今日五回目だ、先生にテストを見せられてから、俺は夕の行
動をチエックするようになった。

分かったことは、夕ちゃんの反応が日に日に遅くなっていること、
そして・・・

『今日は何するんだっけ？』

記憶力がなんとなく、いやもう確実に悪くなっている。

俺はこれを夕にはもちろん朝鈴や他の皆にも気づかないようにして

いたつもりである。

もしかしたら鏡介には気づかれているだろう。

それは鏡介も夕を助けていたことから分かった。

そして、俺はあるひとつの可能性がずっと脳をかすめていた。

夕と朝鈴の誕生日、つまり明日が終わったら、真剣に一回夜桜さんとおじさんに病院に見せるように相談しようと思う。

そして、明日は皆で誕生日のパーティーをするということで、今日の間夕に渡したいものがあるなら二人っきりのときに渡せと言われて、今は二人で商店街を歩いている途中である。

しかし、ここだと二人つきりになるところか、色々な人に話しかけられて静かでもない。

っていうか場所の選択ミスだろ。

なんでここにいるのか？ そうだ、この休みの間にやることなくまで遊びまくったので散歩しようかということになっていたのだ。

俺もボケたかな？

結局渡せる雰囲気も勇氣もないまま夜になってしまった。

今はいつもの通学路の川のそばにいる。

俺はいきなりだが

「夕ちゃん、明日何の日か知ってるよね？」

『えっど……誕生日？』

「そうなんだよね、実は今日の二人っきりの間にプレゼント渡そうかなと思ってね」

そっぴいながら、俺は頭を片手でかきながら言う。

こういうことは今までの人生でこんなことをした経験一度もなかつ

たので、どうしていいのが真剣困っている。

『へ！？・・・え〜！？何で何で、今日そんなサプライズな日だったの？どつりでコウ君・・・あれ？』

「夕ちゃんどうしたの？」

夕が一瞬固まったかと思うと口ぱくで何かいう。

「・・・おふん・あうへ・て」

その後夕が目を覚めるのは次の日の朝だった。
俺の予感は的中した。

十月二十五日

俺は病院にいた。

俺だけでなく、夜桜さんにおじさん、朝鈴、鏡介、団、香、大河そしてベットの所で眠っている夕。

あの後俺は病院と鏡介に連絡した。

俺と鏡介は徹夜、他の皆は夜一回見に来た後、一旦帰るなり病院に寝るなりしていた。

この街には私营病院『松葉病院』一個しかない。

そう、かつて俺の両親が働いていた場所。

現在は当時研修医だった武藤靖彦が医師となり、看護師一人と二人で経営している。

俺はずっと靖彦と呼んでいて、すごいやさしいイメージだったのだが、そのイメージ以上に貫禄というかなんか親父を見ているような感じがした。

靖彦いわく、脈に問題はないが血圧が高く、おそらくそれが原因の

めまいだろつとのことだ。

病室にはベットとたんすが二つずつ、そして何個もの椅子が置いてある。

最悪の事態を想定していた俺は、キャンバス用のノートと太字の油性ペンを置いて貰う用に頼んだ。

靖彦は最初疑問に思ったらしいが、了承してくれた。

「コウちゃんに鏡介ちゃん一時間でいいから寝てなさい」

夜桜さんがそういつて、眠るように促す。

鏡介のほうを向くと、鏡介は頷き、そして

「ちよつと寝とくべきだ、安心しろ。誰が夕を見てても一番最初に伝えるのは我が親友のコウだからな」

そういわれて、不安が残りながらも、隣の空いてる病室のベットを借りる。

絶対眠れないと思ったが早く寝れた。

「コウ、コウウー！起きて起きなさい、夕が目を覚ましたよ」

俺は時計を見ると、時間はさつきから二時間ぐらい経っていて、八時になっていた。

俺は起こしに来てくれた朝鈴の横を駆ける。

「ちよつ、まちなさいよ。入るのはちよつと待って」

朝鈴のそんな声が聞こえる前に、俺は扉をあけてしまった。

病室には夕の他に誰もいなかった。

おかしかったのだ、二時間前に夜桜さんに寝るように促されたのに、

起こしに来たのは朝鈴だった。
夕は今までに見せたことのない、冷めた顔で俺の方を見る。
そして、俺に対して、スケッチブックをめくり一番最初のページを
見せる。

「!？」

そこに書かれていたのは

‘あなた誰?’

俺はその場で固まってしまふ。

一番初めに書かれていたということは夜桜さんに対してこれを書いたのだらう。

「コウ、コウ・・・しっかりしなさい」

俺は後ろにいた朝鈴に言われる。

夕は朝鈴の方を見て、スケッチブックをめくる

‘ねえさん 寝ていい?’

まだ朝鈴のことは覚えているらしい。

俺は後ろを向き、朝鈴とすれ違う。

「必ず戻ってくる。少し時間をくれ・・・夕ちゃんを頼む。」

俺は朝鈴の返事も聞かないまま走り出した。

途中待合室に泣いている夜桜さんとおじさんを見つけたが、今の俺は止まることが出来なかった。

着いた場所は、高橋家の庭の桜の木だった。
とにかく夢中で走っていた。

感情がめちゃくちゃになっていて、俺は思わず

「ドン・ドン・ドン」

桜の幹に何回も頭突きをする。

「ドン・ドン・ドン」

血がたれ始める。

「くそ、くそ、くそ」

俺は涙を流し始める。

血と涙の混ざったものらしき水溜りが出来始める。

悔しかった。

悲しかった。

自分はいつたい何をしていたのか、自分は何も出来なかった。

何十回か頭突きをした後俺は一瞬めまいが起こり、暖かい液体に頭から突っ込む。

俺は気を失った。

目が覚めると、目の前には鏡介がいた。

どうやら鏡介に膝枕されてるみたいだ、夕にもされたことないのに。
・
・
夕

「そっか、俺は、っ痛」

頭ががんがんする。

「フッフ、あんだだけ頭打てば、見るか？我が親友の軌跡」

外の桜の木を見ると、その下にもうすでに黒くなっていたかつては真っ赤な血だったものがあつた。

「俺、なにも出来なかつた」

「コウ」

「なにやってんだよ俺」

「コウ」

「ありえないだろ、わかつてたはずだろうなのに俺」

「コウ！！！！」

鏡介は肩を思いつきりつかみ俺の顔を自分の顔を見せるようにする。鏡介は哀しいものを見る目でみつめる。

「っ！！」

俺は声をあげることすら出来なかつた。

普通は鏡介の立場なら殴ったりするとところだろうが、鏡介はそれをしなかつた。

「フッフ、あくたりまえだ、なぜ我が愛の親友を殴らなければなら

ないのだ、それにお前も俺様もこれからしなきゃならぬいことがあるではないか」

「これから？」

俺がそういうと、鏡介は服の中から二つのものを取り出した。

一つははがきだろうか？もう一つは見覚えがある。

昔俺が夕にプレゼントした髪飾りだ。

とはいっても、それは親父に用意されたものだった。

「悪いな俺様はこれ以上言えないのだよ。それが『F』の遺言だったからな」

『F』・・・俺の親父がかつて特定の人に呼ばれていた名前である。

そして、鏡介は俺に言葉を発した後、消えていた。

「ふゝ、ここにきて親父か」

俺は少し落ち着いたのかもしれない。

そして鏡介の置いていったものを見つめる。

最初に手を取ったのは、はがきである。

送った住所は東京にある俺の家、しかし俺はこの手紙を見たことがなかった。

差出人は・・・狼だった。

内容を見ると

『コウ、お前が夕に贈ったって言っていたやつに取られた髪飾り取り戻しといたぞ。本当はこういうのは自分で取りに行くもんだぞ、あと今回はお前に恩を売っておこうと思つてな、お前が忙しい理由も知っているが、俺も家庭の方でな、見たことあるだろ俺の妹、小

春って言うんだけど、いや本当にかわいいやつなんだがなこつちに
戻ってきたときでいい、友達になってやってくれ・・・以上またあ
おうぜ』

小春が前見つけた狼からの手紙の約束ってのはこのことだったのか、
まあこの手紙を見る前に約束は果たしたことになるのかなと思う。
次に髪飾りを手に取る。

鏡介が渡してきたものだ、きっと意味があるはずだ。
俺はなんとなく色々な方向から見ている。

少し汚れているが、夕に付いたら似合いそうだと思う。

実際昔つけてたときは似合っていたし、夕も気に入っていたので放
さなかつたらしい。

手になんか変な感覚が残る。

裏側をよく見ると定期的な間隔で穴が開いていた。

横三個縦二個が何個も並んでいる。

昔はこんなもの気がつかなかった、穴も小さいし見ようとも思わな
い。

これは点字か？

俺はそう思って、昔小学生ぐらいのときに何回か見た点字の表を思
い出す。

がんばって解読してみる。

『ゆづにもしものことがあったら0101*****』

後半の数字は電話番号だろう。

国番号1、つまりアメリカと言うことだ。

誰の番号だろう？

その時、母親の言葉を思い出した。

「夕ちゃん、髪飾りにあの人の言葉が」

母親に聞けば分かるかもしれない。

俺は急いで携帯を手に取り電話をかける。

仕事中心かもしれないけどそんなこと関係ない。

夕が大変なのだから。

「あつ母さん？幸一だけど」

「あつこいつち？どうしたの何か急用・・・まさか夕ちゃんになんかあつたの？」

はやくて助かる。

「夕ちゃんが倒れちゃって、更に記憶が曖昧になってる。多分・・・いやなんでもない。それで夕ちゃんの髪飾りで父さんの言葉を解読したんだけど、どうやらアメリカの方の電話番号だと思っただけど、母さんなにかわからないかな？」

母親は、無言で俺がしゃべり終わるのを待つ。

「あの人が耳鼻科の研究をしたのは知ってるよね」

俺は「うん」と答える。

「あの人が『F』と呼ばれるきっかけになったときの、『ロベルト・F・ハース師匠』先生しかいないわね、あの人が頼る人なんてこの人しかいないし、私はいこの人意外に思いつかない」

『ロベルト・F・ハース』俺でも知っている外科の先生だ脳神経外科学に関して専門に研究をしている。

まさか自分の父親がその人の弟子だったとは思わなかった。
俺は母親に礼を言う。
母親は最後に

「私は逃げてしまった。こういち、あなたには逃げてほしくない。
わたしには言う資格なんてないけど、最後まで見てやりなさい。」

そういつて母親は電話を切る。

俺は一息吐く。

まだ頭は痛い、自業自得ということ、我慢する。

おそらく、この電話をかけるとその人につながるのだろう。
つまり、より細かい状況を言わなければならない。

「夕ちゃんの所に戻らないとな、朝鈴とも約束したし」

俺は病院に戻る。

病院の入り口の所に行くと、香と団と大河が立っていた。

最初に気づいたのは香だったのだろう。

香は団と大河に対して俺に指を向けて何かしゃべっている。

「……コウ、大丈夫？」

「俺は、まだ少しな、でもやることがあるから」

「やること？」

香が聞いてくる。

「それよりも夜桜さんとおじさんは？」

「鏡介が一回落ち着かせようとして、眠らせてたよ。方法はわかんないけど」

俺は「そうか」と言ってる中に入る。
なぜか、大河が付いてくる。

「靖彦、夕ちゃんの状態は？」

「血圧が高いこと意外は正常なはずだよ。これが原因の記憶喪失なら勝手に直るんだろうが、多分そうはいかないんだろうな、今は寝ている。記憶喪失特有の行動だよ。」

俺は靖彦からカルテを受け取る。

「靖彦、電話借りるよ。大河ちょっと周り静かにさせて・・・って誰もいないしね」

俺は夕の髪飾りにあった電話番号らしきものを押してみる。
相手はすぐに出た。

「こちらロベルト・F・ハースの研究所です。あなたは『F』ですか？」

女性の人の声で、英語だった。
なぜ『F』からと言うことは分からなかったが、英語ということは予測できていたので、俺は落ち着いて返す。

「俺は『F』の息子の松葉幸一です。ロベルト・F・ハース氏はいらっしゃいますか？」

隣で、英語を聞いていた大河は俺が英語をしゃべっていたことに、ものすごいものを見ているかのように見ている。女性の方は俺の言葉を聞いて、驚いている。

「『F』の息子！？少々お待ちください」

するとすぐに、お爺さんのような渋い声の人が出る。

テレビで聞いたことのある声、一瞬でロベルト・F・ハースと言うことが分かった。

「やあ、幸一君だね私はロベルト・F・ハース、君とは一度『F』、君の父さんが亡くなったときに一回あったんだよ。ところでどうしたんだい？これは確か緊急の時の電話だったはずだが」

俺は片手で夕のカルテを見て落ち着いて話す。

「『F』の最後の患者、高橋夕の様態が悪くなりました。助けてください。」

「・・・具体的に話してくれないか」

夕の昔のカルテもあったので、そこから説明する。

「患者が幼稚園の時つまり今から約十年前、中耳炎が治らず難聴になりました。その後、小学二、三の時は一時回復、その後難聴は続き、耳の精密検査をする二週間前に主治医『F』がなくなりました。最近では難聴状態以外異常はなく過ごしていましたが、昨夜急に倒れて、記憶喪失。現在の主治医武藤靖彦は血圧が高く、これが原因での一時的記憶障害と判断しています。この記憶障害ですが、自身自身のことと日常生活、更に姉である高橋朝鈴のことのみ覚えてい

るようです。どうでしょうかロベルト・F・ハース氏」

「私のことはハースと読んでくれたまえ、私も君のことは幸一と呼ぶことにしよう。」

そういった後ハースはしばらく考える。

「幸一、君はどう思うかね？君も靖彦と同じ意見かね？」

俺は自分の思ってる最悪のケースを話すことにした。

「俺は中耳がんによる、障害の一つと考えます。」

中耳がん、名前の通り癌の一種である。

日本では滅多に起こることのない病気、俺はこのカルテでかつて夕が中耳炎になったことや、最近の夕を見て、これがもっとも最悪なパターンだと思った。

「私は脳に転移している可能性もあると思っている。」

俺は言葉を失う。

大河が「大丈夫か？」と倒れかけた俺を支えながら言う。

俺は更に話しを聞く。

「幸一、一度アメリカに来てくれ、・・・の空港まで来てくれれば、迎えに行こう。はつきり言って一刻の猶予もない。そして、患者のCT検査やMRI検査は現在主治医の靖彦にどうにかしてもらって、とにかく慌てず急ぐんだ。あとこの電話番号は一度使つと使えなくなってしまうから、君の携帯の番号を」

俺は携帯の番号を教える。

「では、待っている。出来るだけ急いでくれ。」

電話が切れると同時に俺は今まで逃げていた夕の死と言つものを急に感じてしまった。

そして、大河に全体重を預けることになった。

「あわわわ」

倒れた。

俺は一瞬上を見て、何とか立ち上がる。

急がないと

俺は急いで、靖彦の元に向かう。

そして、CT検査・MRI検査の手続きをしてもらつ様に言つ。

こんな田舎街では、父さんのいたところならともかく、こんな検査できない。

もしかしたら、東京でも放射線治療とか出来るかもしれない。

でも俺は夕を確実に直る可能性の高い方を取ろうと思つ。

話を聞いていた団は

「・・・パスポートはどうする？」

俺はあせる。

確かパスポート、確かハースに言われた空港はビザは入らなかつた気がするが、海外に行くためにはどうしてもパスポートが必要なのだ。

最低でも八〜十日かかる。

でもどうすることも出来ない。

その時

「フッフ、は〜ハハハハ」

鏡介の声が外から聞こえる。

メガホンでも使ってるのかとても大きい。

玄関を見ると、一直線にとんでもないスピードで・

・ガ〜ン!!!!」

玄関の扉にぶつかつた。

「フッフ、こんな〜もの我が愛に比べれ〜ば」

結構痛そうだった。

そして、鏡介は皆の中心に立ち

「フッフ、どし〜たのだ？タが倒れたからって落ちこ〜みすぎだぞ」

「それが、幸一海外に行くことになつたんだけどパスポートがないのよ、急がないといけないのに」

香が落ち込んでる俺の変わりに説明する。

「フッフ、俺様がいまま〜で何をしてた〜とっているのだ」

そういつて、鏡介が取り出したのは赤色の手帳みたいなものに金色の文字が書かれたものが八枚、パスポートだ

「鏡介!!!!!!」

俺は鏡介に飛びつく。
自然になぜか涙が出た。

「フッフ、照れるじゃないか我が親友よ」

こうして俺達はアメリカに飛び立つことになった。

「飛び出しは明日、夜桜さんとおじさんには一応パスポートの申請をしとくようにいっといてくれ」

俺は、夕のところから来た朝鈴に言う。

結局、俺と団と鏡介がアメリカに向かうことになった。
大河にはここに残ってもらうことにした。

「たのむぞ大河、もし夕が記憶を戻した時とか、逆に忘れそうになった時、支えてやれ」

俺が本気でそう頼むと、大河は「ままま、任せとけよ」という。
俺は急いでかえって準備する。

手続きは鏡介が済ませていて、朝一番で出発する。
俺は今までやっていた百枚ノート十冊をジュラルミンケースに入れる。

そして、一度夕の様子を見に行つてから絶対に直すと誓つて隣の部屋に荷物を置き眠る。

十月二十六日

「やっぱ、飛行機の中のせんべいってのもいいよね。至福だね」

「・・・」

「お茶は自分でもって来ればよかったな、市販のお茶だとせんべいの味の三割は損してるね」

「・・・」

「あゝもうちょっとせんべいもって来ればよかったかな、トランク一つじゃ足りないかもね、どう思う幸一」

「・・・」

「ねえ、幸一聞いてる？」

光が寝ている振りをしている俺に話しかけている。

現在飛行機は太平洋上空を飛行してる。

俺、鏡介、団は朝一番で出発して飛行場に向かって、予約したはずの席を搭乗口で確認するはずが、俺の隣に別の人が入っていた。

『市川 光』

と言う名前が

その後、俺と鏡介の席の間に光が入ってきたのは言うまでもない。

そして、彼女が鏡介と同等かそれ以上の不思議な力の持ち主なことは前回明らかになったので、おそらく俺達がこうしてアメリカに行く理由も夕の状態も知っているのだろう。

「夕ちゃんと幸一が付き合ってるのも知ってるよ」

どうしてこの人たちは人の心が読めるのか

「「愛の力」」

鏡介と光はハモリながら同じ事を言う。

「私結構寂しかったんだよ。幸一何も言ってくれないし、相談ぐらい乗ったのに、舞台の上で相手に告白させるなんて」

「そっちの相談かよ。おまえらには隠し事できない」

その後、修学旅行の後から今までの俺達に起こったことを話させられる。

せんべいを皆で食べながら。

団は目の前の映画に夢中になっていた。

有名な魔法使いの話で、一回原作を光に勧められたが、全七作といわれた瞬間時間が足りないといって諦めた。

団にそのことを言ったら、よほど気に入ったのか、光に貸してくれないかと聞いていた。

そんなこんなで、長い間飛行機に乗って、何事もなく無事に着陸した。

見事な晴天で昼だった。

かなりだるい、これが時差ぼけと言っやつだろうか？

海外に来たのは初めてなのでかなり驚きだ。

鏡介と光は来たことがあるらしい。

到着して空港から出ると同時に携帯に電話がかかる。

電話番号はもちろん非通知、そして電話にでると思いつきり英語だった。

「幸一、君らは今四人でいて、男三人、女一人ですか？」

昨日最初に出た女性の人だった。

俺が、「はい、そうです」と答えると、サングラスをかけて、黒の

スーツ、金髪の長い髪をポニーテールにした人が携帯を持っている人が肩を叩いてきた。

「誰だ」

そういつて俺とその女性を囲む形で光、鏡介、大河が構える。

「動くな」

そういつて女性は銃を取り出し俺に突きつける。

鏡介は俺を助けるために飛び出す。

俺はただ固まっているだけだった。

「パーン」

周りの人がこちらに注目する。

銃の先から出てきたのは四本の花、そして一本一本を一人ひとりに渡す。

どうやら向こうはこつちのことを調べ上げてるみたいだ。

そして女性はこの花が研究所のパスだという。

絶対になくしてはいけないみたいだ。

おそらくなくしたら鏡介や光でも入れないだろう。

黒い車に全員乗るが、それでもスペースに余裕が出来るほどの車だった。見た目は普通と大差がなかったので驚いた。

車の中では、女性がずっとしゃべりっぱなしだった。

「申し遅れました。私の名前はロベルト・リンナ、あなたがたがたずねる人の末っ子です。リンナって呼んでくれればいいわ」

その後俺達も一人ひとり自己紹介をする。

団と鏡介の時は俺が同時通訳する形になった。そしてその後はリンナの質問が次々に来る。夕の事、今までの勉強したこと、最近のスケジュールまで聞く。どうやら車の通ってる道を覚えさせたくないみたいだった。

二時間ほど車の中にいただろうか？さすがに尻が痛くなってくる。団は映画に夢中になっていたためかぐっすり眠っていた。車が止まる。

外を見ると、警備の人が本人確認をしている。ここからレンガの大きい建物が見える。

そこからここまで、一本の道が通っていて周りに林みたいに木がたくさんあった。

俺は団を起こそうとする。すると鏡介は

「フッフ、俺にまゝかせろ」

そうして鏡介は団の隣に移動して、慌てた風に

「団！大変だお前のパソコンに水が、香の壁紙が」

団は慌ててパソコンを開く。

そして、データフォルダを確認する。

どうやら本当に香を壁紙に、それを確認した俺と光は固まり、鏡介は大爆笑そして団は少し頭を整理して、理解したのか顔を真っ赤にさせる。

車を降りて、大きなレンガの建物に入る。

窓の数を見るとどうやら5階建てみたいだった。

中に入ると、白髪に赤いめがねで細身の老人が立っている。

白衣が大きすぎるのか、足元まで届いている。

「やあ、きみが幸一君だね」

そういつて光に抱きつく。

「ゴスッ」

ものすごく重そうな椅子を片手に持って殴ったのはリンナだった。

「おいおいリンナ冗談だよ冗談、それに抱きつくぐらい普通じゃないか」

「その左手をどかさないと『F』と同じところに行くころになりますよ。」

そういつと、光の体を触っていた手をどかし両手をあげる。

俺は光に

「何で何にも言わないんだ」

とたずねると、せんべいを取り出して

「あれ、私はまだ幸一のこと好きなんだよ。助けてもらうの待ってたんだよ。ふっちよつと湿気てるけど至福だね。」

「しかし『F』の息子が、似てるのは目ぐらいか？あいつはもっとごつかったからな、しかし目は同じだ懐かしいよ」

ハース氏はそういつて俺の肩を叩く。

その後、俺達は個室に連れていかれる。

すると背の高い金髪の男の人が立っていた。

おそらく四十代前半ぐらいだろうが、外人の年齢は分からない。

「彼は『H』と呼んでくれ、現在は私の元で右腕兼講師をしてもらっている。そして、早速だが夕さんの様態の説明をしてくれ、出来るだけ細かく。」

その後俺達は三時間かけて、夕の様態のほかに性格や今までの経緯を話した。

その後、俺はハース氏に呼ばれて、鏡介たちと離される。

そして、とても嚴重な鍵がかかっている部屋に連れて行かれる。

ハース氏は少し深刻な顔をしている。

「夕さんははつきり言ってやばいだろう。そして、現在脳付近の部分の手術は放射線を使われている。しかし、少しでも残ってしまったらまた同じことの繰り返しだ。つまり人間の手で切開手術を行わなければならない。しかし、人がいない。アメリカを探しても脳の専門医は確かにいるが、半年は予定で埋まっている。これは、私の予想だが、今まで夕さんが難聴だけで過ごしていたのをみると・・・いやこれは検査を見てからにしよう。ここからが大事なのだが、脳の手術には最低五人は必要だ。私と『H』、リンナ、そして『R』は呼べば来てくれるだろう。残りの一人それを幸一君、君にやってもらう」

俺は一瞬固まる。

そして、何か言葉を言おうとした時、ノックがなる。リンナだった。

そして、ハース氏に紙を渡す。

リンナが部屋を出た後、今度は全ての鍵を閉める。

「今から三ヶ月、君にこのプログラムをやってもらう。医師免許が

ないのももちろん手術はこの研究所で内密に行く。もしばれたら、私は刑務所の中かもな」

俺は渡されたプログラムを見て驚く。

一枚目に書かれていたのは円グラフだった。

睡眠夜の二時～五時、そして昼の十三時～十四時とあった。

そのほかは、専門的なことばかりだが、とりあえず朝勉強、昼寝後実践と言うことだけは分かった。

しかし、もっと睡眠時間が短くてもいける気がする。

「もっと睡眠時間短くてもいけます。それに昼寝って何ですか」

「だめだ、君は三カ月間これをやり続けるんだぞ。続けなきゃいけないんだぞ。そして決して倒れてはいけないんだ。これに従いなさい。」

これが、現在、最高の外科医といわれる人か、俺はあまりの威圧感だまって頷く。

そして、俺は部屋に戻り紙を見直す。

鏡介たちは別の事をやるみたいだ。

俺はポケットの中に入れっぱなしの指輪を手取る。

ピンクの宝石が光っていた。

十月三十日

夕

三日前、ここではない場所で検査をしたらしい。

二日前、ずっと姉さんと本を読んでいたらしい。

一日前、色々な人が来たらしい。

全部今日姉さんから聞いたことだ。

さつき私はどうやら姉さんをかなしませたらしい。
ただお腹がすいたと言っただけなのに、最近私は色々な人を悲しま
せているようだ。
部屋の隅には知らない人が昼間の間座っている。
時々姉さんと話していたので、姉さんの知り合いかも知れない。
腕に重みを感じる。
腕に何かついている。
何かの花は分からない、けど冷たいはずの金属が暖かく感じた。
一瞬男の子の姿が思い描かれた。
その瞬間に部屋の隅の知らない人が立ち上がったが、また座りなお
した。

幸一

靖彦からメールで検査結果がきたのは今朝のことだった。
電話でも話したが、まさかの結果に落ち込みとあせりが感じられた。
とりあえずメールで写真を見た限り、中耳癌で間違いはない。
そして、ハース氏の予想どおり、脳にまで届きそうだった。
時間がない。

「ワンハッピー、休憩終了だぞ」

俺は『H』に呼ばれて、十畳ぐらいの部屋で『H』と二人で勉強を
始める。

ちなみにワンハッピーとは『H』に幸一の意味を教えてくださいと言わ
れたので教えたら、呼び名がこうなった。

『H』は見た目とは違い気さくであるが、勉強中は厳しい。
勉強は五五分やって五分休むを繰り返す。
アメリカ人は時間にルーズだと思っていたが、かなり正確に勉強す
る。

渡されるのは主にプリント、なぜか日本語訳されているのと、英語

のままのしりょうだった。同じ内容ではあるがこのおかげで分かりやすい。

これを昼まで繰り返す。

その後一時間昼寝、その後は、夜の営業終了まで、ハース氏、リナ、『H』それぞれの先生の見学をする。

手術もやるので参考になることばかりだと思う。

その後ハース氏と『H』で手術の練習として今日は

「今日は人間の皮膚を模型としたものを切る練習とそれをくっつける練習だ。『H』よ手本を」

「はいはい」

そういつて『H』はメスを取る。

その瞬間に目つきが変わる。

そして、あらかじめ切る場所が決まってるかのごとく綺麗になおかつ滑らかで早い。

そして、くっつける時は最近では糊？見たいなものでくっつけるらしいが、糸を華麗に使っていた。

そして、二十分ぐらいでそれが終わると、『H』はにやけて

「さ〜次はワンハッピー、君の番だ」

「はい」

俺はそういつて皮膚の模型に触る。

自分の肌と変わらない。

おそらく、これに毛をつけたら分からなくなるだろう。

それくらい精巧に作られていた。

俺はメスを手に取る。

初日はとにかく持ち方をずっとやらされた、渡し方が少し違うだけで事故になりかねない。

おかげで持ち方は覚えた。

俺は『H』の見よう見まねで切り始める。

後ろで三人の鋭い視線を感じる。

少しの力で簡単に切れる。

つまり慎重にならないと本番で切りすぎたらおしまいだ。

しかし、慎重になりすぎると時間がなくなる。

なるほどこれはしんどい。

『H』と同じ事をしたはずなのに、体は汗まみれで時間もギリギリ倍かからなかったくらいだった。

終わった後、三人の意見が飛び交う。

俺はお世話になってる百枚入りの大学ノートに全てメモする。

そして終わるころには次の日の二時、俺は寢床に着く。

不意にトイレに行きたくなったので部屋を出る。

普段は近寄らない図書の本棚から光がこぼれていた。

中をのぞくとそこには

「・・・団、鏡介」

俺は驚きに言葉を出す。

そこには大量の紙、本そして寝ている鏡介と団だった。

一枚の紙を取るとそこには、ちょうど今日勉強した部分の資料だった。

「夜のせんべい、静かな闇だから言い響きだね」

「光」

俺の後ろには光がせんべいを啜えて立っていた。

「すごいよね、ただでさえ幸一の勉強量とスピードは半端ないのに、この果てしない資料の中から、本を選んで訳すんだからね、この人たちせんべいも食べないんだもん」

俺はこいつらに何か出来るのか？

「そりゃ夕ちゃん直すしかないでしょ。見たよ夕ちゃんの結果、ハースさんも間に合っつて言ったんだよ。まっこれでも食べて頑張れ」

そういつて俺は海苔せんべいを光から受け取り、何も言わずに足早に部屋を去る。

ここぞなにか言ったら泣きそうな気がしたからだ。

もう泣かない、泣く時は夕がみんなと遊ぶ時だ。

俺は部屋に戻り、先ほどのメモは再び読み返してから眠る。

こんな日がしばらく続いた。

一月三十日

一週間前から夕は研究室に来ている。

タイミングは完璧といわざるをえないだろう。

夕が来てから二日後、夕は姉である朝鈴の事も忘れてしまった。

もし、来る前に朝鈴の事を忘れてしまったことを思うと怖い。

朝鈴本人は気にしない振りをしているが、実は本当に悲しんでると思う。

当然そこらへんは皆気づいているわけで、俺以外の皆がずっと一緒にいたらしい。

光がこっそり伝えてきたが大泣きしたらしい。

実際大変だったと思う。

記憶喪失で怖いのは、食事したことを忘れてまた食べたいっていたり、いつの間にか外に抜け出したり、急に声を発したり他にも語りきれないほどの苦勞があると思う。
それを朝鈴は、夕が覚えているただ一人の存在として三ヶ月間ずっと世話してきたんだ。

「フフフ、ついにこの日が来たか」

「鏡介」

「ながかゝったぞ、実にながかゝった。こんなにまじめに働いたことないからな、俺は今日爆睡して待ってゐる。目が覚めるまでに治せよ。我が親友に不可能はない！！！」

そういつて鏡介は抱きついた。

そして鏡介は耳元で「よく頑張った」と言う。

「・・・」

「団」

「・・・こんなとき難しい励ましの言葉でも掛けられたらどれだけうれしいか」

団の会話の最初の空白、俺はいつもの的確な言葉を表すための時間だと思っっている。

俺が団の立場でも言葉なんか見つからないだろう。

団はうつむいてただ一言、小さな声で

「・・・頑張れ」

「おう！」

俺は団の不安が少しでも振り払えるように少し大きめの声を出す。団は俺の声に少し驚いたみたいだが、少し笑顔になっていた。

「まったく、大変だったんだからね、一人で千番以内に入るの、それに団にも会えないし」

と香だ、そう文化祭の時の校長との約束、香は一人でこれに挑んだのだ。

「これはそうだね、これからの態度で返してもらおうかな、団と幸」

「……はい」

俺と団は同時に返事をする。

「まあ、僕がいたおかげで、全ては無事解決だよ」

「ああ、ありがとな大河」

俺は素直に思ったことを言ったのだが大河は目を見開いた。

「だめだよ。お前らは僕を馬鹿にしないと調子狂うだろ。それに俺馬鹿だからなにも出来ないし、だから笑わそうと思ってたのにそんな目で見つめないでくれ」

「まったく、俺や鏡介がお前の秘密を知らないわけないだろ、だけ

どそれでも言葉で伝えさせてくれよ」

かつて神童と呼ばれていた少年がいた。

『菊池 大河』

詳しくは知らない、でも人の心が読める力を持った少年、いつも馬鹿やってる俺達とぶざけ合う仲間

「ありがとう大河」

「う、うるさいよ。感謝するの早いよ。全て解決した時銅像作ってもらうからな、とびきり小さいの」

なぜに銅像、俺は疑問に思う。

そして目の前には朝鈴。

朝鈴は俺を近づき、顔を俺の胸に押し付ける。

「遅い」

「本当遅いんだから、必ず戻ってくるって三ヶ月よ。しかもこつちから来ちゃったし、本当信じられない。本当、本当、夕治さないと一生口聞いてやらないからね」

「ああ、任せろ、お前はゆっくり休んでろ、今まで辛かったらう」

「馬鹿じゃないの!?!」

俺は朝鈴のいきなりの声に驚く。

「休めるわけじゃないじゃない。ずっと起きてるんだから、あんた一人に辛い思いなんてさせない。絶対手術室前から放れないんだから」

「トイレはしつかりいけよ」

「パシンッ」

見事にビンタされる。

「ワンハッピー、時間だ」

『H』に呼ばれて俺は皆に

「じゃ皆、半日後また会おう」

俺はそういつて手を上げる。

皆思い思いの言葉を叫ぶ。

俺は集中か緊張か分からないけど、それらの言葉が聞えなかった。手術の準備室に行く途中に光と会う。

「まさか、光が看護師の免許持ってたなんて・・・予測できたけど」

「ふふ、ありがと」

そう、光はハース氏にお願いして手術に参加することになった。

「だけど、心配なんだよ。ハースさんは成功率七割って言ってたけど、あれって五年再発しない確立だからね、『R』と『H』の実力は私も見たけど、私は完治する確率はいいとこ五割、手術するにはちよつと分が悪いの」

俺は光のせんべいを奪い取って、食べる。

「うん、至福だね。大丈夫心配すんなよ。光はそばで見てるだけでいいんだよ。」

「やっぱ、夕ちゃんが治ったら夕ちゃんと幸一を争って取るのかな、いわゆる三角関係？」

そして一息おいた後

「よし、行きますか」

見事にハモる。

二人で笑う。

手術準備室に入るとそこには『H』とリンナ、そして夕が来た日に来た『R』がいた。

どうやら、元々豪邸のお世話係として働いていたが、ハース氏に引き取られたらしい。

肌の色は日本人と変わらないが、真っ赤な髪の毛がとても印象的でリンナと同じ年とは思えないほど若い容姿をした女性である。五歳の頃から、俺の親父も含めた人達の腕を見てきたらしく。

一週間しか見てないが、腕前は圧倒的なものを見せられた。

ちなみに、俺を見た時は思わず『F』と呼んでしまったが、それからは必要最低限のことしか話してない気がする。

俺が見る限り、ハース氏以外には慣れていないみたいであまり話している姿を見ない。

ハース氏が入ってくる。

皆の集中が更に高まる。

ハースはいきなり

こうして、手術が始まった。

アフターストーリー

After Story 五年後

「パン、パン」

俺は墓の前に立って手を合わせる。

お盆は忙しかったので、墓に来るのが遅くなり、前にこの街に来た夏の終わりからちょうど五年が経った。

墓の上には髪飾りがある。

本来祈るだけで終わりだった俺に希望を出してくれた髪飾りだ。

「我が愛の親友よ、そろそろ時間だぞ。」

俺はかつて『F』と呼ばれた親父の墓を後にする。

鏡介の所に向かう途中、小春が俺の目の前に現れる。

ちなみに今の名字は高橋である。

小春の母さんは四年前に亡くなった。

話し合いの場を設けて、話したのだが相手にならず、その一カ月後に泣くなった。

晴彦が言うには小春の母さんの体はぼろぼろだったらしい。

その後九州の親戚が現れたが、小春が俺になつてしまったり夜桜さんとおじさんがものすごいかわいがってしまったりしていて、それに気づいた親戚の優しそうでちょっと膨れたおじさんは「小春の好きにしてい」と言った。

小春は答えを出すのに一週間ほど悩んだ。

自分と兄である狼の名字が変わることが一番の悩みだったみたいだ。遺産面に関しては元々金持ちではあったが地主とかではなかった

め、家やSPなどを売り、全て貯金したらしい。俺はその時とてつもなく忙しかったので細かい話は全部後で聞いたのだ。

「狼の墓綺麗にしてきたか？」

「お盆にもやったんだけどね、それよりも幸一兄さん今日は大事な日なんだから、行きましょう。」

こんな小春もいまや大学生で日本を代表するランナーである。来年開催のオリンピック代表候補で現在日本の不動のエースが一人残りの二席を小春も含めた四人が争っている。新参者の小春は少し不利かもしれないが来月の大会で全てが決まる。まだチャンスはあるのだから頑張ってほしい。

鏡介のヘリコプターに乗る。

中には俺と鏡介、小春の他に団、こいつと結婚した香、それに……

「だれだっけ？」

「うわっこの人分かってるのに、僕だよ僕、詐欺じゃなくて大河、菊地大河！！」

だ、団は現在中学生社長で有名になったゲーム会社の右腕として活躍している。

香はそんな団を支えている。

きつと急に東京に出たからなれないことも多くて大変だと思うけど、電話で時々話す限り元気そうだ。

大河は二狼して大学に進学、かつて神童としてなごりで人の心を読むことが出来る彼は、心理学の勉強をしていて、そっちのセラピー

関係に進むらしい。

なじられるのが好きなあいつにとっては、何でも言われる職業、あの意味天職だろう。

「失礼なこと言わないでくれません」

そんなことを言う大河を無視して

「あれから五年でしょ、さらに会うのは三年ぶりなのに皆変わらな
いね〜」

「フッフ、これも愛の力」

「・・・前見るよ」

団が後ろを見ながら運転する鏡介に呆れ顔で注意する。

「けどまさか、いや鏡介だから仕方ないか」

香があきれながら言う。

あれを狙ってやる事が出来る人間は・・・鏡介恐ろしいな相変わ
らず。

鏡介とはずっと会っているというか仕事の関係上合わざるをえない
のだ。

俺はあれからハース氏のコネもあり二年間向こうで勉強して医師免
許を取得。

ハース氏の弟子という噂が流れてしまい、一時は大変だった。

あの日の事は内密になっている。

ばれたらただではすまないだろう。

言葉でいうより大変な事実が起きるだろう。

現在では『H』の病院の日本支部の地位で言えば助教授扱いのものをもらっている。

鏡介は現在医療の薬品の方の研究をしている。
陰ではものすごい薬を開発したとかしてないとか・

「フッフ、それは事実かもしれないぞ」

「お前は、運転に集中しろ」

鏡介は俺の心だけ読んでくる。

本人は愛の力と言っているが、実際はかなり怖い。

「でも、せつかく本当の兄弟になったのに、三年前の結婚式からあつてなかったんですから、さびしかったです。」

「そりゃ、コウは今や若手医師のホープですから」

「一年間ハース氏には悪いことしたからね」

「フッフ、着いたぞ」

俺達は病院に着いた。

入るとそこにはせんべいを食べている白衣姿の光がいた。

光は医者になった。

俺と一緒にコネを使い、現在では小児科と産婦人科両方を受け持っている。

「へりで来るとか相変わらずだね・・・うん至福だね。」

光はせんべいを食べて、お茶を飲む。

「世間話はおいとして、先行くよ俺」

そういつて、俺は走る。

医者が病院内走るのもどうかと思うが、俺は走った。

今日は最後の検診なのである。

夕と・・・

「祐一！！！！」

「静かにしなさいよねあんた」

そういつて、注意してくるのは朝鈴、そして当然の事ながら鏡介はもう着いている。

そして

「コウ君、やっと着いた。待ってたんだよ」

ベツトの上にいる夕が、話しかけてくる、

夕がああ誕生日の日に渡せなかった指輪をはめている。

結婚式にも指輪を渡したはずだが、ずっとこちらをつけている。

そして、男の赤ん坊を抱いている。

名前は祐一、俺と夕の子供である。

検査とは、母子共に大丈夫だったら今日家につれて帰れるのだ。

「あ~~~~」

赤ん坊が大声で泣き出す。

祐一ではなく、今鏡介が抱いている女の子、名前は京である。

先ほどの会話のあれとはこのことである。

まったく同じ日に夕も朝鈴も出産したのだ。
光は両方の担当だったため、一日寝れなかったらしい。
そして、実際の小春の実際の義兄となった。
鏡介とも兄弟と言うことになったのだ。

「まったく、また泣き出した。誰に似たのよ本当に」

皆が朝鈴をみる。

朝鈴は「何？」とものすごい形相で睨み付けてくる。

そこで大河を先頭にみんな入ってきたのが間違이었다。

大河は蛇ににらまれた蛙のごとく固まってしまう。

あの日、夕の手術が終わった後驚きの連続だった。

今までしゃべれなかった夕が透き通った声で最初にしゃべった言葉が

「あれ、だれ？」

である。

なにに驚いていいか分からなかった。

いきなり夕がしゃべったこと、そして俺達が誰か分からなかったこと。

その後、話を聞いた後、夕の記憶が俺がいなくなった時からつまり親父が死んだ時から、手術までの記憶がない。

それを埋めるために一年間を夕のために皆が費やした。

そして、手術後の夕の最初の誕生日に俺は告白して、一年度しに指輪を渡す。

「長かったな」

「フッフ、これからはもっと忙しくて長くなるぞ、俺達の孫を見な

いとけくないからな」

「結婚させる気!?!?」

「こういう場合どうなんだろ?」

俺がそんな風に思っていると夕が俺のほつを向いてくる。

「さあ、うちに帰ろっか」

「はっ」

C u R e (完)

アフターストーリー（後書き）

この作品は3年前か2年前に受験勉強の合間に書いた物で、理系の自分が書いたので文法めちゃくちゃ誰が話してるかわからないキラの暴走などとてもひどいです。

しかし、今さらながらよくこんな量書いたな〜と感じました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709f/>

CuRe

2010年10月24日02時25分発行